
仮想現実世界戦記

lunatita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想現実世界戦記

【Nコード】

N3384H

【作者名】

lunattita

【あらすじ】

気付いたら異世界に飛ばされた1人の男子高校生。そこで敵から逃亡中の少女と青い甲冑を着た仮面の騎士に出会い、物語は展開されていく――。

1（前書き）

無駄に長い小説ですが、良かったら読んでやってください。

オレは何の変哲もないただの一般市民だ。

一人っ子の三人家族だが、それなりに平和で楽しく暮らしている
平凡な高校生だ。

初段になったばかりであり強くはないが、剣道部に所属。

幼馴染みのアイツも剣道部だ。

趣味は主にテレビゲーム。

最近は一P Gに凝っている。

学校での成績はそこそこ。

女生徒からの評判もそこそこ。

ルックスもそこそこ。

悪い部分も無ければ、飛び抜けて良い部分も無い。

そんなそこそこだらけのこのオレが、

何で朝起きたらこんな森の中で寝てるんだ？

少なくともオレの記憶が確かなら、住宅地の一角にあるオレン家の
周辺にはこんな森は存在しない。

オレン家は？ 父さんは？ 母さんは？

近所のがきは？ オバサンは？

幼馴染みのアイツは？

ここは一体何処なんだ！？

いや、よく考えて思い出せ……。

確か、昨日の晩にゲームしてて……。

んで、疲れたから寝て……。

……。
そこから全く記憶がない。

夢遊病のわけないし、魔法が使えるわけでもない。

オレが寝てるあいだに誰かが運んで、『ドッキリカメラ！』か？
いや、それにしてもいつまで経っても仕掛け人が現れない。

質の悪いいたずらか？

それにしても大がかりすぎるし、そんな手の込んだことをオレにするメリットが果たしてあるのか。

考えれば考えるほどワケわからん……。

*

*

*

『居たか？』

『いや、見失った』

『そんなに逃げ足は速くないはずだ。何処かに隠れているに違いない』

『探せ！！ 探して引つ捕らえろ！！ 王女以外は殺しても構わん！！』

銀色に輝く甲冑に身を包み、剣や槍、弓を手にした中世ヨーロッパ風の兵士が数十人、森の中を金属音混じりの足音を響かせ、過ぎ去っていく。

散り散りに分かれ、草の根をかき分けるようにして何かを探している。

探し物が無いと分かると、また別の場所に移動していく。

大勢の足音が過ぎ去ると、茂みの間から眼が二つ、辺りを覗いた。用心深く辺りを見回しながら、それは静かに物音を立てないよう、ゆつくりと立ち上がる。

その数はひとり。

赤いマントを羽織り、青い甲冑に身を包み、兜に仮面を付けている騎士。

いや、もうひとり居た。

地味な格好をしているが、ハツと見張るような美貌の少女。

少女は、艶やかなブラウンの長髪を少し揺らすと、仮面の騎士の手を取り立ち上がる。

その二人は、兵士に気付かれないよう忍び足でその場を去っていく。

*

*

*

ここは何処だ？

何処なんだ？

オレは叫びたい気持ちを必死にこらえ、ワケわからん森の中を取り敢えず歩く。

裸足だから足の裏を地面に転がった石や木の枝がチクチクと突いて痛い。ガラスの破片がないだけまだマシだが。

そして、歩けば歩くほど方向感覚がなくなってくる。

一陣の風が、オレの身体を撫でていった。

Tシャツに短パンしか着ていない為、やたらと肌寒い。

寒い？

寒いだと？

今は七月だぞ？ 寒いなんておかしいぞ？

いや、おかしいのはオレか？ ここか？

いきなり、オレの横の茂みから不自然に葉と葉が擦れ合う音が聞こえてきた。

何だ？ ケモノか？ 魔物か？ モンスターか？

オレは咄嗟にそこら辺に落ちていた木の枝を拾い、正眼に構え、とりあえず素手よりはマシだ。

しかし。

「！！」

出てきたのは、何と銀色の甲冑に身を包んだ中世ヨーロッパ風の歩兵を連想させるような奴だった。

何だこいつは。

何でこんな歴史の教科書に載せられているようなヤツが、ここに居るんだ。

北欧歴史マニアのコスプレか。

「！！ 怪しい奴！」

オレを見た途端、そいつはいきなり腰に下げている剣を抜いた。

銀色に光る艶やかな物体。

包丁をロングサイズにした様な物体。

……真剣？ 真剣なのか？

銃刀法違反だぞ？

警察に捕まるぞ？

ヤバイ。

ヤ・バ・イ――。

その本能ともいえる危険な予感に、足が一步後退する。

瞬間、銀色の光が一閃。

風を斬る、鳥肌が立つような効果音に、オレは背中に冷たいものが流れていくのを感じた。

正眼に構えた木の枝が、上半分程無くなっている。その事に気付くと、

に、逃げる――！！

考えた瞬間、オレはそれを行動に移した。
脇目もふらず脱兎の如く走り出す。

石ころや木の枝を裸足で思い切り踏む痛みは、気にする余裕が無かった。

「待てっ！」

ガチャガチャと金属音混じりの足音を響かせながら、そいつはオレの後を追ってくる。

しかし、重そうな鎧を着ているのが災いしたか、足は遅い。

オレは一気に振り切って、茂みに身を隠した。

数十メートルくらい離れた所で、オレを探してキョロキョロしている兵士が見える。

そして、去っていく。

ホツと胸を撫で下ろすオレ。

しかし用心の為、茂みの中を音を立てない程度のほふく前進で進む。

ガチャガチャと金属音の混じった足音が聞こえてくると、息を殺してジツとする。

通りすぎるとまたほふく前進をする。

そんな事を続けて進んでいるうちに、辺りが急に薄暗くなった。

日が暮れるにしては、いきなりすぎる。

周囲を見回してみる。

すると、ある一点へ視線が釘付けになった。

白く透き通るような棒状の物体が二本。

木にしてはヤケに細い。

その付け根に付いている薄いピンク色の布。

こ、コレはもしかして……。

ソレに指先が触れた瞬間。

いきなり、周囲が明るくなった。

次に聞こえてきたのは、耳をつんざくような甲高い悲鳴。

「きゃあああああああぁぁぁぁぁっ!!」

「はわっ!!」

その声は全身を痙攣させる程オレの心臓を強く鼓動させた。心臓病患者なら即昇天だ。

そして、慌てて立ち上がって悲鳴を上げた主を見る。

そこにはゲームに出てくるような姫みたいに綺麗な少女と、青い甲冑に身を包んだ仮面の騎士が立っていた。

オレはどうやら少女のスカートの中に潜り込んだようだ。

こっちの仮面の騎士は見たところ、オレを襲った兵士とは違う。

突然の出来事で状況が飲み込めないのか、固まっている二人。

徐々に状況が分かってくると。

少女はオレを見るなり青ざめ、仮面の騎士はカタカタと震える手で抜刀し、襲いかかってくる。

その剣はやはり真剣。

「ぬおっ!!? ちょっと待て!!」

オレの声は完全無視で剣は真一文字に一閃される。
シャツの切れ端が宙を舞う。

オレの胸元に横一直線の赤い筋が作られる。

「——ぐっ!!」

激痛が走り、オレは思わずその部分に手を当てる。

その手には真っ赤な鮮血が付いていた。

それを目の当たりにすると、仮面の騎士は更にガタガタと震えだす。

「ユ、ユースの手の者め! ひ、姫様は誰にも殺らせはせんツ!!」

震える声を絞り出し、切っ先にオレの血を少し付けた剣をブンブ

ン振り回してくる仮面の騎士。

「ゆーねす？ 姫？ 何を言っているこいつは。」

力任せに大モーションで振り回してくれるから何とか避けることができるが、このままだといつかは直撃してしまう。

「ま、待て！ 危ねえだろうが！ や、やめろ！ オレは敵じゃない！」

いくら技もへったくれなくても、真剣を振り回されるのは非常に危ないし恐ろしい。

仮面の騎士が、一瞬止まるが。

「た、た、戯言を！ そんな言葉にダメされるか！！」

ブルブル震えながらも、再び剣をブンブン振り回してくる。

今思うと、『オレは敵じゃない！』『そうなのか！ すまなかった！』ってのも考えものだ。

「おわっ！ ちょ、ちよつと待て！」

ここでこいつの剣を止めなければ有無を言わずあの世行きた。

そんな危機感が奇跡的な動体視力と無駄のない動作を一時的に生み出し、剣を空振りした仮面の騎士の身体は大きく体勢を崩し、泳いだ。

これが最初で最後のチャンスだ。

しくじればオレの命はない。

剣の柄を握っている両手、それを――掴む！

オレと、仮面の騎士の身体がブルブルと震える。

「ぐ、ぎぎ、オレは丸腰だ……。お、お前は丸腰の人間を斬るのか

……」

「し、信用できるかつ……ぐぐ」

更に剣を持つ手に力を込めてくる。

物凄い力だ。火事場の馬鹿力ってヤツか？

こ、こんなイベントで死にたくねえぞ。ここで死んだらアホみたいじゃねえか。敵と勘違いして斬られたなんて、エキストラもいい

とこだ。

剣の切っ先が、オレの額に段々近づいてくる。
ち、ちくしょうっ。

「やめて!!」

少女が澄んだ声で叫んだ。

それと同時にオレの額にめり込もうとした切っ先が止まる。

「ひ、姫様……?」

「もついいの。いくらユーネスの手の者でも人が傷つくのは見ていられない」

少女は、透き通るような緑の双眸を潤ませ悲しげに言った。

「そんなにオレは悪人ヅラかよっ」

胸元からダラダラと血を流しながらも、オレは訴えるが、さらりと流された。

「貴方、すぐに手当てをしたほうがいいわ。……どうぞ、私を捕まえて。それで血を流さなくて済むのなら」

オレの前に白く透き通るような肌の細い両手を、手錠でもかけてくれと言わんばかりに差し出してきた。

「姫様!!」

仮面の騎士が両手で兜を着けた頭を抱え、あたふたする。

「何だこの手は。握って欲しいのか?」

こんな美少女の手を握れるなんて、こんなチャンスは滅多にない。
だからとりあえず握っておく。

「……」

「……」

「……あ、あの……」

手を縛るなどの拘束行為をしようとしないうちにオレに疑問を抱き始めたのか、はたまたオレに手を握られてどうリアクションをしている

かわからないのか、少女の表情が困惑に変わってきたその時。

『こつちだ、こつちから女の悲鳴が聞こえた』

『姫だ！ 逃がすんじゃないぞ！』

ガサガサと草をかき分ける音に、ガチャガチャと金属音混じりの足音が複数、こつちに近付いてくる。

さっきの兵士だ。

とりあえずオレは少女から手を離し、ズキンズキンと痛む赤く染まった胸元を押さえながら聞いてみる。

「ひとつ訊いていいか？」

「な、何でしょう？」

「あいつらに捕まったら、オレもタダじゃすまねえよな？」

その問いに、仮面の騎士は首をかしげた。

「お前はユースの手の者ではないのか？」

「オレは武器も防具も持ってない。お前らが言う悪者は武装していただろうが」

最初に遭遇した奴は銀色に輝く鎧と剣を、確かに装備していた。

「……」

「……私と一緒にいるということは、捕まれば確実に貴方も処刑されます」

少女が恐ろしいことをスラッと言い、オレは顔から血の気が引いていくのが分かった。

「冗談じゃねえっ」

オレは少女の手を引いて走り出した。自分の力の限りとにかく急いで。

「おい！ 何をするつもりだ！？」

仮面の騎士がオレの行動に戸惑う。どうもまだ信用されていないようだ。

「逃げるに決まってんだろうが！ 捕まったら死ぬんだろっ！？」

『逃げたぞーッ！！ 追えーッ！！』

『逃がすなーッ！！』

ガチャガチャと重いヨロイの脚をフル回転させ、鬼気せまる表情で後を追ってくる兵士ども。

何本もの剣や槍が恐ろしい輝きを放つ。

捕まったら死ぬ。

その事を嫌というほど思い知らされる。

その恐怖がオレの隠れた駿足を一時的に目覚めさせたようだ。

だが、掴んでいた柔らかな手が軽い抵抗と共に急に重くなった。

少女が、オレの隠れた俊足に脚が付いてこれず転倒してしまったのだ。

情け容赦なく迫ってくる恐怖の対象。

悲しげな表情でオレにニツコリと笑いかける少女。

もういい、貴方だけでも逃げてと言わんばかりの表情。

転倒ですりむいた膝小僧、悲しげな表情を見て、オレは。

「あ！」

少女をお姫様抱っこした。

そして再び走り出すが、さっきよりスピードが遅いのは判りきっていた事。

いくら華奢な少女といえど人間が軽いはずもなく、更に今度はオレがズッコケないよう木の根っこに気を配りつつ全力疾走で、すぐに心臓がバクバクと悲鳴を上げ始め、オレのスタミナを容赦なく削ってゆく。

諦めたくない。

頭ではそう思っているても、身体はもう諦めると、スピードを落とせと命令してくる。後ろにはしっこく追ってくる奴らが居るというのに。

「くっ！」

その時、仮面の騎士がオレの手から少女の上半身を奪って肩に担いだ。

なるほど、二人で分担すれば負担は半分だ。

オレはそれに習い少女の脚を肩に担いだ。まるで大工が二人がかりで木材を運ぶ様だが、今は体裁を気にしている余裕はない。命がかかっているのだ。

運が良いことに、相手は重そうな甲冑を着ている奴らばかりで、あんな物を着て全力疾走していて体力が無くならないはずはなく、追ってくる金属音は徐々に遠ざかり始めた。

だが、

「おわっ！」

最早脚では追いつけないと見た兵士どもは、手に持っていた剣や盾を次々とオレらに投げつけ始めた。

どちらも当たり所が悪ければ死にかなないが、どちらかと言えば剣の方が危険だ。

狙いが逸れた剣や盾が地面に突き刺さる、転がる。

足首を掠めた時はさすがにヒヤリとしたが、それを最後に攻撃は止んだ。

そろそろオレも青い甲冑を着たアイツも体力が限界だ。

追っ手は数十人から数人に減っている。

しかし、足を止めればたちまち捕獲されるかその場で処刑されるかのどちらかだ。

今は戦って勝てる自信もない。

残り少ないスタミナで、オレ達はひたすらに走った。

ついに、森を抜けた。

しかも、何と都合のいいことに、数十頭もの馬が放置されている。これは多分、あの兵士どもの馬だろう。

「おおつ、何て取ってつけたような設定だ！ …… ぜえぜえぜえ…」

まるでゲームのようなシナリオ展開だ。

だが、しかし。

オレは馬に乗れない。

触ったことすらないのだ。

しかし後ろには迫ってくる恐怖の対象。

仮面の騎士は木にくくりつけられている馬のロープを素早く解いて、手綱を握る。

「早く乗れっ！」

いつまでも乗ろうとしないオレが馬に乗れないということを悟ったのか、仮面の騎士は後ろに乗れと言ってくる。

もう考えている時間はない。オレは仮面の騎士にしがみつきながら、後ろへ飛び乗った。

膝小僧を擦りむいた少女はすでに馬へ乗ってスタンバっていたように、仮面の騎士とオレが乗った馬が走り出すとすぐに後を追ってきた。

馬を全力疾走させて数分。

何とかあの兵士どもを撒いたようだ。

そして――。

いただいた馬で、あてもなく平原を歩いているオレ達。

仮面の騎士にしがみつきながら、辺りの景色を見回すが、見たことのある風景は一切出てこなかった。

遠くの方に見える幻想的な森。

頂上の辺りに少し雪化粧をしている見たことのない形の幻想的な山。

見たこともないファンタジックな動物。

ここはオレが住んでいた世界ではないということを、嫌というほ

ど思い知らされる。

そして、辺りが薄暗くなってきた頃、オレ達はゴツゴツとした岩が並ぶ岩場に馬を止めた。

仮面の騎士は、岩場の奥にケモノか何かの巣みたいな洞窟を発見する。

中を調べて、もう住居者が居ないことがわかると、野宿の準備を始めた。

仮面の騎士が、火打ち石と油紙を使って火をつける。

近くの雑木林から拾ってきた薪を入れると、すぐにパチパチと燃えはじめた。

火がついて、一息つく少女が口を開いた。

「あの、さっきは助けてくれてありがとうございます」

オレの顔を綺麗な緑の双眸で真っ直ぐ見つめながら、心底感謝するように言った。

何て可愛い顔だ。

「な、なあに、礼はいらんよ」

「お前は逃げただけだろうが」

仮面の騎士からツツコミを入れられた。

「やかましい、お前こそオレは敵じゃないって言うてんのに、斬りつけやがったではないか」

オレは、胸の傷に手をやりながら文句を言う。

しかし、その行為が災いした。

せっかく血が止まっていたのに、傷が開いてまた出血します。

病院に行ったら、多分10針以上は縫うかもしれないような傷だぞ。

「あててて……」

「わっ！ バカ！ 触るな！」

仮面の騎士が血を見て慌てる。

「と、とりあえず、応急手当をするからっ」

オレを無理矢理寝かしつけ、薬草の様な奇妙な葉っぱをすりつぶし、ガーゼのような布でオレの胸元の傷口に塗る。

「……ったく、何でオレがこんなヤツに膝枕されなきゃならんの……。ぎゃっ!？」

言っておくが、この行動はふざけてやってはいないぞ。真面目に痛いんだ。

電気ショックを受けたように身体が跳ねるのは仕方のない事だぞ。が、我慢しろ。すぐ終わる」

チョンチョンと少しずつ薬草を塗っていくが、それでも激痛が走る。塗る物を間違ってるんじゃないのかと思えるほどだ。

やっと激痛の薬草を塗り終わると、包帯のような布を巻き付けて、右肩で包帯を切って結ぶ。

そして、手当てが終わった。

ついでに、この少女の膝小僧も治療完了だ。

「あの、私はレミュリア・クリスエルムと申します。そして、この人は護衛のアルステールです」

レミュリアと名乗る少女。

オレはその顔をよく観察してみる。

「ふむ……、この美貌、言動、気品のよさ。君は何処かの姫だな」

「そ、その通りです。何故わかったのですか？」

美しい顔が、驚きの色に染まる。

「いくら地味な服を着ても、そんな美貌の持ち主は一国の姫ぐらいのモンだ」

こっちのアルステールって奴が姫様って普通に呼んでるんだから、誰でもわかると思うがそれは敢えて黙っておく。

「んで、お前。剣をあんな大モーションでブンブン振り回すだけじゃ姫様を守れねえぞ」

しかも剣を振った後ヨロけて、真剣を持ったこともない初段のオレに止められたんだから。

「あ、あれは無我夢中で……。いや、その通りだ」

案外素直に認めたアルステールは顔を伏せる。
すると、レミュリアが。

「仕方ないですよ、アルステールは女の子なんですから」
「へ？」

オレは固まった。

「い、今、何て？」
聞き返してみる。

「アルステールは女の子だって言ったんです」

「オンナ？」

「はい」

「こいつが！？」

「はい」

レミュリアは微笑みながら頷いた。

……マジか。

オレはアルステールを見る。

すると、アルステールはおもむろに仮面と兜をはずした。

仮面の下に眠っていた素顔を目の当たりにしてオレは軽い衝撃が走った。

青い艶やかな短髪に、レミュリアほどではないが艶のある白い肌。

ブラックブルーの双眸。

可愛らしい鼻梁。

全体的に見て、活発で可愛らしい印象がある。

こいつ、本当に騎士なのか？　っていうか、こんな騎士がいてもいいのか？

オレは急に、甲冑越しとはいえさつき膝枕をされた事を思い出した。そして、いきなり、どう口を利いていいのかわからなくなった。

「な、何だよ。黙るなよ。態度変わりすぎだ」

こいつもオレの態度の変わり様に少し慌てる。

「アルステールは可愛いでしょ。城の騎士たちにも人気がありましたからね」

「そんな、あいつらはみんな姫様を見てて……」

次にレムリアは、アルステールの腕を触る。

「身体を鍛えていますから、少々男っぽいですけど……」

「姫様、それは気にして……」

アルステールが苦笑する。

でも、そのくらいの筋肉なら別に普通じゃねえのか？

と、思いつつもそれを口に出来るほどオレはナンパ野郎ではない。

「あ、ごめんなさい！ つい……」

可愛らしい舌をペロツと出して謝るレムリア。

しばらく経った。

焚き火に赤くなった炭が混じりはじめた頃オレはぽつりと聞いた。

「ここ大陸名は何だ？」

まず世界を知る。これはゲームの基本だからだ。

すぐに答えが帰ってくる。

「ここはイリーン大陸です」

「いりーん大陸？ 聞いたこともない大陸だぞ？」

悪いが、ゲームでも聞いた事がない。

「知らないんですか？」

「知らん。ついでにオレの出身地は日本の山口県だ」

レムリアは首を傾げる。

「ニホン？ ヤマグチケン？ 聞いたことありませんわ」

「……。やはりオレは、異世界に飛ばされたみたいだな」

オレは考える。

何処かのマンガで『主人公が異世界に飛ばされて、諸悪の根源を倒したら元の世界に戻れた』っていうストーリーがあったな。

ひよっとすると、オレも同じコトをしなくちゃならないのか。
このパターンだと、クリアするまで帰れそうにないぞ。

でも、どうやってクリアするんだ？

攻略本もないし裏技なんぞももちろん使えん。

しかし、このまま何もしなければ、オレはこの世界に永住だ。

……仕方がない。

「よし、レミユリアちゃん。君の手助けをしよう」

目の前のイベントをこなす。

とつととクリアしてしまおうという事だ。

もう、こうなったらなるようになれだ。

このままジッとしてても、どうにもならねえしな。

「え、て、手助けって……」

「れ、レミユリアちゃん……ひ、姫に向かってレミユリアちゃんだと……」

当然の事ながら、レミユリアはオレの発言に慌てる。アルステールの方はなんか顔が引きつっているように見えるが。

「話してくれないか。あの兵士どもに追われていたワケを」

「は、はい。実は……」

オレはレミユリアの話を真剣に聞いた。

攻略本が無い分、ヒトが話している内容からヒントを得るしかない。

まあ、RPGの基本だな。

レミユリアが話した内容はこうだ。

この大陸、イリーン大陸には、クリスエルム王国というのが存在するらしい。

レミユリアはその姫で、兄である王子のユースと、母ちゃんと父ちゃん、つまり王と王妃の4人で暮らしていたとか。

何事もなく、平和な国だったらしいが、ある日、突然父ちゃんが死んだその日を境に、だんだん妙な方向へ話が進んでいったようだ。

父ちゃんが死んだ数日後、後を追うように母ちゃんが死んで、ついにユーネスと二人になっちゃった。

王位を継承したユーネスは人が変わったように圧政を繰り広げ、やりたい放題。そして性格も残忍で冷酷になったとか。

妹の抗議も聞く耳持たず、父ちゃんと母ちゃんを殺したのはユーネスではないかとレミュリアは疑った、それを耳にしたユーネスは、王を侮辱したとかなんとかいちゃもんを付けて、レミュリアを処刑しようとしたらしい。

実の妹に何て事を。

とんでもない奴だ。

見るに見かねたアルステールが、処刑前夜にレミュリアを脱獄させ、連れて逃げたとか。

「でも、こいつひとりじゃレミュリアちゃんを逃がすのは不可能だよな？」

「う、うるさいな」

「ええ、手助けをしてくれた人が居たんです」

レミュリアは急に、熱っぽい目で夜空を見上げた。

「へへえ、誰だい？ それは」

オレは興味半分で聞いてみる。

代わりにアルステールが答えた。

「クリスエルム王国四將軍の一人、ラムド・ガル様だ。ついでに、姫様の婚約者だ」

「な、何だと」

オレのアタマの中でガラスが砕け散った。

こういった類のストーリーは、姫様とハッピーなエンディングを迎えるんじゃないのか！？

しかし、んな事考えても仕方ないので、話を進める。

「お前、今、シヨック受けてなかったか？」

「う、うるさいな」

と、まあそんな事情で逃げまくって、あの森の中でオレと出くわしたってワケだ。

「素朴な疑問なんだが」

「はい？」

「何で、護衛の騎士が女なんだ？」

すると、レミュリアは少し頬を染めて、

「私の国のしきたりでは、異性の騎士が王子や王女の護衛をするこ
とは許されないんです」

「ほう、それは何故だい？」

オレはだいたい先が読めたが、敢えて聞いてみる。

「その……、私の父が元騎士で母が一国の王女だったんです」

「ふむふむ」

「母の護衛を任されていた父は、いつしか母に恋心を抱きはじめて、
母もそんな父を好きに……」

「んで、許されぬ愛を貫き通すため駆け落ちしたってか？」

「そうです」

「だから、こんなことが再び起こらないように、今のしきたりを作
ったってワケか」

「はい」

ふむ、三流のストーリーだ。

このパターンだと、クリアの条件はユースとかいう悪王を倒し
て、レミュリアを基盤に国を再建する事だろうな。

何にせよ、王国ひとつを相手にするってのは相当な戦力が必要だ。

「よし、レミュリアちゃん、クリスエルムを取り戻す為、そしてク
リアの為に助太刀するぜ」

すると、レミュリアの顔が輝いた。

「本当ですか！？ 今はひとりでも味方が欲しいところ。心強いで

す！ でも、くりあとは何でしょう？」

オレの手を柔らかな手で握りながら、歓喜の表情で見つめてくると、同時に、オレの世界では当たり前な言葉に疑問をぶつけてくるしまった。いつもフツーに使っている言葉だから、意味なんて考えた事なかったぞ。

とりあえず適当に……。

「そ、それはだな、オレの旅が終わるという意味だ。オレが住んでいる世界ではそう言うんだ」

うむ。間違っではないと思うぞ。

すると、レミュリアの視線が、更に熱くなる。

「何故、見ず知らずの私達に手助けをしてくれるのですか？」

「それは、クリアしないとオレの世界に帰れな……、あわわわ」

オレは慌てて口をつぐんだ。余計なことを言っていると話がややこしくなるからだ。

「不思議な言葉、見たこともない服装。そして、この世界の人間じゃないとおっしゃる。もしかして、神様？」

レミュリアの視線がとても眩しくて、目を開けていられない。――ことはないが、それくらいプレッシャーを感じるぞ。

「か、神なんてとんでもない。まあ、異世界から来た正義の味方ってところかな」

オレは冷や汗混じりに言う。

うーむ、まずいことを言ってしまったかもしれんぞ。

こんな事を言っというて、ゲームオーバーになったらシャレにならないな。

ゲームオーバー＝死――。いや、こんなことを考えても仕方がない。

オレはレミュリアの手をそつと離すと。

「そして、お前！」

アルステールに指をさす。

「な、何だよ」

アルステール、いきなり指名されて面食らう。

「オレが剣の腕を鍛えてやるから、覚悟しとけ」

ニヤリと、格好を付けて言う。

キマったぜ……。

何処かの冒険モノで剣豪が弱い主人公に向かって言うセリフだ。

オレも初段であまり強くはないが、あんなブンブン振り回すだけのこいつに比べればまだマシな方だ。竹刀でやり合えば勝てる自信はある。

しかし、オレもオレでレベルアップが必要だ。だからさっきの言葉はオレも一緒に鍛えようという意味だ。

「ふ、ふん」

アルステールは口を尖らせてそっぽを向く。

こういうトコロは意外に女っぽいな。

「よし、早速、反乱軍結成の為の作戦会議だ」

「ぱちぱちぱち」

レムリアが拍手をしてくれる。

「反乱軍……、何か物騒だな」

アルステール、眼を細くして呟いている。
それを聞き流して、

「まずは地図だ。地図を出してくれないか」

地図がなければ話にならん。

しかし、返事がなかなか返ってこない。

「おい、地図は？」

「無い」

うつむいているレムリアに代わって、アルステールが言った。

「は？」

ちよつと待て。

オレはもう一度聞いてみる。

「地図だよ。地図は？」

「無いって言うてる。ボク達は着の身着のまま必死に脱出してきたんだ。これ以外持ってない」

アルステールが腰の革袋に指をさした。

「ちよつと見せてみる」

オレはアルステールの腰からひったくるように革袋を取る。

「あ！ ちよ、ちよつと！」

中身を探してみると、薬草に、包帯のような布に、ガーゼみたいな布。

火打ち石に油紙。ほんのすずめの涙程度のお金貨。

んで、袋の底の方に、また布みたいな物が出てきた。

「何だこりゃ？」

「あ！ それは……」

オレはそれを広げようとすると、脳天に衝撃が走った。
アルステールがオレの頭を甲冑のグーで殴ったのだ。

そして、オレの手に持っていた布をひったくる。

「そ、それはボクの下着だっ」

顔が真っ赤だ。よほど見られなくなかったのか。しかし、

「な、何で下着が袋に……ぐふっ」

オレはずるずると地面に倒れる。

脳天にコブをひとつ作ったオレは、気を取り直して作戦会議を再開する。

「地図がないとすると……、今、ここが何処だか判るか？」

レミュリアを見る。

恥ずかしそうに首を横に振る。

アルステールを見る。

少し照れながらも首を横に振る。

——ちよつと待て。

「水と食料はあるか？」

「無い」

またも、アルステールにキツパリと言われる。

まあ、確かに死に物狂いで逃げてきたんだから仕方ないか。

——ちよつと待てい。

「狩りは出来るか？」

「したことがない。もちろん姫様も」

またまた、アルステールからキツパリと言われる。

まずいではないか。

ついでに言っておくが、オレも狩りなんぞしたことがない。狩人じゃないんだから。

右も左もわからない。

水も食料もない。

砂漠のド真ん中じゃない事が不幸中の幸いだ。

*

*

*

「何か見えるか？」

「暗闇だけだな」

オレ達は今、馬に乗り、当てもなく何処かへ進んでいる。

もちろん、オレはアルステールにしがみついて乗っている。

本当はレミュリアちゃんの馬に同乗したいところだが、婚約者が居ると思うと気が引けてしまって、仕方なくこっちの方へ乗っている。仕方なくだぞ。

水は川や泉を見つければ何とかなるが、食料は今のところ、どうにもならない。

あの岩場でジツとしていたらジリ貧だ。

と、言うわけで取り敢えず歩き回っているワケだ。

なるべく森は迂回し、辺りを見渡せる平原を通るようにする。

当たり前だが、案内板や標識は無い。

何て不便なんだ。

まるで、サバンナのだ真ん中に立っている気分だ。

風が容赦なく薄着のオレを撫でていく。

寒いぞ。

「ぶえつくしょん！」

でかいくしゃみ。更にガタガタと震える。寒さを表す典型的なジエスチャーだ。

破れかかったＴシャツに短パンしか着ていないからとにかく寒い。夏なのに。

胸に巻かれた包帯が少しだけ寒さをやわらげているが、あまり意味はない。

甲冑越しにオレの震えが伝わると、アルステールは馬を止め、振り返る。

「寒いのか？ 冬なのにそんな格好をしているからだよ」
何だと、この世界は今、冬だと？ どうりで寒いわけだ。

「す、好きでこんな格好をしてるわけじゃねえ……」

ガチガチと歯を鳴らしながら言うオレを見て、アルステールは肩のマントを外した。

それをオレに着せる。

「こんな物しかないが、何も着ないよりはマシだろう」

オレはそれを頭からかぶり、胸の前で合わせる。

「うむ、少しはマシだ。ぶるぶる……。恩に着る」

オレが感謝すると、アルステールはプイツと横を向いて言った。

「ああ、風邪をひかれても困るからな」

更に、オレの脳内時計で２時間くらい歩き回る。

しかし、何処を見回しても家の明かりひとつ見えない。

オレが、もう一度辺りを見回そうとしたとき。横に並んだレミュリアが唐突に口を開いた。

「そういえば、正義の味方様。貴方の名前を聞いてませんでしたわ……しまった。何とかそっちの話題を触れさせないように気を付けていたが、こうもストレートに訊かれると誤魔化しようがない。それは何故かというと、自己紹介というモノにいい思い出がないからだ。」

「お、オレの名前か？」

「そうですわ」

「言わなきゃならんのか？」

「貴方の名前を知りたいのです」

真剣な眼差しでオレを見つめてくるレミユリア。

「絶対に笑わねえか？」

「えっ？」

「オレの名前を聞いて、笑わねえかと聞いている」

「え、ええ、それはもちろん。そんな失礼な事をするはずがありませんわ」

「何だ、じれったい奴だな」

やりとりを聞いていたアルステールが、痺れを切らした。

もうどうにでもなれとオレは意を決した。

「お、オレの名前は……」

「名前は？」

レミユリアとアルステールの顔が更に近寄る。

「が、頑吉。あかてるがんきち赤輝頑吉だ」

聞いた瞬間は無表情なレミユリアとアルステールだったが、10秒、20秒経つにつれて、その顔は驚きに染まってくる。

「が、ガンキチ……」

レミユリアの目が徐々によくわからない光を放ち始める。

「……」

アルステールの目は何かを抑えようと必死な光を放ち始める。

「何て良い名前なのです！」

キラキラと目を輝かせながらレミユリアは感動したように言った。

「だ、だから言いたくなかったんだ……って、なにっ？ いい名前だと？」

これは新手のけなし方なのか？ いや、しかしこの目は嘘を言っている目じゃない。マジだ。

余談だが、高校で初めてこの名前を呼ばれた瞬間、教室中が爆笑の嵐になったんだが。

「本当か？ 本当にそう思ってるのか？」

「こんな事に嘘を言う必要が何処にあるのです？ 素敵な名前ではないですか。勇ましくて、男らしくて……」

レミリアの目はキラキラと光っていて、嘘、世辞、嘲笑などの単語が思い浮かばない。

信じられんが、どうもマジで言ってるようだ。不思議な気分と同時に初めて名前を褒められて、くすぐったいようなかゆいような。

「お前はどんなだよ？」

今度はアルステールに訊いてみる。

「まあ……、良い名前なんじゃないのか」

プイッと横を向いてぶっきらぼうにアルステールは呟いた。

——信じられん。この世界ではこの名前はウケが良いのか？

*

*

*

オレの脳内時計で更に2時間ほど経って、だんだん腹が減ってきた頃、

「おい、あれを見る」

アルステールが唐突に甲冑の指をさした。

その方向を見てみる。

「あれは……明かり？ 村だ！」

オレ達は嬉々として馬を走らせた。

「ダメだッ!!」

一見、小さそうな村の門に辿り着いたオレ達は、有無を言わず門番から追い払われてしまった。

門番は、顔、身体を全部覆い尽くしたフルアーマーを着ているが、その手に持っている武器は何故か弓。腰には補助的な短剣、背中には数え切れないくらいたくさん矢が入った矢筒をしょっている。

オレ達は門番に見つからない場所へ隠れると。

「うつむ……。何で話も聞いてくれねえんだ？」

「変な村だな」

と、アルステール。レミユリアは顎に指を当てて、

「でも、何処かで見たことがあるような……」

と、呟く。

オレは辺りを見回した。

「何だ、門があるわりにはヤケに手薄だな」

門の周辺以外のところは、ほんの僅かな草木が生えているだけで
ほぼ無防備だ。

草木の向こうには、村の家屋がうつすらと見える。

そこで、オレは侵入を試みた。

しかし。

ゴンという定番な音が額から鳴り響いた。

「ぐわっ!？」

オレは見えない壁におでこを思い切りぶつけ、軽い脳震盪を起こし
ひっくり返った。

「大丈夫ですか!？」

レミユリアとアルステールが慌てて駆け寄ってくる。

「あたたた……。何だ？ 透明な壁があるぞ。そうか、これが結界
だな？ R P Gとかでよくある」

「あーるぴーじー？」

アルステールが首を傾げる。

「気にするな。オレの世界の言葉だ。……しかし結界に弓ときたら

……」

まさかな。いくら異世界でもそんなのが……。

「エルフ!」

レミユリアがあり得ないだろうと思っていた答えを口にしてしま
った。

まさか、本当にそんな種族が存在するとは。

……いや、好都合だ。

あの長い耳を一度触ってみたいと思っていたからな。

「エルフって……森に住んでるモンじゃないのか？」

ゲームで得た知識から考えて、疑問に思ったことを訊ねると。

「いいえ。2種類いますの。森に住む普通のエルフと、人間と同じ村で共存するエルフという具合に。ただ、どちらのエルフも知らない人間には警戒心が強いらしいです」

「んじゃ、この村は人間と一緒に住んでいるエルフの村って事か」

「そうですね。そう考えると、さっきの門番の態度も頷けます」

「厄介だな」

アルステールが呟いた。

オレ達は、エルフ村に侵入する為の作戦を練った。

しかし、これだ！ と、思うような策は出てこない。

さんざん頭を悩ませて出した結論は、

「ふむ、やっぱりこれしかないみたいだな」

「何をするつもりだ？」

「ちよつと貸せ」

オレはアルステールの腰に下げている剣を鞘から抜き取る。

そして、切っ先を左腕に当てる。もちろんオレの腕だぞ。

「痛いのは嫌なんだが……」

オレは剣を持つ手に力を込めた。

左腕に剣が3センチほど刺さった。

「ぐっ！」

やっぱり痛い。激痛に顔が歪む。そして、一瞬めまいを覚える。

「きゃっ！」

レミュリアは思わず顔を両手で覆う。

オレの腕から血が滴り落ちる。

「ば、バカ！ 何をするんだ！」

それを見たアルステールは仰天する。

オレの手から剣を奪い、血が滴る腕に革袋から素早く取り出した

包帯を巻こうとする。

「待て！」

オレはアルステールの手を掴んだ。すると、アルステールは真っ青な顔で言う。

「ち、ち、血が出てるんだぞ！ それもこんなにいっぱい！ は、早く止めないと……」

そんなアルステールを無視して、オレは更に包帯を巻いた胸をドンと叩いた。

「ぐくつ……」

更なる激痛にオレの顔がまた歪む。

じわじわと胸の包帯が赤く染まる。

「ななな、何をしているんだっ……！」

「ああ……」

更に真っ青になるアルステール。レミユリアはフラつきはじめる。そんなふたりを尻目に、オレは痛みに耐えながら言った。

「いてて……、よし。このままオレを門の前に連れていけ。重傷人らしくだぞ」

「！ そ、そうか。わかった」

ふたりはオレの作戦を理解したようだ。

アルステールは少し戸惑いながらも、肩を貸してオレを連れていく。

そして、門の前に来ると、オレは苦しそうな表情を作る。と、言っても本当に痛いから半分はマジだけど。

門番がこつちに気付いた。

「ん？ また貴様らか。何度来ても……」

「ケガ人だ！ 治療をしてやりたいんだ。村に入れて欲しい！」
門番は血だらけのオレを見て焦る。

もちろん、左腕と胸の傷以外は血を付けただけのニセモノだが。
「さ、さつきは何ともなかっただろう！」

するどいツツコミ。しかし、

「そこで獣に襲われたんだ！ 早くしないと手遅れになる！」

アルステール、ナイスフォロー。鬼気迫る表情も味があるぞ。

「お願いです！ せめて治療だけでも！」

レミユリアの双眸がキラキラ光る。ついでに涙まで流して。

こんな攻撃を食らったら、首を縦に振らずにはいられなくなるぞ。しかし、このふたり。女優真つ青の演技力だな。

「……。仕方ない、入れ……。だけど治療が済んだらとっとと帰るんだぞ」

ついに門番が折れた。

作戦『村に侵入する』が成功した。

村の中は、粘土をこねて作ったような奇妙な形をした家がいくつも並んでいる。

その中に、まともな中世ヨーロッパ風の家も混じっている。

人間と違う種族『エルフ』が暮らしているということが容易に想像できた。

さすがに夜なだけに、村人ひとり外に出ていない。

病院のような小さな建物に入ると、白衣を着た医者らしい女が姿を現した。

両耳が長く、鼻も高い。美しい金色のロングヘアに赤色の瞳。

身長150センチくらいか、レミユリアよりひと回り小さい身体。完璧なまでのエルフだな。

しかし、何故RPGとかに出てくる女のエルフは美人が多いのか、それは永遠の謎だろう。

エルフ女医は見かけないオレ達を見て、少し躊躇するが血だらけのオレが目につくと、診察室のような部屋に入るよう手招きをする。アルステールに肩を借りながら、奇妙な薬品の匂いがする診察室に入ると、ベッドに寝かされた。

羽織っていたアルステールのマントを取り、破れかけたTシャツを脱ぎ、胸の包帯を取る。

そして、身体のあちこちに付いた血を拭くと、エルフ女医が言った。

「この胸の傷、何か1回閉じて開いたような感じがするわね」

ぎくっ！　しかし、開いたのは1回では無いぞ。2回だ。と、頭の中で付け加える。

「こっちの腕の傷も、妙に小さいし、ためらい傷のように見えなくもないわね」

ぎくぎくっ！　何でわかるんだ！？

オレの顔を細い眼で見るエルフ女医。

冷や汗がオレの頬を伝う。

ごまかすように笑うオレ。しかし。

「キミ、自分で傷を作って来たでしょ？」

細い目のまま、口の端が持ち上がる。

アルステールにレミユリアは『あちゃー』という声が聞こえてきそうな顔で頭を抱えている。

「へい……」

オレは観念して呟いた。

オレ達はこのエルフ女医からあれこれ聞かれた。

何で傷を作ってまで村に入ったか。

キミ達は何処から来たのか。

何か良からぬことを企んでるのではないか、など。

もちろん、全部説明して、誤解も解いた。

説明を終えると、椅子に座ったエルフ女医は脚を組み直して口を開いた。

「へへえ……キミ達、結構大変な目にあってるのね。でも、思ったんだけど、彼は全然関係ないのに、何故付いてきてるの？」

エルフ女医が鋭いことを聞いてくる。

「それは、クリアしないと……あわわ。じゃなくて、お、オレが正義の味方だからだ」

危つく余計なことを言いそうになった。

言ってもどうせ信じてもらえない上に、話をややこしくするだけだ。

「ふーん……」

エルフ女医が細い目でオレを見る。

「変わった人間ね。まあいいわ。とりあえず治療するから動くんじゃないわよ」

「う、うん」

ベッドに寝かされたままのオレの返事を聞くと、エルフ女医が赤と青の奇妙なビンを取り出した。

そして次にオレの一番大嫌いな物体を取り出した。

それは、

「ぎゃーっ！ 注射はイヤーっ！」

オレは暴れる。小1の時、ルーキーでヘタクソな医者が注射針をオレの腕の中で折って、辺りに血が飛び散った事からオレは注射が大嫌いになった。

みんながみんな、あのヘタクソな医者ばかりではないと思っても、ガキの頃に起こった出来事はトラウマだ。

「こ、コラ！ 子供みたいに暴れないの！」

暴れるオレ、それを押さえようとするエルフ女医。

しかし、その力の差は明らかだ。

すると、エルフ女医。また別の奇妙なビンを取り出し、フタを少し開けてオレに匂いを嗅がせる。

「へろへろへろ………かくん」

途端に視界が暗転した。

「ふう………全く。何処の誰が斬ったか知らないけど、胸の傷は結構深いよ。麻酔無しで縫ったら注射刺すより痛いわよ」

エルフ女医、眠った頑吉を駄々っ子を見るような目で見て言った。レミユリアの横に立っていたアルステールの身体が、しゅん、と小さくなった。

そして、治療が終わり、頑吉は目を覚ました。

オレの身体には至る所に白い包帯が巻かれていた。

胸、左腕はもちろんのことだが、右脚と、両足の裏にも包帯が巻かれている。

この事を聞いてみると、

「キミ、そんな脚でよく逃げてきたわね。それも裸足で。右脚は本が筋が切れかかっているし、足の裏は痛いことになってたわ。私特製の薬を塗つといたからすぐに治るけど、最低2日間は無言にしてなきゃダメよ」

どうやら俺は結構な重傷人だったらしい。

しばらく経った。

カルテを書き終えたエルフ女医が、椅子を回転させてこっちを向いた。

脚を組んでいる為、スカートの間から薄いブルーの下着が脚の間からチラチラ見える。

「……何処を見てるんだ」

オレの視線にいち早くアルステールが気付くと、目元をピクつかせながらドスのきいた小声でオレの耳にささやく。

「ふむ、人間が着ている物と変わらん」

オレがボソッと呟くと、アルステールはオレの背中を触って、2本の指が皮膚を挟むと、思い切りひねり上げられた。

0・5秒後に激痛が走る。

「ぎゃっ!?!」

身体がビクンと跳ねたオレを見て、

「叱られちゃったわね、ふふ」

エルフ女医がデコを指でツンと突いた。

爪がちよっぴり刺さったぞ。

「ところで、キミ達。もう夜遅いから私は病院閉めるけど、どうするの？ まあ、その様子だとお金も無いみたいだけど」

エルフ女医の言葉にオレは答える。

「なあに、金なら外でウロチョロしているモンスターどもを倒して稼いできてやる」

「何バカな事言ってるの。キミは最低2日間は絶対安静よ。それに、モンスターなんて居るわけじゃないじゃないの」

「何！？ RPGなのにモンスターが居ないだろ！？」

しかし思い返してみれば草原を当てもなく彷徨っていたとき、一度もモンスターに襲われなかった。それはただ単に運が良かっただけかと思っていたが――。

「あーるピーじーって何よ。変な言葉を使うわね。まあとにかく、もし仮にモンスターが居たとしても、お金なんて持つてるわけないじゃないの。持ってたなら私もこんな医者やってないで何処かの戦士を雇って、モンスターハンターになったわね」

冷やかな視線を浴びるオレ。もちろん、レミユリア、アルステールの視線もそれだ。

エルフ女医はため息をつく。

「しょうがないわね。今夜は私の家に泊まっていきなさい。どうせ泊まる場所無いんでしょ？」

と、ウイंकをする。

オレ達はエルフ女医の好意に甘えることにした。

歩けないオレをアルステールが背負い、エルフ女医に案内され、家に辿り着いた。

やはり、他のエルフ族が住んでいると思われる家と同じように、エルフ女医の家も奇妙な形だが、中は人間の住んでいる家と大差なかった。

部屋が二つに、リビング、ダイニング、キッチン。風呂にトイレも、もちろんある。無かったら困るぞ。

2LDKといったところか。

リビングに入ると、アルステールはオレを下ろして、甲冑を脱ぎ、傍らに置いた。

レミユリアも近くに座る。

床の敷物が、妙に触り心地いい。

エルフ女医が、レトロな木製テーブルの上にカップを四つ置いて「そういえば、自己紹介がまだだったわね。私はシエルフィスよ」

エルフ女医が名乗った。シエルフィスか、ファンタジックな名前だな。

そう考えると同時に、オレは気付いた。

しまった。自己紹介とくれば、オレも名乗らなければならないではないか。

「私はレミユリア・クリスエルムと申します」

「ボクは護衛のアルステール」

レミユリア、アルステールの順に名乗っていく。あつと言つ間に、オレの番になる。

3人が、オレの顔を見る。

重い沈黙。

3人の視線がオレに突き刺さる。

レミユリアはニコニコとっていて、アルステールはオレの視線に気付くとサツと目を逸らした。

「正義の味方じゃダメか？」

「みんな名乗ったのに、キミだけ隠すなんて不公平よ」

うつむ……。このふたりには良い名前と言われても、現実の世界では笑われているからやはり自己紹介するというのは気が引ける。

「んーと……」

「？」

シエルフィスの赤い瞳が不思議そうにオレを見た。

「オレの名前は……頑吉だ」

名乗った途端、シエルフィスの表情ががらりと変わった。

この世界の人間にはウケが良いが、エルフはどうだろうか。

「が、ガンキチ……」

シエルフィスがプルプルと震えている。

「やっぱり笑うか……」

オレは覚悟を決めた。

仕方ないのさ。こんな名前で生まれてしまったんだから。

しかし、シエルフィスは、

「何て良い名前なの！」

いきなり、小柄な顔を思い切り近づけてきて、赤い瞳をキラキラさせながら言う。

レミユリアは『ほら、やっぱり』とでもいたげなニコニコ顔で、アルステールはオレと目が合うとサツと逸らす。

「外見といい性格といい、ピッタリだわ！」

更に、シエルフィスがオレの手を小柄な手で握ってくる。

この世界の人間とエルフはこんな江戸時代末期の一般市民のような名前を好むのだろうか？

このキラキラとした赤い瞳。笑いをこらえている様子は微塵もない。

少なくとも、ウソを言っているようには見えない。
外見にも性格にもピツタリというのが多少引つかかるが、まあ笑
われないだけよしとしよう。

「よし！ 決めた！ 私もキミ達の仲間になるわ！」
しばらくして、いきなりシエルフィスが言った。

「おおっ！ それはありがたい！ ……けど、何で？」
すると、シエルフィスはオレの顔を見て。

「キミの名前が気に入ったから。では、ダメかしら？」
赤い瞳でジーツとオレを見つめる。

「い、いや、ダメじゃないけど。そんな理由で……まあ、いつか」
「では、ここの病院はどうするんですか？」
アルステールが聞くと。

「しばらく閉めるわ。ここの医者は私だけじゃないんだし」
うつむ、何だかいい加減な気がしなくてもないが……。

「何にしても、仲間が増えるというのは嬉しいです。しかも医学に
長けている人なんて」

素直に喜ぶレミリア。

「戦いはちよつと苦手だけど、治療なら任しといて。短期間で治し
てあげるから」

と、ウイंकをするシエルフィス。

と、いうワケで、医者 of シエルフィスが仲間に加わった。

「さて、頼もしい味方が1名加わったところで、早速、作戦会議だ。
アネさん。地図はあるかい？」

たった今思いついたニツクネームをシエルフィスに使ってみる。
「ア、アネさんはよしてよ」

と言いつつ、地図を机の引き出しから取り出す。
それを広げると。

地球の世界地図とはかけ離れた、見たこともない地形。

何処が何処なのか。

それ以前に象形文字みたいな文字で書かれていてオレには読めない。エルフ語か？

3人は、床に広げられた地図に注目する。

とりあえず同じように注目しているが、オレは全然わからんぞ。

まあ、とりあえず。

「地図を見る前に、最初に言っておくが、今のオレ達の戦力はゼロだ。今のままでは、クリスエルム王国どころか、山賊相手にも勝てない」

3人が、オレに注目する。

「だから、何処かで優秀な武将と大勢の兵を集めねばならん。と、言うわけで、何かアテはないか？」

3人が顔を見合わせる。

しばらく考えた末に、レミュリアが口を開いた。

「ラムド・ガル……あの人が居れば……」

「ラムド・ガル？ ああ、レミュリアちゃんの婚約者の將軍だな」
「ええ」

レミュリアは少し頬を染めて答えた。

*

*

*

クリスエルム城――。

ここは、謁見の間。

大理石の円柱が左右の壁際に何本も並び、真ん中の床には真っ赤なシルクの長い絨毯が玉座に向かって一直線に敷かれている。

玉座の後ろには、真っ白なベールが吊るされており、荘厳な雰囲気漂わせている。

玉座に、何者かが座っている。

見た目、20代前半くらいか、薄化粧のキリツとした顔立ち、引

き締まった口許。その高貴な雰囲気は明らかに王族の類だ。

しかし、その眼光はとても禍々しい。

その青年は、腰に下げている剣を鬱陶しそうに引き抜くと、下で跪いている騎士に向ける。

「レミユリアを取り逃がしたらしいぞ……。よかったな……。ラムド・ガル」

騎士に向かって吐き捨てるように言った。

跪いているのはラムド・ガルだった。

赤い長髪、グレーの瞳の二枚目顔。

嫌味たらしう言い放つ青年の言葉に、悟られないよう少し口の端を持ち上げる。

「とんでもございません。ユーネス殿下」

玉座に座っている青年は、レミユリアの兄であり、クリスエルム王国を治める王でもあるユーネスだった。

ユーネスは突然、逆上する。

「殿下ではないッ！ 陛下と呼べッ！」

鈍い音が響き渡った。

ユーネスが玉座から立ち上がり、ラムド・ガルの顔面を蹴りつけたのだ。

無様に後ろへ倒れるラムド・ガル。

しかし、すぐに起き上がり、またユーネスの前に跪く。

口の端から流れる血を拭おうともしない。

「以後、気を付けます」

ラムド・ガルは静かに言った。

冷静さを取り戻したユーネスは、不敵な笑みを浮かべる。

「ふん、まあいい。貴様にはもうひとつ残念なニュースがある。レミユリアの追跡をザキユール暗殺団に任せた」

ラムド・ガルの顔色が変わった。

ザキユール暗殺団。その言葉を聞いた途端に。

「……そうですか」

微かに声が震えている。

「奴らの事だ。2、3日も経てば足取りを掴める。これで貴様は、俺を裏切れなくなったわけだ。ははははははっ！」

「……」

悪魔のように高笑いするユーネス。

ラムド・ガルはじつと黙ったままだ。

ユーネスは剣を腰の鞘に収めると、

「とつとと下がれ」

脚で命令する。実に高慢極まりない態度だ。

ラムド・ガルはそれを気にする素振りすら見せず、一礼して静かに去っていった。

謁見の間から出ると、ラムド・ガルは袖で口の端を拭った。

*

*

*

「そうか、レミユリアちゃんの命を盾にされたら、逆らうわけにもいかないな。でも、レミユリアちゃんはクリスエルムから逃げたではないか。従って、人質じゃなくなったんじゃないのか？」

「いいや、ユーネスはその権限を使って、刺客を送ってくる可能性もある。生かすも殺すもユーネスの言葉次第だ」

アルステールはオレの疑問に答える。

「それじゃあ、刺客を送られる前に、オレ達が反乱軍を結成して強くなればいいじゃねえか」

胸をはって、オレは答えた。

その言葉に頭を抱えるアルステール。

「長生きするよ……全く」

「とにかく、ラムド・ガルはラムド・ガルだけとは戦わないでください。あの人も戦うことは望んではないはずです」

レミユリアが泣きそうな眼でオレに懇願する。

「わ、わかってるよ。それに、何か強そうだからオレも戦いたくね

えし」

「お前じゃ、間違いなく勝てんな」

アルステールがボソツと呟いた。

「う、うるさいな」

当たっているだけに何も言えないオレ。

第一、序盤から強い敵に勝てたりしたらゲームバランスがメチャクチャではないか。

「そういえば、ガンキチちゃんが言ったアテは無いこともないわよ」
唐突にシエルフィスが言った。

「ガ、ガンキチちゃん……。と、とにかくそのアテは何だ？」

妙な呼ばれ方をして少し焦るが、聞き流してシエルフィスに訊ねる。

「ここから西の方角に森があつて、その近くにエルフの町があるのよ。そこに居る私の友達の知り合いに確か自警団のリーダーが居たような……」

エルフ町の自警団か。悪くはないな。最初の戦力にしてはまあまあだ。

「その自警団の規模はどれくらいなんだ？」

「えーっと……結構、人数居るみたいよ。王国の騎士団とまではいかないけど」

「よし、それだ。決まりだな」

「あの町に行くのね？」

「ああ」

オレは力強く返事をした。

（ガンキチさんは頼りになりますねアルステール。まるで、軍師みたいですよ）

（そうですね。何かこう、引き寄せられる妙な力も持ってますし——）

（まあ、アルステール。ガンキチさんに……。そうですか。うふふっ）

(ひつ、姫様！　ちつ、違いますよ！)

(うふふ……。まだ何も言ってますんよ)

(う……)

レミュリアとアルステールが、何やら楽しそうにボソボソと話している。

ちくしょう、何を言ってるのか全然聞こえないぞ。

とりあえず、そのエルフの町へ行くことになったが、オレの脚が2日は絶対安静な為、出発するのは2日後になった。

回復魔法があれば、一瞬で治せるんだが。

結界はあっても、魔法という都合のいいものは無いようだ。

あと、結界は魔法で発生させているんじゃないかと、機械で発生させているらしい。まあ、言い方を変えればバリアというヤツだな。

翌日。

怪我が完治していない為、あまり無理はできないからリビングでゴロゴロしているオレ。

ついでに、今はアルステールと留守番だ。

シェルフイスとレミュリアは食料の買い出しに行った。夕方まで帰らないそうだ。

リビングの隅っこで、アルステールが本を読んでいる。

そういえば、今のアルステールは甲冑を付けていない。

こうしてみると、アルステールも普通の女の子だな。

この細い身体で重い甲冑を着て、更にオレを背負って歩けるんだから大したモンだ。

見た感じは、レミュリアより少し大きいくらいであまり変わらな
いんだが……。

「何、ジロジロ見てるんだ」

オレの視線に気付いたアルステール。

膝の上に読みかけの本を置く。

「いや、小さいなと思ってね」

「ぴくっ」

アルステールの目元がピクついた。

「そのコップが」

オレはテーブルの上にあるコップを指さした。確かにこれは小さいんだぞ。エルフ用で。

「……はあ」

「何だそのため息は」

オレの脳内時計で4時間くらい経った。

ヒマだ……。

アルステールは黙々と本を読んでいる。

オレも本棚から適当に取った本をめくってみる。

ほとんどエルフ語の本ばかりで、理解不能だ。

何故か日本語で書いているものの中にはあったが、あいにくと活字と向き合って数時間も耐えられる精神力をオレは持ち合わせていない。

テレビもラジオもない。ゲームもない。

まあ、当たり前か。

ヒマだ。

床をゴロゴロと転がっていたら、ふと、思いついた。

オレ達は相手の戦力を知らない。

「なあ、アルステール」

「な、何だ？」

ピクツとするアルステール。

「何でドモるんだ？」

「う、うるさいな。何だよ」

「ユーネスは、ラムド・ガルの他に部下が居るのか？」

「……ああ、3人ほどな。ひとりはずム・エクストリア、もうひとりはずマン・カシュー。最後はクラザート・トライドだ。みんない人だったんだが……」
「詳しく話してくれ」

* * *

クリスエルム城――。

3つの靴音が広い廊下に響く。

そして、謁見の間へと消えていった。

謁見の間。

誰が掃除したのか、床や絨毯には埃ひとつ落ちていない。気味が悪いくらいに綺麗だ。

フルアーマーに身を包んだ近衛兵がふたり、玉座を挟んで立っている。

その玉座にユーネスが座っている。

禍々しい、悪魔の様な眼光。

不自然に整った髪形。

ユーネスは剣を抜き、切っ先を目の前で跪いている3人に向ける。

3人はピクリとも動かず頭を垂れている。

「顔を上げる」

ユーネスのひと言で、3人が同時に顔を上げた。

左右のふたりは男。中央のひとりは女だ。

ユーネスは3人を確認するように見て。

「奴の動向はどうだ」

誰に言うのでもなく、呟いた。

それを中央の女が答える。

「はい。特に不穏な動きはありません。全ては予定通りかと」
その言葉に、ユーネスは恐ろしい笑みを浮かべる。

「そうか。少しでも不穏な動きを見せればすぐにザキユール暗殺団に合図を送れ。では、エマン・カシュー。引き続き監視を頼むぞ」

「はい。仰せのままに」

エマン・カシューと呼ばれた女が答えた。

それを聞くと、ユーンスは次に右の男を見る。

「ザム。貴様は何か言いたいことがあるようだな」

ユーンスの目が恐ろしくギラつく。

ザムと呼ばれた右の男は何も答えない。

恐ろしい眼光をジツと見つめたまま、微動だにしない。

重い沈黙。恐ろしい眼光から発されるプレッシャー。

耐えかねたようにザムが口を開く。

ブルーの双眸がプレッシャーで微かに震えている。

「いえ、ゴホン、何もありません」

かすれかけの声で言った。

「ふん。まあいい」

そんなザムを嘲笑うかのように一瞥すると、

「クラザート、貴様は引き続き町の巡回をしろ。反乱分子を見つけたら容赦なく殺せ」

左の巨漢、クラザートに告げる。

「御意」

クラザートは力強く頷いた。

それを確認すると、ユーンスは剣を収める。

「下がれ」

低い声で命令した。

3人は、静かに立ち去っていった。

謁見の間を出ると、ザムはふたりに気付かれないよう歯がゆそうに唇を噛む。

——いけすかない奴だぜ。おっかない眼で睨みやがって——。
心の中で舌打ちをした。

「ふむ、そのザム・エクストリアって奴以外みんな変わっちまったんだな？」

「そうだ。特にエマン・カシュー様の変わり様は凄いものがあつた」「とてつもない悪巧みを考えるようになったとか？」

「その通り。騎士の軍事演習という理由で村をひとつ焼き払ったり、反乱分子への見せしめとしてレジスタンスのひとり処刑し、首を城門の上に1カ月間吊るした事もあつた」

「うーむ。絵に描いたような悪者だな」

「ああ。評判も良かっただけに、あの変わり様は国民も相当ショックを受けていたよ」

アルステール、膝を抱えて言った。

ふむ、ここまででは普通のRPGと同じ展開だな。選択肢を選んで先へ進むゲームとは違って自分で全部考えなければならんトコロがちと違うが。

しかし、ザム・エクストリアか。考えてみる余地はあるな。

と、オレがいろいろ考えていると、アルステールが立ち上がる。

オレはそれを何気なく見ていたが、アルステールの身体がゆらゆらと揺れて見えた。

何だ？ 地震か？

そう思った途端、アルステールの膝がカクンと折れると、オレの上に倒れてきたのだ。

「のわっ！？」

おおっ？ 何だ？ 柔らかい感触がオレの胸に……。じゃなくてどわわっ！？ 何でアルステールがオレの上に！？

積極的だな。じゃなくて、ラッキー。あわわ、オレは何を考えているんだ。

「あ！ す、すまん！ 立ちくらみがして……す、すぐに退くから」

いや、別にすぐじゃなくてもいいぞ。

……はっ。いかんいかん！

「だ、大丈夫か？」

「目の前が真っ白だ……」

しかし、アルステールは低血圧か？

立ちくらみを起こすとは……。

アルステールが手を突いてオレの身体から退こうとした瞬間。

ガチャッ。

ありがちなパターン。

予想はしていた、でも、まさかな……と、思っていた矢先、無情にも玄関のドアがいきなり開いた。

「ただいまー！ おふたりさん私の家でへんなこ……と……」

買い出しから帰ってきたレミュリア、シエルフィスが凍りついた一瞬にして、辺りが氷河期になった。

そりゃあ、アルステールがオレの上に覆いかぶさっているんだから当然のリアクションだ。

シエルフィスがいち早く解凍すると。

「……お邪魔みたいね。出直しましょ姫様」

シエルフィスがレミュリアの肩を抱いて外に連れ出そうとする。レミュリアは固まったままだった。

ようやく解凍したアルステールが、

「ちちち、違うんです！ ひ、姫！ シエルフィスさん！ おい、ガンキチも説明してやってくれ！」

「説明も何も、その前に早く退いたほうがいいぞ」

オレの上に覆いかぶさっていた事を思い出して、パツと離れるアルステール。

頬が少し赤い。

ふむ。可愛いではないか。

数十分後。事の誤解をやつたのこと解くと。

「ホントにもう、びっくりしたわよ。家に入ったらガンキチちゃんを襲ってるんだもの」と、まずはシエルフィス。

「うつつ……」

真っ赤になるアルステール。

「全くです。アルステールが私より早くオトナになったかと思いましたわ」

と、レミユリア。

「うつつ……」

更に真っ赤になるアルステール。

「まあ、いいじゃないか。何事も無かつたんだから」

あっけらかんと言うオレに、シエルフィスが、

「私達が家に入るのにあと数十分遅れてたら、何事も無かつたって言える自信ある？」

「う……」

くそう。反論できねえぞ。

オレとアルステールは、いけない事をして母親から怒られる子供みたいに小さくなってしまった。

「あ、そうそう。ガンキチちゃん、服はボロボロで靴も無かつたわよね。買ってきたわよ」

シエルフィスがウインクしながら紙袋をオレに差し出した。

「おおっ！　ありがたい！」

オレは早速、袋を開けて中身を取り出す。

エルフの服なのか、奇妙な柄の長袖だ。しかし、この際贅沢は言つてられない。

ズボンも履いて、靴もついでに履いてみる。

よくある旅用のブーツというヤツか。靴底が妙に薄っぺらいが。

「うん。似合う似合う！　さっすが私のセンスね。耳の長さが足りないけど」

「普通だな」

「エルフっぽくていいですわ」

口々に言う3人。

褒めているのか、いないのかよくわからんが。

たかが服1枚、されど服1枚。

普段は服がいつぱいあるから。それが無くなった時の事なんか考えたこともない。

こうして、服が無くなってみると改めて服のありがたさがわかるな。

何はともあれシエルフィスに感謝だ。

オレはエルフの服上下と靴を装備した！

……。

……？

ちよつと待てよ？

装備。何かひとつ足りないぞ。

そうだ、武器だ。剣だ。

剣が無ければ、オレの剣道技が披露出来ないではないか。

それに気付いたオレは、次の日にシエルフィスから剣を買ってもらった。1番安くてチャチなやつだけど。

そして、その日は何事も無く終わった。

ついに、出発の日が来た。

オレの腕のためらい傷と胸の傷、脚と足の裏の傷はそこそこ良くなり、歩けるようにもなった。普通なら、3週間はかかりそうな傷だったんだが。一体どういう薬を使ったのか。

今、オレ達は村の門の前に居る。

「時間はどれくらいかかるんだ？ その町まで」

オレは刀身約60センチくらいの安物の剣を肩に担いで訊ねる。意外にこの剣は重い。安物だからか、それとも真剣なんぞ初めて

手にしたからか。

地図を広げて返答するシエルフィス。

「そうね……。早くて1日。遅くて2日くらいかしら」

「なんだと？」

背負おうとしたリュックサックがピタリと止まる。

2日？

メチャクチャ遠いではないか。

この世界の人間&エルフにとっては、このくらいは当たり前なんだろうか。

「馬に乗ってもか？」

と、オレが言うつと。

「馬？ 馬なんて何処に居るのよ」

シエルフィスが辺りを見回す。

あら？ 確かに2日前は兵士どもから頂いた馬が……。

「ない！ 馬が消えたぞ？ おい、アルステール。馬はどうした？」

「いや、確かにここに繋いで……」

アルステールは慌てる。

地面に蹄の跡が僅かに残っているだけで、馬は忽然と消えていた。

「ひょつとして、ここに馬を置き去りにしてたの？」

「いや、確かにここに繋いで……」

アルステール、同じ言葉を言う。

相当なショックを受けているようだ。

「あーあ。それじゃあ、盗賊に盗まれたんだわ。諦めることね」

シエルフィスがにこやかに告げた。

「今度からは、ちゃんと馬小屋に入れるのよ」

と、付け加えるのも忘れない。

うつむ、迂闊だった。

オレとしたことが、盗賊というものを忘れていた。

まあ、仕方ないな。何処かでまた手に入るだろう。

「ここに繋いで……」

「ほら、もういいから。仕方ねえよ。行くぞ」

呆然とするアルステールの頭を軽く撫でて、オレはリュックサックを背負った。

言っておくがこの中身は食料や水が何日分が入っていて、結構重いぞ。

ちなみに、テントはアルステールが背負っている。オレのリュックサックよりは軽いらしい。

オレやアルステール、シェルフィスは歩くのに問題無さそうだが、レムュリアは温室育ちみたいだから。結構辛いかもしれないな。

と、オレは思っていた。

しかし、読みは見事に外れた。

何と、レムュリアは散歩が大好きで、暇さえあれば外を歩き回らしい。と、いうワケで歩くのは慣れているようだ。さすがに重い物を持って歩くのはキツイみたいだが。

こうして、辺りの景色をゆつくりと眺めながら歩くのは、随分久しぶりな気がする。

現実の世界じゃ、外は排気ガスで充満してるわ、車のエンジン騒音はするわでとてもゆつくり景色を眺める気にはなれない。

どうせ、高層ビルや道路ぐらいいしか見えないしな。緑なんて街路樹と雑草とスーパーに売ってる野菜ぐらいのもんだ。

しかし、この世界はどうだ。

聞こえてくるのは風の音。草木が風で揺れる音。小鳥のさえずり。排気ガスの匂いは微塵もない。草木の匂い、土の匂い。たまに頬を撫でていく風が心地よい。ちょっと冷たいがな。

一変の曇りもない広大で幻想的な景色。

高層ビルなどのバカでかい人工建造物はもちろん無い。

遠くの方で見えるアルプスの様な山脈なんか、思わず見とれてしまっぞ。

半日ほど歩いただろうか。太陽が西寄りになって、景色の色が変わり始めた。

「この分なら、今日中に着くわ。でも今日はこの辺で野宿にしましょう。夜中に押しかけてもどうせ入れてくれないから」

小さな川のせせらぎを通りすぎた辺りで、シエルフィスが言った。しかし、今思ったが。怪我が治りたてだというのに、こんな重い物を背負って歩いても全然なんともないぞ。

すごい効果だな。シエルフィスの薬は。

オレはリュックサックを下ろした。

「ふいっ。重かったぜ」

焚き火がパチパチと音を立てて燃えている。

辺りはすっかり真っ暗だ。

焚き火の近くには、アルステールが背負っていたテントが張られている。

テントはひとつしかない。

と、いうことは。あの中に4人で寝るのか？

まさか、オレひとりだけ外なんて事は無いよな？

初めて口にするあぶりたての干し肉を食べながら、オレは思った。

「ガンキチちゃん。そこで水汲んどいてね」

と、シエルフィスがオレに空の水筒を渡す。

手早く綺麗な川の水で水筒を満たすと、リュックサックの中に入る。

今気付いたが、こんな透き通った水が流れている川は初めて見たぞ。

よく見ると、魚も泳いでいる。

釣り道具でもあればなあ……なんて考えていたら。

「きゃあああああつー!!」

甲高い悲鳴が辺りに響きわたった。

「何だ!？」

「悲鳴よ！ それもエルフの女の子の」

シエルフィスが長い耳をピクピクさせる。

何て耳がいいんだ。さすがにそこまで聞き分けられなかったぞ。

長い耳は飾りじゃないって事か。

「よし！ 助けるぜ！」

「ボクも行く」

「私も行くわ！」

アルステールが剣を、シエルフィスが小型の弓を手にする。

「ちょっと待て、レミユリアちゃんがひとりになっちまう。アルス

テール、お前は残れ」

「う……。わ、わかった」

オレとシエルフィスは、悲鳴が聞こえた場所へ急いだ。

森に隣接した街道。

毛皮の服を着て、斧を手にした山賊みたいな奴3人から囲まれて
いる女の子を発見する。

「ぐえへへへっ！ 可愛いお嬢ちゃん！ こんな夜道にひとりで
歩いちゃ危ないよお。こんな風になるからなあ」

「ぎやはははっ！ 今日はツイてるぜえっ！」

山賊の下品な言葉に、女の子は更に震える。

「い、いや……」

「お、俺はこの服が欲しいな！ こ、この服は破らないで脱がして
くれよお！」

「だ、誰か…… たすけて……」

『いーたアだアきまーすウ』

山賊3人が手をニギニギさせながら女の子に詰め寄る。

「待てええいッ！！」

女の子に襲いかかろうとした山賊どもは、オレの、何処かで見た
変身モノのヒーローが登場するシーンで使っセリフに、ピタッと止
まった。

「下品な山賊どもめ！ この正義の味方ガンキチ様が来たからには、その女の子には指1本触らせねえぞ！」

安物の剣を素早く抜刀して言う。

キマった……。

一度こんなセリフを言ってみたかったんだ。

しかし、

「ぎやははははっ！ ガンキチだと！ 面白え名前だ！ ぎやははははっ！」

山賊三人は爆笑する。

この野郎……。あの3人にはウケが良かったのに。

「ちえすとおおおっ！！」

オレは山賊のひとりを狙い、一気に間合いを詰め、脳天に安物の剣を振り下ろした。

もちろん、峰打ちだ。いくら悪人といえど殺すのは気持ちの悪い物じゃない。

あと、名前で笑われた怒りが少し込められている。

ズンという衝撃が両手に伝わってくる。

直撃！ 70のダメージ！！ という手応えだ。

途端に山賊のひとりとは昏倒。

我に帰った山賊ふたりは、斧を手に襲いかかってくる。

しかし、そのスピードは真面目にやっているのかと思わせるほどスローに見えた。

重い斧だからスローに見えるのだろうか？

まあ、そんなことはどうでもいい。

振り下ろされる斧、それを後ろへ飛び退いてかわした。だって当たったら死ぬだろ。

斧が地面にめり込んだところを見計らって、オレは山賊の胸に一撃。

またひとり昏倒。

「残るはお前ひとりだな。観念しろ」

オレは静かに呟いた。

じーん……。

キマった……。

しかし、山賊は女の子に突進して。

「うがあああつー！」

最後の卑劣な手段その1『女の子を叩き斬る』を強行しようとする。

しかし、そんなことはオレがさせない。

素早く女の子の前に立つと、斧を受け止めるべく、剣を構える。

この間2秒くらい。

スローだから追い越してしまったじゃないか。

しかし。

バキーンと鉄をハンマーで叩いたような音が鳴り響いたかと思うと、オレの持っていた剣は半分ほど短くなってしまった。

つまり、真つ二つに折れてしまったのだ。

「うげっ！？」

斧は多少勢いが衰えたものの、確実にオレの肩口めがけて迫ってくる。

まずい。

このまま食らえば致命傷なのは間違いない。

辛うじて身体が数センチ動いた。

直撃は避けるが、左上腕に斧が食い込んだ。

「ぐっー！」

嫌な音が聞こえた後、激痛が走り、鮮血が迸った。

何てこった。

とんだナマクラ刀だ。

山賊は『ラッキー！』とでも言いたげな顔で更に斧を振り上げる。待て、こんなところじゃ終われねえぞ。まだ反乱軍も結成してないのに。

ドンという音がして目の前の毛皮の身体が揺れた。

違うぞ。

今の音は、オレが斬られた音じゃない。現にこうしてまだ生きている。

シエルフィスの放った矢が、山賊に直撃した音だ。

山賊はプルプルと痙攣すると、ばたりと倒れた。

「ふう。ガンキチちゃんひとりで大丈夫そうかなと思った矢先これだものね。しっかりしてよ正義の味方さん」

シエルフィスが小型の弓を背中にしまいながら言った。

「おいおい。殺したのか？」

痛む左上腕の傷を押さえながら言うオレ。

すると、シエルフィスはオレが倒した山賊を診て。

「こっちは内臓破裂。こっちは頭蓋骨陥没。両方とも脈が無いからジ・エンドね」

「……はは」

殺っちまった。

悪者とはいえ、生まれて初めて人を殺してしまった……。

「大丈夫かい？ 怪我は無かったかい？」

オレは優しくその女の子に話しかけた。

女の子はシエルフィスが言った通り、エルフだ。発展途上なのか、耳はやや短めだが。

年齢は人間で言うところ、10歳くらいかな？ くりくりとしたブラツクレッドの瞳に、ブラックゴールドの髪、長さは肩に届くぐらい。ピンク色のバンダナを頭に巻いている。

そのエルフの女の子は、いきなりオレに抱きついてきた。

発展途上の柔らかい感触がオレの胸に……あわわわ。こんな年端もゆかぬピュアな女の子相手に何を考えているんだオレは。

言っておくが、オレはロリコンじゃないぞ。

「怖かった……。怖かったよお……。うわああああん」

オレの胸で、肩を震わせて嗚咽する。

オレはその頭を優しく撫でて、よしよしする。
うんうん。助けてよかった。
左上腕が少し……いや、だいぶ痛いけど。

*

*

*

「あたし、リティア。リティア・ゼルテ。お兄ちゃんは？」

落ちついたエルフの女の子、急に自己紹介を始めた。

「オレかい？ オレは正義の味方、頑吉だ」

ニツコリと笑って答えるオレ。

相手は子供だから接し方はこれで合ってると思うが。

「わあ！ ガンキチ！ カッコいい名前だね！」

意外な答えが返ってきた。

まあ、笑われるよりはマシだが。

「あつ！ ガンキチお兄ちゃん、腕から血が出てるよ」

うむ、さっき山賊に斬られたからな。

なんて事は口が裂けても言えないが。

「大丈夫だよ。このくらい」

平静を装って言うオレ。

大丈夫なわけがない。かなり深く切って、肉と肉が離れかけてるんだから。今も必死に痛みをこらえているぞ。

なんて事は口が裂けても言えないが。

「ダメだよ！ こんなにいっぱい血が出てるんだから」

リティアが頭のバンダナを解いて、オレの左上腕に巻き付けた。

ピンク色のリティアのバンダナが無残にも赤く染まっていく。

「それ、ガンキチお兄ちゃんに貸してあげる！ 返すのはいつでもいいからね」

リティアはピュアな笑顔で言った。

何か、物凄くじーんとする。

「おう、必ず返すからな」

こんなピュアな子の好意を無下にするわけがない。オレは力強く答えた。

相手は子供だからな。

「それじゃ、あたし、帰るね」

「ひとりで大丈夫か？」

「うん。家、すぐ近くだから」

「また襲われたら、大声でオレを呼べよ。すぐに助けに行つてやる」
「うん……。ありがとう」

呟いたと同時に、何だかモジモジとし始めるリティア。

「……あのね、ガンキチお兄ちゃん。ちょっと、耳貸して」

オレは言われた通り、リティアの顔の前に耳を近づける。

「うんうん。何かな？」

「あのね……。……ちゅっ」

突然、リティアはオレのほっぺにキスをした。ついでに、オレは突然のピュアなキスに身体が硬直する。

「またねっ」

リティアは足早に去っていった。

オレはリティアの唇の感触がまだ残っている頬に手を当てた。

一部始終を見ていたシエルフィスがニヤニヤしながらオレに言った。

「惚れられたわね。正義の味方さん」

「やめてくれ」

「アルステールには黙つとくわ」

「な、何であいつが出てくる」

それに相手は子供だぞ？

それから、左上腕の傷をシエルフィスから治療し直してもらった事は言うまでもない。ただ、包帯は巻かずにリティアのバンダナを巻いてくれと頼んだ。

すると、シエルフィスから「優しいのねえ正義の味方さん」と茶化される。
だって、あんなピュアな子供の好意を無下には出来ないではないか。

次の日の朝。

エルフにしかわからない道順を辿らないと迷ってしまう森をシェルフイスのおかげで無事に抜けて、ようやくオレ達はエルフの町にたどりついた。

奇妙な形の家が並んでいるところは、エルフ村と変わらない。ただ違う部分は森の中に大きな町があるという事とエルフしか居ない事。

早速、オレ達はシェルフイスの友人から自警団のリーダーの事を聞き出した。

名前はルミニオン。エルフの男。

知つてのとおり、ここの自警団のリーダーで、腕利きのスナイパーらしいが、今は訳あって休業中らしい。

しかし、そこを無理言つて何とかしてもらうのがRPGの鉄則だと、言うわけでオレ達は今、ルミニオンの家の前に立っている。

ドアをノックするが、返事はない。
再度ノックする。

コンコン……。

また返事がない。

気配は確かにある。

シェルフイスがそう言っている。

シェルフイスは耳がいい。間違いはない。

と、言うことは居留守を使っているのだ。

となれば、もう出てくるまでドアを連打するしかない。

ひたすらにドアを叩き続ける。

「誰だ！ 鬱陶しいッ！」

マシンガンノックの音に、たまらず中からルミニオンらしい男が飛び出してきた。

褐色の肌、シルバースターの髪、シルバースターの双眸。長い耳。やや野性的なイメージのエルフだ。黒いタンクトップみたいなシャツが野性的な印象をより強く引き立てている。

「ふう、やっと出てきたか」

マシガンノックのおかげで手首の筋肉が疲れた。

ルミニオンはオレ達を見回して。

「あんたらは誰だ？」

訝しげな顔で呟いた。

*

*

*

その後、オレ達はルミニオンの家にお邪魔して、今までの経緯を全部話した。

悪王ユースがレムリアを狙っていること、反乱軍を結成するために優秀な武將に兵が必要なことを。

しかし、まだ自己紹介はしていない。

ルミニオンはじつと黙ったままで、気まずく、自己紹介をするタイミングが掴めなかったのだ。

全てを聞いたルミニオン。

しかし、その答えは。

「ダメだ。俺はもう、戦いとは無縁だ。さっさとお引き取り願おう」
あっさりと家を追い出されてしまった。

途方に暮れるオレ達。

仕方なく町の隅っこで食事の準備をする。
太陽は真上に位置し、昼を知らせていた。

「まるで聞く耳を持つちゃいねえな」

オレがぼやくと。

「きつと、何か理由があるんですよ」

と、レムリア。

「それにしても、自警団のリーダーがあれで自警団が勤まるのかしら」

案外キツイことを言うシエルフィス。

「何にしても、これで振り出しに戻ったな」

アルステール、落胆の色は隠せない。

「オレは諦めるつもりはねえぞ」

こうなりや意地だ。

とことん張りついて説得してやる。

どうせ、ここであいつが仲間にならなきゃ先に進まねえんだから、と思う。

「でも、どうやって説得するんだ？」

「う……」

アルステールのひと言に、オレは言葉を濁す。

ぬう……。そう言われると、全く思いつかない。

……。今の状態は、まさに『途中まで進んでいたのに、ある所でいきなり進めなくなってヒントを求めてフィールドや街をウロウロしているRPGの主人公』状態だな。

いや、『訳がわからないから、とりあえず経験値を稼いで、レベル上げに専念する主人公』か？

こんな意味のないことを考えても仕方がない。

頭を振って雑念を振り払い、改めて打開策を練ろうとした時。

ふと、何かの視線を感じた。

オレはその視線の出所を探ってみる。

と、

女の子が木の陰から頭だけヒョコつと出して、こっちを伺っている。

オレと視線が合うと、トコトコと近付いてきた。

近付いてくると、だんだんその顔がハッキリと見えはじめる。

明らかに見覚えがあった。

それも、昨日の晩に。

「リティア？」

オレは試しに呼んでみる。

すると、その女の子はパアッと顔を輝かせて。

「ガンキチお兄ちゃん！」

ドスンとオレの胸に飛び込んできた。

一瞬だけ呼吸困難に陥った。

「おい」

アルステールの眼が座った。

「まあ……」

レミュリアは啞然とする。

「あら……」

見つかったな、とでも言いたげな顔でオレを見るシェルフ
イス。

『お前、こんな年端も行かぬ子供をたぶらかしたのか』

『いけませんわ。ガンキチさん』

と、誤解しているアルステール、レミュリアにきちんと説明して、
リティアを紹介したのは言うまでもない。

「腕、痛くない？ 大丈夫？」

リティアが、ピンクのバンダナを巻いたオレの左上腕を見て、心
配そうに言った。

何てピュアな言葉だ。

ピンクのバンダナは赤黒い色に変色してしまっている。

「大丈夫、大丈夫！ もう痛くないぞ」

これは本当だが。

シェルフイスの薬は本当によく効く。

1日で痛みが消えて、傷口が痒くなる。

そして、2日後には薄皮が張っているのだ。

こんな薬が現実世界で出回ったら、外科の病院は商売あがったり

だな。

「よかった。心配したんだから」

安心したように、てへへと笑うリティア。

それを見ると、思わず抱きしめたくなる衝動に駆られてしまうぞ。

言っておくが、相手が子供だからだぞ。

オレとリティアのやりとりをジッと見る3人。

「仲いいわね」

と、まずはシェルフイス。

「そうですね。ふたりの間には強い絆を感じます」

レミユリアが、アルステールを横目に言った。

「子供相手に、なに真剣になってるんだか」

アルステールがボソツと言う。

それを聞いたふたりが。

「あら？ キミ、妬いてんの？」

「い、いけませんわアルステール。子供に嫉妬しては」

「ななななっ！ 何を言ってるんですか！ シェルフイスさんに、姫様まで！」

アルステール、真っ赤になって慌てる。

余談だがエルフは、人間より寿命が1ケタ多いらしい。だから、リティアの様な子供に見えるエルフも数字的には100歳を越えているとか。

「ねえ、ガンキチお兄ちゃん。今日は何処か行くの？」

リティアが、オレの痛くない方の腕に腕を絡ませて言った。

こんな気遣いにすら、ピュアさを感じる。

発展途上の胸が腕に押しつけられるぞ。

あわわわ……。また、オレは何を考えているんだ。相手はこんな年端も行かぬピュアな女の子だぞ。

「いや。しばらくはここに居るぞ」

ルミニオンを説得するまではな。と、頭の中で付け加える。すると、リティアの顔がまたパアツと輝いた。

こんなピュアに嬉しそうな顔をされると抱きしめたくなるぞ。

「ホント!?　ねえねえ。何処に泊まるの?　泊まるところ教えて。ガンキチお兄ちゃんに会いに行くから!」

頬を染めたりもせず、眩しいばかりの笑顔で言うリティア。

……。

ピュアだ。ピュアすぎる。

「野宿だな」

「野宿ってことは、泊まるところ無いんだよね?」

「うん」

「じゃあ、じゃあ、あたしの家に泊まってよ、お兄ちゃんが、あたしを助けた人に会いたいつて言つてたからっ」

「えっ?　いいのか?」

「うん!　大歓迎だよ!　お兄ちゃんも、ガンキチお兄ちゃんが来たら喜ぶよ。お友達も」

一緒にみんなで泊まっていつて!」

「それじゃ、お言葉に甘えようかな」

オレの返事に、リティアは大喜び。

だって、こんなピュアな女の子の好意を無下にするなんて、出来るわけじゃないか。

「みんなもいいよな?」

3人に問うと、

「もちろんですわ」

ニコニコと笑顔で返答するレミユリア。

「野宿しなくて済むんなら大歓迎よ」

シエルフィスも快諾した。

「まあ……、別にいいけど」

アルステールはあまり乗り気じゃなさそうだが。

「やったあ！ ガンキチお兄ちゃん、一緒に寝ようね！」
アルステールの眉がリティアの一言に反応した。

「ア、アルステール。あの子は変な意味で言ったのではないのですよ」

いち早くその反応に気付いたレミュリアが慌てて繕う。

「わ、わかってますよ姫様」

しかし、眉はピクついたままのアルステール。

「ガンキチちゃん。人気あるわね」

苦笑いのシエルフィス。

「ここだよ。あたしの家」

リティアが、見覚えのある家に指さした。

案内されて辿り着いた家は、何とルミニオンの家だった。

「リティア。お兄ちゃんて、まさか……。名前は何ていうんだ？」

「ルミニオンだよ。ルミニオン・ゼルテ」

ニッコリとリティアが笑った。

やられた。

何という偶然。

いや、RPGなら最初から仕組まれた事か。

リティアが先に家へ入り、ルミニオンを呼んでくる。

そして奥からルミニオンが出てきた。

「いらっしやい。リティアの命の恩人……。お、お前は！」

オレの顔を見るなり、ルミニオンはビビる。

当たり前だな。

「また会ったな」

しばらくして。

ルミニオンの家に招待されたオレは、おもむろに、テーブルの上に置かれたカップを手取る。

シエルフィスの家で飲んだお茶と同じだ。

何とも言えない味だが、妙に心が落ちつく。

ついでに、これはルミニオンが出してくれた。

さつきとは待遇が全然違うぞ。

ついでに、ルミニオンの態度も全然違うぞ。

「いや、さつきはすまなかった。まさか、リティアの命の恩人とは思わなかったから」

ルミニオンがリティアの頭を軽く撫でる。

「このお兄ちゃんは、ガンキチっていう名前なんだよ。ねー」 ガンキチお兄ちゃん」

「ほう、そうか。ガンキチか。いい名前だ」

またもやウケが良い。

からかっている様には見えないが……。

この後、オレの名前が出てきたのをきっかけに、みんなそれぞれ自己紹介をした。

「あのね、あのね。ガンキチお兄ちゃん、あたしを守るために怪我しちゃったの。剣も折れちゃったの」

リティアはオレの左上腕に指をさす。

元の色が判別出来ないほど、左上腕に巻かれたバンダナの色は赤黒く染まっている。

まあ、剣の方はただ単にナマクラ刀だったただけだが。

「そうか。それはすまなかった……。ああ、そうだ」

ルミニオンは何かを思いついたように立ち上がってその場を離れ、タンスを開けて何かを探している。

そして、黒い布にくるまれた棒状の物体を持ってきて、テーブルの上に置いた。

ルミニオンは黒い布を取った。

結構な装飾を施された剣が姿を現した。

鍔がエルフの耳を象徴するかのように、左右へ突き出している。

ルミニオンはその剣を鞘から抜くと、刃を確認するように見る。

そのやや細めの刀身は約80センチほど、鏡のような光沢を放つ

ている。

あのナマクラ刀とは、雲泥の差だ。

その剣を見て、アルステールの眼がらんと輝いている。

ルミニオンは剣を鞘に収めると。

「ガンキチ。お前にこれを貰ってほしい」

と、オレの前に差し出した。

しかし、オレは。

「いや、そんな高そうな物貰えないぞ」

と、定番な返事をする。

素直に頂いたらそこで話が終わってしまうような気がしたからだ。

それに、タンスの中に、布まで巻いて保管してたんだから、さぞかし大切なものに違いない。

軽々しく受け取れるような代物ではなさそうだ。

すると、ルミニオンはオレをジッと見た。

「お前は、こんな物よりずっと大切なリティアを救ってくれた。十分に受け取る権利はある」

「いや、でも……」

徐々に押し返されるオレ。

「それにリティアを助ける為とはいえ、お前の剣を折った上に、怪我までさせてしまった事のお詫びの意味もある」

ルミニオンはオレの左上腕を見る。

「あと、俺の武器は主に弓であって剣は矢が切れた時ぐらいしか使わない。だから、俺にとってこの剣は宝の持ち腐れというわけだ。

お前のような人間なら喜んで渡せる。それと剣はこれとは別にもう1本持っているから心配するな」

「うう……しかし」

このままではオレは剣を受け取ってしまうぞ。

このまま受け取ったら、仲間に引き込む切っ掛けがなくなってしまいそうだ。

そこで、オレはピーンとひらめいた。

「やっぱり、貰えない。貸してくれるんなら喜んで借りよう」

うむ、咄嗟に思いついた言葉にしては上出来だ。

「しかし、それでは俺の気が済まない」

おっ？ この流れはもしかすると……。

オレは迷わず言う。

「だったら。反乱軍に入ってくれ。それでチャラだ」
すばらしい一手だ。

と、オレが頭の中でガッツポーズをするが、ルミニオンは急に表情を曇らせた。

「……。それは、できない」

重みのある声で、ルミニオンが呟いた。

「何故だ？」

オレが聞くと、ルミニオンは視線を下に落とす。

そして、ちらつとリティアを見ると、オレに言った。

「ふたりで話したい」

外に出よう。そう指でジェスチャーする。

なにやら深刻な表情だ。

多分、リティアに聞かれてはまずい話なのだろう。

オレはルミニオンと外に出た。

何も喋らないルミニオンに付いて行って、辿り着いたところは何と酒場兼メシ屋。

まだ昼過ぎな事もあって、客はまばらだ。

適当に空いている席に向かい合って座る。

すぐにウェイトレスらしいエルフの女が現れて。ルミニオンは注文する。

ウェイトレスが去っていくと。

「酒は飲めるんだろう？」

ルミニオンがいきなり聞いてくる。

「オレは未成年だ」

「歳はいくつだ？」

「17だ」

「なら、大丈夫。エルフの掟では150歳から酒が飲める」

「133年も足りないではないか」

「人間の年齢で、大体14、5歳くらいだな。だから、お前は飲める」

「……」

……オレの世界のモラルは完全無視だな。

しばらくすると、ウェイトレスがつまみと結構大きな陶器のボトルを持って来て、テーブルに置いた。

干し肉を固くなるまであぶって小さく切ったつまみ。

その横の大きな陶器のボトルには、紫色の液体が入っている。

ルミニオンは、グラスをオレの前に置くと紫色の液体を注ぎはじめた。

あからさまに酒の匂いにする。

「どうした？ 飲めよ」

ルミニオンが勧める。

しかし、オレは酒なんぞ飲んだことも舐めたことも無い。真面目だからな。

赤ワインに青色の液体を混ぜたような色をしている目の前の液体。ご丁寧に、グラス満タンにしてある。

「甘いから、飲んでみるよ。俺は辛い酒は苦手だね」

ルミニオンはひと口、紫色の液体を飲んでみせる。

それに興味をそられて、オレはグラスを手に取り、チビツと飲んでみる。

甘い！ メチャクチャ甘い！

まるで、砂糖水を飲んでいるみたいだ。

しかし。

喉を通った途端、まるで熱湯を飲み込んだかのように、熱い固まりが食道を通り抜けていく。

思わずオレはむせた。

「おいおい。大丈夫か？」

「だいじょぶ……」

気分が良くなってきた。

もちろん、これは体の調子が良くなったわけではない。

オレはグラスの中身を一気に呷る。

今度はむせない。

「お、おいおい！ そんな一気に飲んで……」

両手をあたふたさせて、ルミニオンが慌てる。

オレは空になったグラスを底が割れそうな勢いで置く。

自分が何をしているのか、だんだんよくわからなくなってきた。

「さあて。反乱軍に入れない理由。ゆってもらいまひよか！」

「お、お前。眼が座ってるぞ。相当弱いな」

「早く言いなはれ！」

何を喋っているのかもわからなくなってきた。

お前は何処の人間だ。とでも言いたげな顔で苦笑するルミニオン。

しかし、根負けしたかのようにぼつりぼつりと語りだした。

——俺は、一昔。って言っても、50年くらい前だが。

「ごじゅうねんまえだとうう！？ オレはまだ生まれてないでわな
いか」

「落ち着け」

——その頃、エルフ同士の紛争があつてな、俺はそれに参加し
ていたんだ。

あの時の俺は若かった。

「今でも若いでわないか。ぬわーにをケンソンしとるか！」
「慌てるな」

——俺が攻撃した村は、ハーフエルフの村だった。ハーフエルフとは人間との混血のエルフの事だが。

「シエルフィスの住んでいる村と同じよーなヤツか？」
「まあ、よくわからんが、とりあえずそうかも知れん」

——俺は次々にハーフエルフどもを撃ち殺していった。だが、女の子は狙わなかった。それが俺のポリシーだった。

「ふむ！ 気が合うでわないか！」

ふらつきながら隣に座ると、オレはルミニオンの肩をバンバン叩く。

ルミニオンはもう慣れたのか、無視して続ける。

——それがだ。俺の目の前で他の仲間が女の子を殺そうとしやがったんだ。見て見ぬふりなんて出来るわけがない。俺は我を忘れて、女の子を守る為、仲間を撃ち殺してしまった。そして、女の子を連れてその場から逃げだししまった。

「うむ、あんたはエライ！」
しかし、もうルミニオンはオレの言葉に反応しなくなった。

——おかげで俺は、エルフの間でお尋ね者になってしまった。そして、それから俺はその女の子と一緒に、ほとぼりが冷めるまで身を隠して暮らすことにした。

生気を抜かれたような目をしていたその子を、黙って見過ごせるほど俺は非情な心を持ち合わせていないからな。

その子は目の前で親を殺害されたショックからか、大部分の記憶が飛んでしまっていた。自分の名前すらも。

そこで、俺はその子にリティアと名付けて『俺とお前は兄妹だ』と偽りの記憶を植えつけた。

リティアはすぐに俺と馴染んだよ。それこそ本当の兄妹みたいにリティアと平和に暮らす。それが俺に出来る小さな償いだった。そして、俺はリティアの笑顔を見る度に思ってたんだ。もう、戦うのはやめようってな。

これ以上、リティアのような犠牲者を出したくなかったんだ。

「それはチガウな」

座った眼のまま、オレは言った。視界は既にグルグルと回っている。

「!？」

ルミニオンがオレを見る。

「諸悪の根源を消さねえ限り、お前が戦うのをやめたって意味がねえ……ヒック」

「……」

ルミニオンは目を逸らした。

「ヒック……それにユースってヤツは、聞くところによると、とんでもねえ悪人だ。クリスエルム王国の周辺を制圧したら、絶対にここにも攻めてくるだろうな……ヒック」

「……」

ルミニオンはジッと黙ったまま、空になったグラスを見つめている。

「軍事演習で、村をひとつ焼き払うような奴だから。女子供にも容赦はしないぜ……ヒック!」

辛うじて真面目な話ができているが、そろそろ限界が近い。

「オレだってよお。あいつらを危険な目に合わせたくねえぜ。可愛い奴ふたりも居るし、美人も居るし。かといって、今のオレに守る力はあるのか? と言われると、ハッキリ言っただけヒック」

「……」

「だったら、自分で守る力を付けるしかないヒック。つまり、反乱軍結成ってワケだヒック」

グルグルと回る世界が少しずつ気持ち悪く感じ始めてきた。

「諸悪の根源を潰してしまえばヒック、いつ殺されるかなんて怯えて暮らさなくても済むし、戦争も無くなるヒック。つまり、リテイアのような犠牲者がなくなるってワケだヒック」

「……」

「ルミニオン。お前がやってるのはただ逃げているだけだ。食われそうなニワトリみたいになヒック」

我ながら、とてつもなく格好をつけたセリフだ。シラフのオレなら、言ってて鳥肌が立っただろう。

「逃げ回ってても、いつかは捕まるだけだぜヒック」

「……」

ルミニオンは無言で空のコップに紫色の液体を注いだ。

「もう1回聞くぞヒック。オレ達反乱軍結成の為に協力してくれないかヒック？」

オレはルミニオンをジッと見つめたが、正直焦点が合っているのかどうかわからない。

ルミニオンは、一気に紫色の液体を呷ると、グラスを置いた。

そして、ぼつりとひと言。

「少し、考えさせてくれないか」

オレは1回、ヒックとしゃっくりをして。

「ああ。いい返事を待ってるぜ……うつぶ」

オレの頬が大きく膨らんだ。

この中身はもちろん空気ではない。

ルミニオンの顔色が変わる。

「——！？　おい！　待て！　我慢しろ！」

慌ててオレを酒場から連れ出した。

オレは出すモノを全部出した後へベレケになり、ルミニオンの肩

を借りながらリティアと3人が待つ家に帰った。

辺りはもう黄昏に染まっている。

家に入ると、4人は見慣れない絵柄のカードゲームをやって盛り上がっていた。

多分、リティアが提案したのだろう。

「あ、お帰り！ 遅かったね」

と、リティアがオレに駆け寄ってくる。

しかし、今のオレはかなりデンジャラスだ。

「おおー！ 可愛いリティア！ 可愛い唇頂キッ！」

タコのように唇を突き出し、リティアにキスを迫るオレ。

「きゃーっ みんな見てるよ！」

こんなコトを言っても、嫌がらないリティア。ちゃっかり目も閉じている。ああ、オレは年端もゆかぬピュアな女の子に何という事を……。

リティアの唇に、ちよっただけ触れた瞬間。

「帰ってくるなり、ナニをやってるんだお前は……！」

「妹に何をするかッ……！」

ルミニオン、アルステールのふたりから同時に、ばききき！ という音がしつくりくるパンチを貰った。

しかし、酔ったオレはその程度では怯まない。

どこかの医者が言っていた。酔った患者には麻酔は要らないと。

つまり、オレはさほど痛みを感じなかったのである。

オレは、顔にめり込んだアルステールの拳を掴むと。

「おおー！ 可愛いアルステール！ その唇頂キッ！」

今度はアルステールに抱きついて唇を奪おうとする。

どうも、オレは酒が入るとしつこくなるようだ。

不思議な事に、邪魔をする……もとい、止めに入る奴が誰も出てこない。

「なな、何を言ってる！ ん？ 酒の匂い……」

アルステールは可愛いという言葉に、一瞬抵抗が弱まった。

酔っているオレは、その隙を見逃さない。

カチンと前歯同士が激突。

「……」

アルステール、一瞬『何が起こったかわからない』といった表情をする。

シエルフィスは『やった！』という顔で、レミュリアは真っ赤になって『きゃー』とでも叫びそうな顔。そして、ルミニオンはリティアの目を塞いでいる。

アルステールの身体に両腕を回して固定して、唇を堪能するオレ。柔らかくて、しっとりとしている。

一瞬、ルミニオンの手が緩んだ隙に、リティアはその光景を見て、
「あーっ！ ガンキチお兄ちゃん浮気者ーっ！」

泣きそうな顔で叫んだ途端、

「ぷはっ！ き、きゃあああああっ！」

ばっちーん！！ という音が鼓膜に直撃。

素早く身体を離れたアルステールは、女らしい悲鳴を上げながらオレに強烈なビンタをかましたのだ。

今はただでさえバランス感覚が鈍いのに、そんなものを食らわしてくれから、床に倒れて頭を強打してしまった。もちろん、これで気絶したのは言うまでもない。

それからオレが目を覚めたのは、夜だった。

オレはベッドの上に寝ていた。

上半身を起こしてみる。

「うつ……」

頭がズキズキしてみぞおちの辺りに違和感がある。

これが二日酔いか。

……って、そんなに時間が経っているのだろうか？

ルミニオンと酒場に行って、紫色の酒を一気飲みしたところまでは覚えているんだが、それから先の記憶が全く無い。

何で、オレはここに寝ているんだ？

痛む頭を押さえて、オレは部屋を出た。

リビングに行くと、ルミニオンとリティア、レムリアとシエル
フィスが居た。

アルステールの姿は見えない。

「あ、やっと起きてきたわねキス魔」

シエルフィスはオレの顔を見るなり、ニヤニヤしながら奇妙なコトを口走った。

キス魔？

「随分大胆な行動でしたわよ。見直しましたわガンキチさん」

レムリアも奇妙なコトを言う。

大胆な行動？

「お前、意外と好き者だな」

ルミニオンまで、ニヤニヤしながら奇妙なコトを言う。
好き者？

「ガンキチお兄ちゃんの浮気者ー！」

リティアは、身に覚えのないことを言ってくる。
浮気者？

オレはこれまでに出てきた言葉を整理してみる。

キス魔、大胆な行動、好き者、浮気者。

そして、姿が見えないアルステール。

……。

ひよつとすると、ひよつとして。

「アルステールの姿が見えないが？」

オレは恐る恐る聞いてみる。

「外に出てるわよ。探してみたら？」

シエルフィスがニヤニヤする。

「くれぐれも、焦らないでくださいね。……はっ。私ったら、なんてはしたない」

レミユリア、自分の言葉に真っ赤になる。

「外に出るんなら、これを持っていけ」

ルミニオンがニヤニヤしながら、昼間オレに見せた剣を差し出した。

オレはありがたくそれを借りると、外に出た。

外はもう真っ暗だった。月が出ているみたいだが、雲に隠れていてよく見えない。

現実世界なら街灯があるんだが……。

あちこちを歩き回り、オレの脳内時計で30分ほど経った。

オレは公園らしき広場の近くに来ていた。

広場の中央にはでかい樹がある。

この樹は高さ30メートルはあるだろうか、現実の世界では見たことがない樹だ。

暗闇で葉っぱの色が藍色になり、夜風に揺られてざわめいている。オレは何気なくその樹の下に足を運んだ。

「誰だ？」

突然、声が聞こえた。出所はすぐ近くということも瞬時にわかった。

「アルステールか？」

オレは訊ねてみる。

「そ、その声はガンキチ！」

ビビった声で返事が返ってきた。

どうやら、正解のようだ。

目を凝らしてよく見ると、すぐ側に青いショートヘアが見えた。
オレは遠慮なく隣に座ると。

「こんなところでひとりで何やってんだよ」

「……」

アルステールは顔を背ける。

オレはその顔を追って覗き込む。

暗くてよく見えないが。

「お前、何か変だぞ」

「そ、それは、お前が……」

アルステールは言いかけて口を手で塞いだ。

「？」

「……」

そして、黙り込む。

奇妙な沈黙がしばらく続いた後。

「あのさ」

「な、何？」

「オレ、お前に何をしたんだ？」

「は？」

「いや、全く記憶が無いんだ」

「ふっ、ふざけるな！」

ゴンと頭を小突かれる。

「ぐわっつ！ ほ、ホントに覚えてないんだ」

今のバッドステータスでその攻撃はクリティカルヒットだ。

「……覚えてないのか？」

「ああ、ルミニオンと酒場に行つて、酒を飲んだところから。さっ

きみんなから色々言われたけど。キス魔とか大胆な奴とか」

小突かれた事で痛みを倍増させられた一日酔いの頭を抱えながら、
かろうじて口が開いた。

すると、アルステールはまた後ろを向いて。

「……その通りの事をしたよ。ボクに」

何だと？

オレが、アルステールにキスした？

オレは全く記憶に無いが、本人が言うんだから間違いない。
途端にオレは何を言っていていいかわからなくなった。

この気分になったのは、これで2回目だ。

また、奇妙な沈黙。

「あの……。ごめん」

勇気を出して、オレはその沈黙を破った。

「何で、謝るんだよ」

背中を向けたまま、アルステールが呟く。

「だ、だって、オレ、お前に……」

すると、アルステールはこっちを向いて。

「いいよ、もう。酔ってたんだろう？」

その時、雲に隠れていた月が顔を出した。

月明かりに照らされて、アルステールの顔がよく見える。

照れたような、そうじゃないような。

何か、少し微笑んでいるような顔に見える。

ブラックブルーの双眸に、オレの顔が写っている。

そして、お互いに見つめ合っている事に気付くと、お互いに慌て
て背を向ける。

な、何をドキドキしてるんだ？ オレは。

心臓がヘンだ。

必要以上に血液を送り出している。

またまた、奇妙な沈黙。

何か、ヘンな雰囲気だ。

「さ、さて。ガンキチ、そろそろ帰ろう」

ヘンな雰囲気を打ち消すかのように、アルステールが立ち上がった。

「あ、ああ、そうだな」

つられてオレも立ち上がる。

その時。

「あ……」

急にアルステールが頭を押さえてフラついた。

オレはシェルフイスの家の出来事を思い出した。

立ちくらみである。

すかさずオレはアルステールの身体を支えようと、手を伸ばした。まるで、偶然か、仕組まれたことか。

アルステールの身体を受け止めようとした手は一日酔いの鈍い感覚のおかげで空振り。受け止めたのはオレの胸だった。

結果的に、アルステールを抱きしめる形になってしまった。

いつものオレなら慌てて離れるはずだが、ヘンな雰囲気に頭がどうにかなったのか、それともこのバッドステータスのせいか、手が離れてくれない。

アルステールの背中に回したまま、オレの手は意思を持っているかのように、かたくなに命令を拒否する。

アルステールもヘンだった。

バランスを取るためにオレの背中に回した手を、いつまで経っても離さない。逆に力を入れてくる。

アルステールの鼓動が、速いテンポで伝わってくる。オレも同じだが。

抱きしめてみると、妙に小さく感じるアルステールの身体。

鎧の下に着る服だろうか、少しざらついた布の感触。と、同時に柔らかな身体の感触。

重い鎧を着て、結構長い剣を振るう騎士とは思えないような柔ら

かい身体だ。

お互いに抱き合ったまま、どれくらいの時間が過ぎただろうか。全く同じタイミングで、身体を離して。

「ご、ごめん」

「す、すまん」

似たような言葉を同時に言う。

それからその場に突っ立ったまま、オレとアルステールは背を向けあつて沈黙。

何だこの奇妙な空気は。

しばらくして。

火照った頬を冷たい風が撫でていったおかげか、少し落ちついてきたオレ。

幾分か、頭痛も治まってきた。

「アルステール」

「何？」

「オレが『鍛えてやるから覚悟しとけ』と言ったのを覚えてるか？」

「ああ、覚えてる」

その言葉を聞くと、オレはそこら辺に落ちていた剣ほどの長さ、太さの枝を2本拾って1本をアルステールに放った。

反射的に受け取るアルステール。

「オレの修行も兼ねて、特訓だ」

オレはニヤリと笑った。

それを理解したか、アルステールも口の端を持ち上げた。

「ああ」

枝を正眼に構え、オレとアルステールは向き合う。

アルステールの構えは、騎士の構え方なのか枝を頭の横で水平に構えている。

「妙な構え方だな」

アルステールが言った。

「オレの世界での構え方だ」

オレは足を1歩前に踏み出す。

そして、すぐに戻す。いわゆるフェイントだ。

それに反応して、アルステールは防御の姿勢をとる。枝を正面で横に構える。

その無駄な動きで、胴がガラ空きになった。

「どうっ！」

オレはアルステールの胴に軽く枝を当てた。

「！」

胴に一撃当てられたアルステール、そんなバカな！ と、言いそうな表情だ。

「甘いな」

オレはさつき踏み込んだ時、振動がバッドステータスの頭に響いて、頭痛を引き起こしていた。

頭に手を置きたい衝動に駆られる。

それを必死に我慢する。

あのセリフの後に頭を抱えたらどっちがやられたのかわからなくなるだろ？

「っ、強い！」

余程のショックを与えたのだろっ、アルステールは本心がポロリと出たようだ。

真剣を使っていないという安心感もあったのが、アルステールの動きがよく見えて、冷静に反応できた。

アルステールの動きは、何だか部活の仲間によく似ている。だから動きを読めたのかも知れない。

「も、もう一本！」

アルステールが再び構えた。

オレはニヤリと笑って頷くと、再び間合いを取り、枝を正眼に構

える。

今度のアルステールは積極的に斬りかかってきた。その姿も、何だか部活の仲間にそっくりで、どう仕掛けてくるかも何となく読めた。

振り下ろしてくるアルステールの枝にタイミングを合わせて、横に弾いた。

その衝撃でアルステールの体勢が崩れる。

「めんっ！」

頭に寸止めをする。

まさか、防具を付けてないのに当てるわけにはいかないだろ。負けを悟ったアルステール。枝を持った手を下ろす。

「こりやまずいな」

オレも枝を持った手を下ろす。

もちろん、この言葉はオレにも当てはまる。

これから大きな戦いが待っているというのに、部活のレベルなんぞ即戦死だ。

「……。城で練習した剣技が全く通用しないなんて」

アルステールは俯いた。

「さつき気付いたけど、何となく先が読めるようなモーションがあるな」

とてつもなく自分の事を棚に上げているような気がするが……。

まあ、それはこの際置いといて。

とりあえず、顧問の先生から習ったことを思い出して……。

「ちよいと練習してみるか」

「頼む！」

アルステールは頷いた。

その眼は、強くなろうと努力する者の眼だった。

結局、あの後1時間以上アルステールと特訓をした。

アルステールののみ込みは予想以上に早い。まだオレの勝率の方

が高いが、そこそこやり合えるようになった。

最初は軽いと思っていた枝は時間が経つことに重くなり、後の方になると持っていることすらつらくなった。

さんざん動き回った事で大量の汗が頬を流れ、汗で濡れた服は体にピッタリと張りつきまとわりつく。外の気温が低いこともあって、頭から湯気も出ていた。

さすがに、部活でも1時間以上ぶつ通し休憩無しで乱取りをしたことは無い。疲労がピークに達しても、アルステールは『もう一本！』と頼んでくる。音を上げて特訓をやめたのはオレの方だ。

精も根も尽き果て、へろへろになりながらもオレとアルステールは何とかルミニオンの家にたどり着いた。

「あらあ。汗をいっぱいいかちゃって。そんなに激しいコトをしたのかな？」

シエルフィスが、帰ってきたオレとアルステールを見るなり茶化してきた。

「まあな」

その時のオレはへろへろの為か、はたまたアルコールが頭の中に残っていたからか、シエルフィスの言った言葉を理解できていなかった。

それに、実際激しい事をしたんだから。

しかしオレの返事に、シエルフィス、レミュリア、ルミニオンの目が点になった。

リティアだけは、何の事かわからないようで「え？ え？」と、周囲の反応を伺っている。

「ば、バカッ！！ 何を言って……」

アルステールが真っ赤になって、オレの首を掴む。

「ついにヤツたのね……」

「ああ……。アルステールが私より早くオトナに……」

「行動力のある男だな。別の意味で」

3人座り込んで、口々に言いたい事を言いまくる。

それらを聞いて、初めてさっきシエルフィスが口にした言葉を理解できた。

アルステールとふたりで言い訳開始。

「違うぞ！ さっき言ったのはこいつの特訓で激しいコトをしたって意味で、返事したんだ！」

「そうですね！ ボクはただ抱きついただけで……はっ！」

アルステールは慌てて口を塞いだ。

「おい」

つい、ポロツとかもしれないが、言う必要のないことを口走ってくれた。

そのおかげでまた、3人の目が点になった。

そして、また3人座り込んでボソボソと言う。

「アルステールって、意外と積極的なのね」

「城に居た時は、相当な奥手でしたのに」

「うらやましい限りだな」

「コラコラーツー!!」

このイジメは延々と続いた。

そして、早朝。

自分の部屋でリティアと一緒に寝ていたルミニオンは、リティアを起こさないようそつと身を起こした。

リティアは『ガンキチお兄ちゃんと一緒に寝る!』と言い張っていたが、ルミニオンはかたくなとして許さなかったのだ。

布団の不自然な動きに、リティアは目を覚ました。

眠そうに目を擦ると。

「んん……むにゅ……お兄ちゃん。何処に行くの？」

「ちよつとな……。そうだリティア、ガンキチお兄ちゃんと一緒に居たいか？」

「うん！ 少し浮気者だけど、ガンキチお兄ちゃん大好きだもん！」

「そうか……。わかった。それじゃ俺はちょっと出掛けるけど、いい子にしてるんだぞ」

「うん。いつてらっしゃい！」

リティアの笑顔を見て微笑むと、ルミニオンは静かに出ていった。

——全く……。あいつも罪作りな奴だ——。

「ガンキチちゃん、まだ起きてこないわね」

「ええ。そういえば、アルステールも起きてきませんわ」

「あのふたり、よっぽど疲れるコトをしたのね」

「い、いやですわシエルフィスさん。そんな変な意味に聞こえるようない方……」

「え？ 変な意味って？」

「そ、それは……えっと……その……」

「あははっ。ウブねえ。姫様」

「も、もう！ からかわないでください！」

もう太陽は真上まで昇ってきている。

オレはまだ睡魔に負けて脳みそを占領されていた。

昨日のアルステールの特訓が相当効いたんだろう、寝返りをする
と肩が痛む。

頭の中がまだ微睡んでいて、まぶたの裏側には昨日の特訓の風景
が浮かんでくる。

「アルステール！ かかってこい！」

オレは木刀を正眼に構えた。

「行くぞ！ ガンキチ！」

アルステールは気合を発すると、勢いよく斬りかかってくる。

アルステールの攻撃を受け止めて、時にはかわして防御する。オ
レが教えたとおり、アルステールはフェイントを器用に使い、たく
みに攻撃してくる。

何度か冷や汗をかく受け止め方をして、木刀を落としそうになるが、オレは力を振り絞って木刀を握りしめた。

たった1日で、ここまで強くなるものなのか？

ついに、オレとアルステールの木刀の根元が力チ当たり、ギリギリと鏝ぜり合いをする。

たった1日で追い越されてたまるか！

オレは本気で木刀を押しかえす。

木刀は徐々にアルステールの方へ傾いて行き、オレとアルステールの顔の距離が近くなった。

すると、アルステールは何かを企んでいるような笑みを浮かべる。次に、木刀を横にずらして顔をグンと近付けてきた。そして、唇が当たった。

ついでに前歯も。

「！」

オレは硬直して動けなくなった。

アルステールは素早く唇を離すと、オレの脳天へ木刀を一撃。

なんて卑怯な、キスは反則だ。

その一撃でオレは世界が後ろへ流れていく。
倒れる……。

ドスンという音と共に、

「はっ！？」

オレは目を覚ました。

気がつくと、枕と一緒に床で寝ていた。

ベッドの上には、オレが着ていた布団が取り残されている。

しかし、何て夢を見やがるんだオレは。

オレは寝ぼけた頭を抱えつつ部屋を出て、リビングへ向かった。
その時、丁度起きてきたらしいアルステールと、ばったり出くわす。

「あ……」

「う……」

何故かオレは固まってしまった。

さっきの夢を見たせいだろうか。

アルステールも固まっている。

何故か顔が熱くなる。

アルステールの頬も、何だか赤くなっているような……、まだ酔っているのかオレは。

「お、おはよう。遅かったな」

「あ、ああ。お前もな」

「……」

「……」

ヘンな沈黙。

また昨日のヘンな雰囲気復活する。

*

*

*

エルフの町の中で一際大きい家があった。

町長の家だ。

町長は齢800を数える長老でもある。

額に刻みつけられた皺は、今までの経験の深さを物語っている。

その町長の前で、ルミニオンが何やら必死に頼み込んでいる。

「町長、自警団の兵を半分ほど貸していただけないでしょうか」

町長は眉間の皺を更に深く刻み込むと、

「しかし……、自警団の兵が少しでも減ると、トパ山の山賊どもが増長しかねん。今はひとりでも多く町を守る者が必要なのじゃ」

「そこをなんとか……。頼みます町長！」

ルミニオンは額を地面に擦り付けそうな程深く土下座をする。

「うつむ……。わけを聞いたからには、こちらが無下にするわけにはいかんし……。かと言って自警団の兵を減らすと町がやられてしまっし……。おお！ そうじゃ！」

町長は突然立ち上がって、手をポンと叩いた。

ルミニオンは不思議そうに顔を上げる。

「お主ら、山賊を退治してくれぬか！ そうじゃ、それがよからう！ あの山賊どもが居なくなってくれば、この町を守るための兵は必要なくなる。半分と言わず、全部連れていっても構わんよ。それに、ルミニオン。お前のスナイパーの腕も、披露できるではないか」

ルミニオンはしばらく考えたが、もはや選択の余地は無かった。
ルミニオンはゆっくりと頷いた。

*

*

*

この手は何だ？

一体ナニをしようというんだ？

オレの手はアルステールの手を勝手に握ってしまった。

アルステールは全くと言っていいくらい抵抗をしていない。

「あ、あの……」

真っ赤になって顔を伏せながら、アルステールはオレを上目遣いに見る。

「手にマメはできてないか？」

何を言っとなるかオレは。

「それは……大丈夫だと思う……けど」

そろそろこのままでは誤魔化しがきかなくなるぞ。

そこへ、たまたま何かの用事で廊下へ出てきたシエルフィスがその光景をばったりと見てしまった。

「……」

シエルフィスは普通の表情のまま固まった。

オレとアルステールも手を握り合ったまま固まる。

5秒、10秒くらい経ったか、シエルフィスは元に戻ると、

「野暮だったわね……」

ひと言呟くと、その場からそそくさと去っていった。

弾かれたように、オレとアルステールは手を離れた。

「ご、ごめん」

「す、すまん」

また似たような言葉をお互いに言う。

と、その時。

突然、周囲が騒がしくなった。

男の気合を発する声、女子供が叫ぶ声、悲鳴。

その声はオレとアルステールを外へ飛び出させるのに十分な効果があった。

玄関の前でシエルフィス、レミユリアがリティアを連れ出してその光景を啞然として見ていた。

馬に乗った山賊、奇妙な刀を持った者も居れば、でかい斧を持った者も居る。そいつらはそこら辺の民家を手当たり次第に襲い、金品を強奪している。それを必死に阻止しようと弓を引くエルフの自警団。

しかし、山賊の死体は転がっていても、エルフの死体はひとつも転がっていないかった。

ルミニオンがオレ達を見つけると、素早く駆け寄ってくる。

「トパ山の山賊だ！ みんな手を貸してほしい！」

オレは口の端を持ち上げると、

「わかった、手伝うぜ」

オレはルミニオンから借りた剣を握り、アルステールはクリスエラム王国騎士の剣を手にする。

山賊の数人が、オレ達に襲いかかってきた。

オレは猛然と山賊に突進し、アルステールもそれに続く。

シェルフィス、ルミニオンが後ろから援護射撃をし、山賊が怯んだところをオレの剣の一撃。

もちろん、峰打ちだぞ。人を殺すってのは以下略。

しかし、この剣は軽い。木の枝を持っているようだ。おまけに丈夫だ。山賊の斧を受け止めても傷ひとつ付かない。こういう素材で出来ているんだろうか。

アルステールの一閃。オレの峰打ち。シェルフィスとルミニオンの援護射撃。

戦意を無くして逃げていく山賊。戦闘不能になる山賊が続出する。そして、小さな反乱軍＋自警団が徐々に形勢逆転をしていき、遂には山賊を追い払った。

「はっはっは！ 尻尾を巻いて逃げていきやがった。これだけ痛めつけば当分は襲ってこないぞ」

オレは意気揚々と腕組をして言った。

「何言ってるの。あんたも痛めつけられたでしょうが」

シェルフィスがオレの血まみれの左腕を握って言う。

「いででっ！」

そう、オレは山賊の刀で斬られ、傷を負っていた。何も考えずに特攻したのがまずかったのか。

それから、オレはシェルフィスから治療をしてもらう。腕の傷は結構深く、縫わなければいけないほどだった。実際に何針縫ったかは眠らされたからわからないが。

オレが目覚めると、ルミニオンはみんなを家のリビングに集める。

そして、町長から、兵を貸してくれる代わりに山賊退治を依頼されたことをオレ達に話した。

「おおっ！ ということは、オレ達の仲間になるってことだな！」
ルミニオンは返事をする代わりに、右手を差し出した。オレはその手を力強く握る。

「しかし、この人数であの山賊どもを退治できるのか？」

アルステールはオレをジッと見ながら言った。

「まあ……何とかなるだろ」

RPG的に考えると、本当に何とかかなりそうな気がした。

普通に考えれば、無謀以外の何者でもないのだが。

「そりゃあお前の腕は信用してるけど……お前、怪我してるじゃないか」

「このくらい何ともないぞ」

ヤセ我慢をするオレの左腕をシエルフィスが掴む。

「ぐわっ！」

「何ともないじゃない。3日は動かせないわね」

「3日だと？ そんなに待ってられねえぜ。オレは一刻も早く元のせか……あわわわっ。……じゃなくて、エルフを苦しめる山賊をこらしめてやりてえんだ。それに、ルミニオンから借りた剣なら右腕だけでも十分持てる」

少々言葉を詰まらせたが、オレの熱演に5人は凄い物を見るような眼で注目する。

「本気で言ってるの？」

「本気だ」

シエルフィスは、はあ、とため息を吐くと。

「……わかったわよ。ただし、左腕は一切使えないわよ。傷口が開くと面倒な事になるからね」

根負けしたように呟いた。

ルミニオンは立ち上がると、またタンスを開けてゴソゴソと何かを探しはじめる。

「ほれ、これを着けてろ」

オレに何かを放った。慌てて右手で受け止める。

それは、RPGでよく見る鉄の小手だ。

いや、鉄にしてはやけに軽い。チタン合金か？ でもそれにしては色が白っぽい。

それにしても、ルミノオンにとっては武器と防具は、衣服と変わらない扱いのようだ。

明朝。

みんなが山賊討伐の準備をしている最中、オレは左腕の痛みをこらえて、ルミニオンの小手を着けた。

そして、右手でルミニオンに借りた剣を握り、ヒュンとひと振りしてみる。

多少、バランスが悪いが弱い奴を相手にするくらいなら問題はなさそうだ。

あくまで『弱ければ』の話だが。

「レミユリアちゃんと、リティアはお留守番な」

オレはアルステール、ルミニオン、シエルフィスの4人で行くつもりだった。

「何を言っているのです！　ただでさえ少人数なのでしょう？　それに私のための戦いなのに、私だけ隠れて傍観なんて出来ません。私も行きます！」

すさまじい気迫でオレにくっついてかかるレミユリア。

「姫様……」

アルステールもその普段とかけ離れたレミユリアの様子に驚いて、言葉をなくしたようだ。

とは言ったものの、武器を扱えない姫様が来ても足手まといになるのは目に見えている。

「あたしも行くよ。ガンキチお兄ちゃんのお手伝いする！　弓をお兄ちゃんから習って使えるようになったんだからっ」

リティアまで同じ事を言い出した。

助けを求めるようにルミニオンへ目を向ける。

「おい、こんなこと言ってるけど、ルミニオン、お前だってリティアが危ない目に遭うのは勘弁だよな？」

ルミニオンは少し考えた後、

「そりやまあ、心配じゃないと言ったら嘘になるが——、リティアは俺の妹だ。やる時はやるように育てたつもりだ」

「だけど、この前その山賊に襲われたんだぜ？」

オレが言い終えた後、リティアは急に口を挟んできた。

「あの時はひとりだったから……、ガンキチお兄ちゃんと一緒なら怖くないもんっ」

リティアは意外と頑固のようだ。

「まあ、いいんじゃないか？ 危なくなったら守るくらいの余裕はあるだろ？」

待て、ルミニオン。

左腕が使えないオレにそんな余裕があると思うか？

ましてや、相手の人数もわからないってのに。

「いざとなったらガンキチちゃんが囷になって私達を逃がしてくれればいいじゃない」

恐ろしいことを言ってくれるシエルフィス。

見捨ててる気満々だ。

「ちよつと待て、アネさん、それはあんまりだ」

「冗談よ」

意地悪な笑みを浮かべるシエルフィス。その赤い目はとても冗談を言っているようには見えなかった。

オレは必死に訴えたつもりだったが、それも空しく、結局レミューアとリティアのふたりを加えた6人でトパ山へ行くことになってしまった。

トパ山——。

隙間無く立ち並んだ樹木と、ゴツゴツした岩がそこら辺に転がっている。

そこは、まるで自然の要塞のようだ。

かなり足場が悪く、歩きづらい。

登り始めてオレの脳内時間で2時間が経過しようとした時、ゴツ

ゴツした堅い岩肌で、シエルフィスから買ってもらったブーツに早くも穴が開きはじめた。

「うおっ！ 堅い岩肌が足の裏直撃だぞ！」

「大丈夫？ あらら……こんな事になるんならもうちょっと高い靴を買ってあげた方が良かったわね」

皮一枚となったオレのブーツの底を見て、シエルフィスが顎に手を当てながら言った。

「そんなに安物だったのか？」

「バーゲン品だったの」
「……」

仕方がないので、穴が開きかけている足のブーツをかばいながら、まだ大丈夫な方のブーツで踏みしめて更に先へ進んだ。

やっとひらけた場所に出たその時。

「何か居るわ」

シエルフィスが何かに気付いた。

オレとアルステール、ルミニオンは辺りを注意深く見回す。リティアはまだ慣れない手つきで弓を構える。

「そこに居るわね」

シエルフィスが、手前の大木に弓を向け、弦を引き絞る。

オレは悔しいことに、何処に何が居るのかさっぱりわからなかった。

すると、パキッという枝を踏む音をきっかけに、結構な数の山賊が姿を現した。

その数、20、21、22、23……。

これ以上数えている余裕はない。オレは右手で抜刀し、応戦する。オレとアルステールは剣を振るい、ルミニオン、リティア、シエルフィスは矢を放って援護する。

迫ってくる山賊へ苦し紛れに投げつけた石が当たって、痛そうな表情をしながらノックアウトする様を恐る恐る見ているレミュリア。

山賊3人から一斉にかかってこられた時はかなり焦ったが、アルステールのフォローもあってなんとか切り抜けた。

まるで、アリが巣を守ろうと総動員するが如くワラワラと出てくる山賊。

峰打ちで次々と山賊どもを気絶させるが、徐々に右手の筋肉は悲鳴を上げはじめ、スピードが落ちはじめた。

そんな握力の弱った右手の剣に山賊の斧を受け止めた瞬間、剣を落としそうになり、思わず両手で握ってしまった。

ぶつんという音が聞こえたような気がしたかと思うと、激痛が走った。

「ぐぐつ……。この野郎！」

オレは渾身の力を込めて、山賊の腹を蹴りその手に持っている手斧を叩き落とした。

左腕の痛みを感じる暇もなく、また次の山賊が襲いかかってくる。

「ち、ちくしょう！」

右手が上がらない。足も動かない。

疲弊しきった右腕は、足は、もはや言うことを聞いてくれなかった。

休憩が必要だが、そんなことをすれば永遠に休んでしまうことになりそうだ。

斧が振り上げられる。

ルミニオンはリティアとシエルフィスを、アルステールはレミュリアを守るのに必死で、オレを助ける余裕なんぞあるわけがない。

やはり、これだけの人数で挑んだのは間違いだった。

せめて、10人くらいで……。

こんなことになるなら——、あのふたりだけは縄で縛ってでも留守番させるべきだった。

「ガンキチ——！」

アルステールの叫ぶ声が聞こえる。

何故か、人間というのは死ぬ瞬間、世界がスローモーションにな

る。

ちくしょう——。まだクリアしてないってのに——。
斧が振り降ろされた。

このまま脳天にあの分厚く固い手斧が食い込んだら、まず即死だろうな。

オレはギョツと目をつぶった。

その瞬間、寒気のある音が響いた。

しかし、痛みはなかった。

あまりの激痛に痛覚が麻痺したのか。

それとも——。

「!？」

まだ動くまぶたを開けて前を見ると、山賊の手斧は何故かオレの肩を掠めて地面にめり込んでいた。

その山賊は手斧を引き抜くと、再び襲いかかってくる。

ブンツと振られた手斧はまたも何故かオレを大きく逸れて空振り。
その次は斧を振り上げて威嚇。

こいつら、何やってんだ？

オレは不思議に思い、周囲を見る。

すると、何故か他の山賊も同じ事を5人にやっているではないか。
そして、いつの間にかオレ達6人と山賊どもの間に見えない壁が
そこにあるかのように空間が作られた。

「……何だよこの山賊ども。脅すだけでボクらを殺そうとしない……」

……

オレと同じ疑問を、アルステールが口にした。

「そういえば……」

ルミニオンが何かを思い出して口を開いた。

「町が襲われた時も、金品を持って行っただけで、山賊以外の死人はひとりも出なかった……」

「妙な奴らね……」

「実はいい人なのでは？ 話し合えばわかるかもしれません」

「でも、あたしはこの人たちに襲われそうになっただよ」

口々に言い合う中、山賊の壁が2つに割れた。

「話し合えばわかりそうな奴が出てきたぞ」

オレはこっちにスタスタと歩いてくる山賊の頭目らしき男を見て言った。

その男が先頭に立つと、2つに割れた山賊の壁は元に戻る。

山賊の頭目は大男というイメージがあるが、この男はやや痩せ型で身長はオレより少し高い程度。褐色の肌、刈り上げられた黒髪に黒い瞳。幾分、額に皺があるが、それがかえって強そうなオヤジの雰囲気をもし出している。

戦士の様な服に胸当てといった服装で、肩にでかい大剣をかついでいる。

その頭目らしき男は、オレの前に進み出ると。

「いつかはこんな日が来ると思っていたが、こんなに早くやってくるとはな。お前ら、何処の手のモンだ？」

「エルフ町から派遣された討伐隊だ」

オレは質問に答える。

「ほほう、そうか。しかし、俺達は『ハイそうですか』ってやられるワケにもいかんのでな」

頭目は背中にかついだ大剣を正面に構えた。

反射的に、オレも筋肉が痙攣している右手でルミニオンの剣を構えた。

後ろの5人も、剣、弓、石ころを構える。

「手を出すな」

オレはそれを手をかざして制する。

「しかし、ガンキチ、お前怪我が……」

「なんとかなる」

小手の隙間から血が滴る左腕を見て慌てるアルステールを、オレはなだめるように口の端を持ち上げて答える。
言っておくが、さっきの言葉に根拠はない。

運を天に任せているだけだ。

「傷が開いてるわよ」

白い手がオレの腕を掴んだ。

シエルフィスだ。

どうやら傷が開いた事がバレたらしい。

アルステールにもバレたんだから、当たり前か。

「だから、なんとかなるって」

オレはその手をやりわりと離させると、剣を構えなおし、頭目に
向き直る。

「死ぬ気なの？」

「オレは死なない。っていうか、多分ここじゃ死なない」

「そんな意味の分らないこと言ってもダメよ」

「いいから。どうせ全員でかかれば、向こうも全員でかかってくる。
そうなりや負けは確定だ。全員捕らえられて牢屋に放り込まれる。」

1対1で勝負がつけられるんなら、そっちの方が好都合ってのはお
前もわかるだろ」

「あんた左腕が使えないのよ！？ 勝てるわけないじゃないの！」

「わわっ！ バカ！ 聞こえるだろ！」

と、オレは慌ててシエルフィスの口をふさぐが、時すでに遅く。

「へへえ。お前、ケガしてんのか。左腕か。そうかそうか」

頭目は何を思ったか、大剣を右手1本で持った。

「何のつもりだ」

「お前が右手1本で頑張ってるのに、俺が両手を使ったらフェアじ
やねえだろうが」

「ふーん。でも、重そうだな」

「ハンデだ。ケガ人相手に本気だせるか」

「後悔するぞ」

オレは切っ先を少し動かした。

「そりやどっちな」

頭目も同じように切っ先を動かした。

オレと頭目は互いに睨み合ったままぴたりと動きを止めた。

剣が息遣いでかすかに揺れる。

一陣の風が吹いた。

辺りの木々がザアツと波に似た音でざわめく。

木の葉がオレと頭目の間にヒラヒラと舞って落ちる。

「ふんっ！！」

頭目が斬りかかってくる。

デカくて重そうな大剣を右手一本で持っているにもかかわらず素早い。

オレは疲労の激しい脚を引きずるようにして辛うじて避ける。

「くっ！」

モーションが大きいから何とか軌道を読めたが、攻められっぱなしではいつか直撃することは間違いない。

頭目から発せられるプレッシャーで、やたらと早く息が切れる。

でかいものを振り回す奴は決まってスタミナがあるのだろうか、

頭目は次々と斬り込んでくる。

疲労で身体がスローになったおかげで、一瞬避けるのが遅れた。

オレの剣に頭目の大剣が力チ当たる。

肘の筋を机の角に打った時のような痺れが右手に走り、剣は右手を離れ地面へ叩き付けられた。

や、やばい。

「もらったぞ」

ニヤリとほくそ笑む頭目の顔が一瞬見えたかと思うと、大剣が振り下ろされる。

オレは身体を捻って辛うじて避ける。

無理な方向へ関節の稼働限界ギリギリに捻ったからか、妙な音が鳴り痛みが走ったが今はそれどころじゃない。

目標を見失った大剣は地面にめり込んだ。

頭目は大剣を再度振り上げようとするが、深々と地面に突き刺さった大剣を右手一本で抜くというのは、頭目の力をもってしてもな

かなか難しい作業のようだ。

オレはその隙を見逃さなかった。

落とした剣を素早く右手で拾い、残り少ない握力で前へ突き出した。

「だあああつ！！」

「ぬううつ！！」

オレが斬りかかるのと、大剣が地面から抜けて再び振り上げられるのはほぼ同時だった。

再び振り下ろされる大剣。

当たれば命がない。

縦一直線へ振り下ろされる大剣を、苦し紛れに剣で横へなぎ払った時、奇跡的にもそれは当たり、軌道を大きくそれで、大剣はオレの右足に峰打ちを食らわした。

こいつ……、最初から斬るつもりはなかったのか。

そうじゃなければ今頃オレの右足はチョンパだ。

その右足から嫌な音は鳴り響いたが……、頭目に隙が生まれた。

これが最後の攻撃チャンスだろう。

残った握力の全てを使い、剣を前へ突き出した。

そして、頭目の喉元でピタリと止める。

いや、そこで握力が尽きたと言った方が正しい。

「……」

頭目の表情が一瞬にして変わった。

負けを認めたのだ。

オレはそう感じた瞬間、剣を落とした。

「……ど、どうだ、まいったか」

オレはついに体力が底を突いて地面へ大の字になって倒れた。これじゃどっちが負けたのかわからん。

頭目もその場で座った。

「運がいい野郎だ……」

不精髭の口許に笑みを浮かべながら、悔しそうに呟いた。

後ろで見守っていた5人がオレに駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか！？　こんな無茶をして……」

「よく勝ったもんだ。大した奴だぜ」

ルミニオンがオレを立ち上げらせようとする。

「いててっ！」

身体の至る所に激痛が走り、オレは思わず座り込んだ。

シエルフィスが素早く診断する。

あちこちを手で触れた後、呟く。

「自力で歩くのは無理ね」

頭目が立ち上がりオレに近寄ってくる。

アルステールがサツと身構えた。

「何もやりやしねえよ」

アルステールに一瞥くれると、頭目は鞘に納めた大剣を手下のひとりへ放り投げて渡した。

そしておもむろにオレを肩に担ぐ。

「いでででっ！！」

身体が軋み、痛みが走る。

「おい！　どうするつもりだ！」

「ついてこい」

アルステールの言葉に答えるかのように、頭目は後ろを向いたまま呟いた。

オレは頭目の肩に担がれたまま、山賊の根城のような建物に連れていかれた。

そこはあまり広くなかったが、生活に必要な物はおおむね揃っているようだった。

そして、医療器具も。

「あんまり綺麗なところじゃねえが、取り敢えず治療は出来る」

頭目は無表情で呟いた。

山賊の手下が見かけに似合わずベッドを綺麗にメイキングして出

ていった。

そのメイキング仕立てのベッドにオレは放り投げられる。

「あだだだだっ！！」

その僅かな衝撃でも、オレの身体に激痛が走った。

「ちよっと！ 怪我人はもう少し大事に扱ってよ！」

シエルフィスの文句を聞き流して、頭目は出ていく。

「ある程度怪我が治ったら、風呂にでも入っていけや。ここの温泉は怪我によく効くぞ」

頭目はそれだけ呟くとドアを閉めた。

しばらくして、オレの治療が終わった。

治療の最中、シエルフィスの長い耳をどさくさに紛れて触ったが、それがどうしたと流し目をしてくる余裕たっぷりの表情。

「絶対おかしいです」

アルステールはまだ警戒しているのか、鎧を脱がずにいる。

「そうだな、何もしないとは言っていたが、山賊の言うことだし」

ルミニオンが、片手に弓を持ったまま答える。

「でも、私はそんなに悪そうな人には見えませんでしたわ」

レムリアが呟いた。

「姫様、人を見かけで判断するのはよくありません。ひよっとすると、我々を人質に取ったのかも知れませんよ」

真剣な表情で語るアルステールに、レムリアは少しタジタジする。

と、

アルステールの青いショートヘアに大きな手が置かれる。

「男勝りな嬢ちゃん、あまり人を疑うと、いつか後悔する時が来るぜ」

頭目だ。

「うわわわわっ」

頭を撫でられてびびったのかアルステールは顔色が変わる。

そして、何故か怪我人のオレにしがみつく。

「あだだだだっ！」

「あっ、す、すまん」

慌てて離れる。

「ダメだよ、ガンキチお兄ちゃんは怪我してるんだから」

と、言いつつ。オレの顔を抱きしめるリティア。

発展途上の胸がオレの顔に……。

言っておくが、オレはロリコンではないぞ。

「両手に花とはこの事だなあお前。ところで、その身体じゃあこの山を下りることは無理だよな？」

口許をニヤつかせながら、頭目は言った。

サツとその場の雰囲気が一転する。

「き、貴様！ やっぱりボクたちを人質に……」

アルステールは必死に恐怖と戦いながら頭目を睨み付ける。

その青いショートヘアにまたしても大きな手が置かれる。

「話は最後まで聞け。その身体じゃあ、山を下りるのは無理だな、だったら、治るまでここに居ろって言おうとしたんだよ」

アルステールは頭をなでなでされながら呆気に取られた顔をする。

「別にお前らを取って食おうとか、人質に取ってどうこうしようとか考えてねえ」

頭目はアルステールの頭から手を離すと。

「ま、話はそれだけだ」

一言告げ、部屋を出ていった。

一同は、ポカンと口を開けて呆然としていた。オレは身体の痛みでそれどころではなかったが。

山賊の根城に泊まって4日目。

オレの怪我は、脚の骨折以外だいぶマシになってきた。さすがはシエルフィスの作った薬。

シエルフィスは、ここで湧いている温泉の成分を調べてみたところ、何とかかんとかという成分が入っていて、新陳代謝が活発になつてとても治療に良いらしい。

と、言うわけでオレはその温泉に入ることになった。

ギブスを4日ぶりに外し脚を地面につけると、当たり前だがまだ痛かった。

「あまり動かさないようにね」

と、シエルフィスに釘を刺され、結局ルミニオンから入浴を手伝ってもらった。

ついでにルミニオンも風呂に入っている。

この露天風呂は結構広い。

オレの部屋の4倍はあるか？ まあ、こんだけ山賊の人数が多ければ当然と言えば当然だが。

ふむ。この温泉は何か妙にポカポカと身体が熱くなるな。そんなに熱い湯でもないのに。

脚の痛みが何となく薄れてきたような気がするでもない。

そんな事を考えていると……。

「ふーっ。なかなかいい湯だ。おーい、リティア！ お前も入ってこいよ！」

ルミニオンが冗談めいた事を言う。

はは……。何言ってたんだか……。

「うん！ 今入るよーっ」

がぼっ！

全く予想外の返事にオレは思わず湯の中に沈み込んだ。

「ぶはっ！　ちょっ！　ルミニオン何を……」

がらっ！

脱衣所と露天風呂を繋ぐ木の引き戸が、元気良く開けられる。

湯煙の向こうがわ……と、思ったが、ハッキリ言ってマンガのよ
うな濃い湯煙なんぞ存在しない。オレの目に幼児体型+αな裸体が
いきなり飛び込んできた。

い、いくらまだ成長しきってないとはいえ、タオルぐらい巻いと
け！

ってそういう問題ではない。

そこにあるはずのものが無い違和感。

……。

……。

……。

オレのバカバカバカ！！

何処を見てるんだ！

「何やってるんだ？　お前？」

ルミニオンは不思議そうな表情で、自分の頭をポカスカ叩くオレ
を見る。

「……いや、その……」

オレの反応を見て、ルミニオンはニヤーっと意地悪そうな笑みを
浮かべる。

「そうか、お前はエルフ族ではなかったな。まあ、エルフ族は基本
的に男女に分けて入浴するという習慣がない。風呂に入るときは、

いつもみんな一緒だ。水も節約できて一石二鳥だな」

「ばしっとオレの背中をルミニオンが平手で叩く。

「見てみるガンキチ。俺の妹の成長ぶりを。後30年も経てば、立派なオンナになるぞ」

「30年なんて、オレはもう立派なオッサンになってるじゃないか……ぶくぶく」

顔を半分湯に沈めながら呟くオレ。

もちろん、頭と別の所に血が集中して出るに出られない状況だ。だって、普通はそうだろう？　しかしオレはロリコンではないぞ。

がららっ

今度は少しおとなしめに開く木の引き戸。

「どわっ！」

大きめな胸、細い腰、せくしいなヒップ。

き、金色……！

何が金色かというと、髪の毛が金色なのは知っているが、髪の毛みたいで髪の毛ではなく、限りなくそれに近いものなんだが――。

それはシエルフィスだった。

た、タオルくらい巻け！

シエルフィスは手拭いを一枚手に持っているだけで、身体には何も巻いていない。

エルフ族はタオルを身体に巻くのが嫌いなのか？

「あら、ガンキチちゃん。奇遇ね」

オレの目の前に立って、わざとらしく言う。

ルミニオンはそのダイナマイツなボディを目の当たりにして、ひゅーっと口笛を吹いている。

「ああ、やめとけ。こいつはエルフ流の風呂に免疫が無いらしい」
ルミニオンが助け船を入れるが、逆にシエルフィスはニヤリと悪ガキのような笑みを浮かべる。

「あら、そうなの？ ウブねえ」

完全なるいじめモードだ。それを証拠に顔はいじめっ子になっている。

シエルフィスはわざとらしくオレの隣に腰を下ろす。

「どうしたの？ ガンキチちゃん、お顔が真っ赤」

当たり前だ。女のハダカを生で見たことなんぞ母親以外ない。

「あ、あんまり、近寄らないでくれ」

オレはシエルフィスの身体を見ないよう顔を背け、爪先でチョコチョコと遠ざかる。

「むっ。私の身体見たくないの？」

シエルフィス、カチンときた顔をしてオレをチョコチョコと追いかけてくる。

「み、見たいけど、見たくない」

オレはまたチョコチョコと逃げる。

「意味わかんないわよ！」

シエルフィス、更にチョコチョコと追いかけてくる。

「なあ、オレは怪我人じゃなかったっけ？ 脚折ってなかったっけ！？」

「そんなの私の薬を使えば5日で治るわよ！ 何で逃げるのよ！」

——脱衣所の前。

アルステールとレミユリアが、引き戸の前に耳をすませて立っている。

「ガンキチの声とシエルフィスさんの声……」

アルステールの額にびきびきと血管が浮き上がる。

「た、大変ですわ……。このままではガンキチさんが……」

『ぎゃーっ！ なな、何をするんだ！』

『触診よ触診！ 治り具合を見てあげる』

『そんな風呂から出た後でもいいだろうが！』

オレの悲鳴がアルステールの耳に届いた。
更にアルステールの額に血管が浮き上がる。

「……」

「あ、アルステール？」

恐る恐るアルステールの顔を覗き込む。

その顔はまさに修羅だった。

そして、何を思ったかいきなりツカツカと脱衣所に入り、服を脱ぎはじめる。

身体をバスタオルでグルグル巻きにして、脱衣所と露天風呂を繋ぐ戸をガラガラと勢いよく開け、更にツカツカと入っていく。
レミュリアはその間、呆氣に取られて動けなかった。

「おわわわっ！！ アルステール！！」

オレは心臓が飛んで行きそうなくらいビビった。

だって、あのアルステールが入って来たんだぜ？ タオル巻いてるけど、

ジロツとシエルフィスを一瞥すると、オレの隣にガボツと入ってきた。

オレはシエルフィスとアルステールに挟まれるような形になった。
あからさまにシエルフィスはたじろいでいる。

そりゃあそうだろう。相当に殺氣がこもってるのがよく分かる。
オレのどこまでビリビリと伝わってくるほどなんだから。

「ちょ、ちょっと。アルステールさん？ ほ、ほんのおふざけよ。
あははは……。そ、それじゃ私は上がるわ」

さっきまで身体を見せびらかせていたシエルフィスが、ウソのよう
に身体を隠しながらそそくさと出ていく。

ルミニオン、リティアまで、

「そ、それじゃあ、俺たちも出るか！ ほら、リティア、出るぞ」

「ええ〜っ、あたしもう少しガンキチお兄ちゃんが入っていたいのに〜」

「わがまま言っちゃダメだ。ほら、な？」

最後の部分は小声で、リティアにささやく。

リティアはアルステールを見て。

「……わ」

アルステールはリティアを見ていないが、全身から発される殺気が、リティアに恐怖を与えるようなメンチを切っている。

「お、お兄ちゃん。上がるっ」

こくこくと頷くリティア。

「よ、よし。……ああ〜、いい湯だったな〜」

実にわざとらしい。

「何か、入ってすぐに出た気がするけど」

ボソツと呟くリティア。

「こらっ、聞こえちまうぞっ」

悪いが、全部聞こえている。

三人が出ていった後、一人取り残されたオレ。

アルステールが殺気のこもった横目でオレを見ている。

オレは何もしていない。何もしていないのに。何故そんな人を殺しそうな眼でオレを睨むんだ。

出るに出られない。というより動けない。このままでは茹で蛸になっってしまうじゃないか。

そして、夜。

やつのこと、底無し沼と化した露天風呂から抜け出したオレ。もちろんのぼせた。

アルステールも、のぼせただろうと思ったが女というのは風呂に強いのだろうか？ 全くのぼせた素振りすらなかった。

シエルフィスからギブスを着けなおしてもらい、部屋に寝っころがっていると、コンコンとノックする音が聞こえてきた。

オレはドアを開ける。

そこには、山賊の手下が居た。

「何だ？ 何か用か？」

「お頭が話をしたいと……」

「話？ リンチか？」

「そ、そんな。滅相もない。とにかく、話がしたいそうです」

「わかった」

オレは山賊の手下の肩を借りながら、頭目の所へ向かった。

たまたま、その光景を目撃してしまったレミュリアがサツと物陰に隠れた事には、全く気づかなかったが。

「来たか」

頭目は居た。

ソファアーに座って、酒を飲んでいる。

また、酒か。

絶対飲まねえぞ。

オレを向かいのソファアーに座らせると、手下はそそくさと出ていった。

「何だ、話つて」

オレは率直に聞き出す。

「自己紹介をしていないと思ってな」

オレはガクツとくる。

「そ、それだけでオレを呼んだのか」

「まだ、他にある。んで、俺の名はガザロだ」

「なかなかごつい名前だな」

「ほっとけ。それで、お前の名は？」

オレはその時、レミュリアやアルステール、シエルフィスやルミニオン、リティアの反応しか記憶になく、サラツと名乗ってしまった。

「頑吉だ」

「……」

急に無言になってオレを見つめるガザロ。

かと思つたら、いきなり下を向いて肩を微かに震わせ、くくくく……と笑う。

オレのこめかみに血管が浮き上がる。

「……」

言わなければよかった。

しかし、今更遅い。

「だーっはっはっはっ！！」

豪快に笑い転げるガザロ。

「この野郎！！ ヒトがせっかく名乗ってやったというのに！！」

「わはははっ！！ す、すまん！ ひっひっひっひーっ！！」

オレは必死に怒りを堪え、ガザロが落ちつくまで待った。

「それで、話の続きは？」

オレはなるべく冷静を装って呟いた。

「ああ、その事だが。俺達がああ町を襲う理由を話しておきたくて

な」

「ふむ。その理由とは？」

「俺には、一人の娘が居るんだ。まだ、幼くてな」

「まさか、その一人娘の為に町を襲っていたなんて事は言わないよな？」

「違う。この砦に居る奴らは可哀相な奴らでな。皆、何らかのいざこざで村や町を追い出された奴らなんだ。それで、金もない家もない。このままでは生活もままならない状態だった。それで……」

「町を襲った。というわけか」

「その通りだ。悪いとは思っている。しかし、これも生活の為だ。それに、盗みはするが人殺しはしない」

「そうか、だから町のエルフには死人が出なかったんだな？」

「そうだ。お前とやり合った手下はまだ不器用で寸止めを失敗して怪我をさせてしまったが」

俺の左腕を指さす。

「だが、お前の手下で、オレの仲間の一人が犯されそうになったぞ。俺はリティアの事を言ってみた。」

「そいつは、俺の考えに付いていけず。ここから出ていった奴だ。でも、そんな事があったとは。それは、謝る。すまん」

意外にあっさりと謝るガザロ。

「ま、まあ。それは本人に言ってくれ。それに、犯される前にオレが天誅を食らわしたからな」

それから、オレは色々とガザロの話を聞いた。

話の節々に『ユースという悪王』というフレーズが何回も出てきた。

手下の中には村を焼き払われて命からがら逃げてきた奴も居るらしい。

あの町でも、ユースの圧政の影響が出ているらしく、この頃、金品が少なくなってきたらしい。

「それならガザロ、オレ達の反乱軍に入らないか？」

「反乱軍？」

「ああ、聞こえは悪いが、悪王ユーネスに天誅を食らわす為に結成した軍だ。まだ、規模は小さいがな」

小さいどころかまだ兵もないが、嘘も方便というやつだ。

「そこに入れば、俺たちの生活を何とかしてくれるのか？」

「……」

オレは一瞬言葉に詰まった。

う……。そこまで考えていなかった。

「貴方たちの生活なら、私が何とかします。その代わり、私の兄、ユーネスを倒した後。ですが……」

レミュリアがいつの間にかそこに立っていた。

「何だ、レミュリアちゃん聞いてたのか」

「はい。ガンキチさんがこの部屋に連れてこられるのを見て、心配になって……」

その後ろにはアルステール、ルミノオン、シエルフィスまで居る。

「その話は本当か？」

ガザロは立ち上がってレミュリアの手を優しく握る。

「はい。私達に協力してくれるのなら……」

「おおおおっ！！」

狂喜するガザロ。

「その代わり、ひとつ約束してください。もう、盗みはしないと」

「ああ、約束だ！ もう、絶対にしねえよ！」

ガザロはコクコクと上下に首を振る。

につこりと笑うレミュリア。

その夜は突然、宴会になった。

ラミルというガザ口の娘も、顔を出した。
ハッキリ言つて、全然親に似ていない。
トンビがタカを産むとはこの事か。

オレはまた、酒を飲んでしまった。

次から次へとグラスを満たす酒から逃げるように外へ出て、気が
つくとも草むらの上に寝っころがっていた。

そこで、ふと誰かが声を掛けてくる。

「大丈夫か？ ガンキチ」

ルミニオンだ。しかし、オレは意識がもうろうとしていて、誰か
よく分からなかった。

「ふひゃひゃ……。アルステールか？」

「そんなに会いたいなら呼んできてやろうか？」

「なあんだ。ルミニオンかあ」

「しょうがない奴だな、全く」

「なんだよ。シエルフィスのトコに行かないのかあ？」

「ばーか。そんなんじゃないよ」

「それじゃ、何で、オレのトコに来てんだあ、そんな趣味はねえぞ
お」

「違うよ。お前に礼を言いたくてな。これで、胸を張って町長に報
告できる」

「ははは。照れるじゃねえか」

「これで、自警団の奴らを連れていけるし、反乱軍にも入れる……」
ルミニオンは右手を差し出した。

オレはもうろうとした意識の中、その手をガシッと掴んだ。

「これから、よろしくな」

2日後、脚も治ったオレはガザ口とその手下達をぞろぞろと引き
連れて、エルフの町へ向かった。

町に入る前にルミニオンが町長に事情を説明し、次に町長が町人

を集め、もうこの山賊達は危害を加えないと説明した。

その中、ガザロは山賊を代表して皆に謝罪をしていた。

そして、ルミニオンの自警団をプラスしたオレ達の反乱軍は更に規模が大きくなった。

その日の夜の作戦会議――。

「そろそろ、拠点欲しくなったな」

オレはエルフの町を占拠しているような状態の自軍を見て、ふと呟いた。

「しかし、今の私達には拠点を作るような資金はありませんわ」
レムユリアが言う。

確かにその通りだ。

「作れねえんなら盗めばいいじゃねえか」

唐突に、ガザロが言った。

思いのほか、その言葉にみな黙り込んだ。

「それは……。いけるな」

今の反乱軍は約1500。

まだまだとても大軍とは言えないが、小規模の部隊となら戦えないこともない。

「アネさん。ここから近いユース軍の砦はないか？」

オレはシエルフィスに訊いてみる。

「もう、アネさんはよしてって言うてるでしょ。…………ええと、うん、あるわ。ここから約360ヶザルくらいかしら。アテラタス砦ね」

「アテラタス砦…………。その360ヶザルつてのはここから何日くらいかかるんだ？」

「早く着いて1日……。遅くて2日くらいかしら」

「往復で約4日か……。よし。んじゃ、その兵力を調べてみるか」
まずは兵力を調べないとな。

相手の人数も知らずに戦うというのは、兵にも不安感を与え、士

気に影響する。

そこで、ガザロが言った。

「おう、調査なら俺に任せな」

翌朝、ガザロは数人の手下と共に、馬に乗ってアテラタス砦へ調査に出発した。

こういうとき、携帯電話があると便利なんだがな……。

昼。

急に、ヒマになった。

ガザロたちが帰ってくるまで、一体何をすればいいのか？
オレはルミニオンの家の借り部屋でボーッとしていると、

「ガンキチさん。居ますか？」

この声はレムリアだ。

「何だ、開いてるよ」

レムリアは少しドアを開け、顔だけ出して。

「少し、付き合っただけなんです」

「何だ何だ？ レムリアちゃん買い物でもするのか？」

「取り敢えず、出てきてください」

レムリアはニコニコしながら手招きする。

オレは素直に出てみると、そこには……。

エルフの服なのか？ 妙に可愛い服を着たアルステールが立っていた。シエルフィスのような短いスカートではなく長袖ワンピースのロングスカートに青いマフラー、ふわふわの赤い手袋を身につけている。

所々、オレが着ているエルフの服に似ている箇所がある。

しかし、

……。

か、かわいいかも。

こんなことを思うのは普段は鎧とか、鎧の下に着る黒い服くらいしか見ないからなのかもしれない。そうに決まっている。

「ふふふ……。ね？ アルステール、ガンキチさんは気に入ってくれるって言ったでしょ？」

嬉しそうに言うレミュリアにアルステールは、

「ひ、姫様！ そ、その、ボクは……」

「わかってますわ。『気分転換に着てみようかと思ったただけ』ですよ？」

そして、レミュリアはオレに向き直り、

「それで、ガンキチさん。今日はお時間ありますよね？」

「……そ、そりゃ、ヒマだけど……」

レミュリアの顔がぱあつと明るくなる。

「良かった！ それじゃアルステール、今日はガンキチさんとデートね」

『ええっ！』

オレとアルステールは同時に言った。

「まあ、息もピッタリ。それでは、ガンキチさん。アルステールをしっかりとエスコートしてくださいね」

ササッとレミュリアは素早く去っていく。

ふたり残されたオレ達。

「……えーっと」

アルステールはジッとオレを見る。

あからさまに困惑している顔だ。

オレがチラ見すると、慌てて視線を外す。

「ど、何処か行くか」

「う、うん」

と、オレはアルステールを連れて外に出ようとする、いきなり、ルミニオンが現れる。

「コラ、ガンキチ。その服でデートに行くのか？」

まるで、誰かに仕込まれたようなタイミングのよさ。

オレの服を指さす。

山賊やら、ガザロとの対決やらでシエルフィスから買ってもらったバーゲン品のエルフの服はボロボロになっていた。

「う……、むう、それもそうだな」

オレは頷くしかなかった。

ルミニオンはオレの腕をグイッと引つ張り、自分の部屋に連れていき、タンスから服を引つ張りだして、オレに着せる。

「ほう、多少サイズが大きいけど、似合わないこともないな。よし、これで行け」

バババツとオレを着替えさせると、オレは部屋から放り出される。そして、

「新しい靴を玄関に置いてあるから、それを履いていけ。頑張れよ」と、親指を立ててパターンとドアを閉めた。

「……」

再び合流したアルステールと一緒に玄関に行くと、シエルフィスから買ってもらったバーゲン品の靴とは比べ物にならないほど頑丈そうで、エルフ的に格好の良さそうな真新しい靴が置いてあった。

あからさまに誰かが企てたシナリオだ。

見当が付きそうな者が何名か思い浮かんだが、今は考えないことにする。

外に出てみた方がいいが、何処に行けばいいかわからない。

困ったぞ。

しかも、アルステールを見ると、ガラにもなくドキドキしてしまっただけ。

「ん、と、お前、何処に行きたいトコはあるか？」

アルステールは少しうつむき加減に、
「ガンキチが行きたいところでもいいよ」

と呟き、赤くなつて視線をそらす。

なんだこの反応は。

こんな反応をしてくれると、どんな返答をすればいいかわからなくなってしまうではないか。

しかもオレの行きたいところって言われても、ここはオレの地元じゃないし。

「ん？」

何気なくオレはズボンのポケットに手をつ突っ込むと、何か紙切れのような物が入っていることに気付いた。

オレはそれを引っ張り出して見てみる。

その紙にはこの町の簡単な地図が記されており、ご丁寧に赤いインクで道順を辿ってくれていて、ある場所を丸く囲んで、そこで終わっている。

なんて手の込んだ事を……。

しかし、今の行くところが全くわからないオレにとって、この地図は神の助けだ。

その神とは誰という疑問は、今は振り払っておく。

道順を辿って行くと、アルステールが突然足を止めた。

「ん？ 何だ？ どうしたんだ？」

オレの言葉にも反応せず、アルステールはある所に視線を集中させている。

眼をららんと輝かせて。

その方向を見てみると、

何か、よく分からん文字で書かれた看板。

しかし、売ってる物を見て即理解した。

細い刀身の剣。弓。ナイフ。

エルフらしい武器の数々が並んでいる。

つまり、武器屋。

素晴らしいスピードでアルステールは店に入ると、らんらんとした眼で武器を手にとって見はじめた。

こいつ、まさか武器フェチだったのか。

「ガンキチ、ほら、これ、見てよ。すごいよこれ♪」

さっきまで恥ずかしいのか、気まずいのか、無口だったアルステールがウソのように嬉しそうに喋りだした。

それはそうと、見せられた剣は確かに凄い。

艶やかな刀身。手にフィットしそうな柄。

白い隼を描いた鍰。

……結構見る目があるぞ。

そこで、オレも数々のRPGからの知識を掘り返して、負けじと色々武器を探してみる。

一本のナイフを見つけた。

金色の柄、固くて握りにくそうかと思いきや、意外に柔らかく手にフィットする。

そして鏡のような刀身。

それはルミニオンの剣のミニサイズバージョンといった感じだ。

オレはそれをアルステールに見せる。

「おい、これも結構すごいぞ」

すると、予想以上の反応が返ってきた。

「わあっ　すごい！」

オレの手に持っているナイフを持ってみようとして、アルステールの指がオレの手に触れる。

その瞬間、ビクツとしてオレの顔を恐る恐る見る。かあつと真っ赤になる。

「あ、す、すまん」

パツと手を引っ込める。

……。

まずい。今の顔、心臓の運動を早くしやがった。

オレはアルステールの手にナイフを乗せてやる。

照れながらそれを受け取ると、アルステールはまたらんと眼を輝かせ、それを鑑賞する。

そんなアルステールを見ていると。

……買ってやりてえな……。

という思いがいきなり頭をよぎった。

だが、金はシェルフイスから貰ったほんの僅かな小遣いしか持っていない。

上着のポケットからその僅かな小遣いを出そうと手をつ込むと、
「ん？」

金貨とは別に、また紙のような物が指先に触れた。

取り出してみるとそれは、どうやら紙幣のようだった。

ルミニオン……何て気が利く奴なんだお前は。

オレはそのナイフに付いている値札らしき紙に書いてある数字と、紙幣の数字を比べてみる。数字だけは勉強したぞ。字はダメだが。

ナイフが6500、紙幣が10000。

余裕で足りるではないか。

オレはすぐにそのナイフをアルステールの手から取ると、

「あつ……」

アルステールは名残惜しそうな顔をする。
が、

「買ってやるよ」

オレは照れまじりに言う。

「えっ！？ いいのか!？」

潤んだ瞳で顔を輝かせた。

……。

ま、まずい。更に心臓の運動が早くなった。

「あ、ああ」

真っ赤になりつつある顔を見られないよう、オレはカウンターに

そのナイフを持っていった。

「6500サフィルになります……」

と、言いながら店の男主人はジロジロとオレとアルステールを見る。

「彼女にプレゼントですか？ いいですねえ。いいもの選びましたねえ。これは結構人気なんですよ。愛する人の護身用にとプレゼントに買って行かれる方が多くて……。それと、お似合いですよ二人とも」

オレとアルステールは瞬時に真っ赤になった。
恥ずかしさに耐えきれず、俯くアルステール。

「あ、あのなあ」

オレはうるたえつつ紙幣を男主人に渡す。

「いいえ。言わなくても分かりますよ。お幸せにね」
釣りの3500サフィルの紙幣と金貨を受け取った。

オレ達は店を出た。

男主人から言われた言葉がオレの頭の中にいつまでも残っていて、何だか気まずい。

それはアルステールも同じようで、さっきから隣で黙ったままだ。

ふと、オレは手に持っている、あの男主人が顔に似合わず綺麗に包装してリボンまで付けたナイフを思い出した。

「そ、そうだ……これ……。ほ、ほら」

アルステールの手に握らせる。

「……そ、その。あ、ありがとう……」

真っ赤になって、精一杯の声でアルステールは言った。

その頃。

木の影から覗いているシェルフイス、レミユリア、ルミニオン。

「むきーっ！ 何て焦れつたいヤツなの、ガンキチちゃんは！ そこで手を握るなりしたらどうなの！」

齒がゆそうに手をわきわきさせるシエルフィス。

「二人とも、奥手ですね。やっぱり」

苦笑いのレミュリア。

「ああいう奴つてのは、いざ結ばれると激しいんだよね……」

ニヤニヤするルミニオン。

「何がですか？」

「ウブね……、姫様も」

はあ……。と、聞こえてきそうな表情で頭を抱えるシエルフィス。

「全く、こっちが必死に考えたシナリオなんだから、もう少し役に立ててよね……」

腰の道具袋の中に、オレのプレゼントを入れたアルステールは、妙にモジモジしながらオレの横を歩いている。

思い立ったように顔を上げると、

「ええと……。その、ガンキチ。手を、その、握っても……いいかな？」

アルステールが、

あのアルステールが、

いや、今のはオレの空耳だろう。

アルステールはそんなコトを言う奴ではない。

「ダメ……だよね。やっぱり」

急に沈んだ表情になる。

おい、まさか本当に言ってるのかこれは。

気がつくとおレはアルステールの柔らかな手を握っていた。

「あ……」

赤くなるアルステール。

もちろん、オレの顔も熱を持ち始める。
ちくしょう、落ち着きやがれ。オレの心臓。

「ん……と、その、何でだ？」

「えっ、何が？」

真っ赤になりながらも、アルステールは顔を上げる。

「いきなり、手を握っていいかなんて」

「その……。イヤ、なのか？」

「そ、そんなわけではない」

「それじゃ、いいじゃないか。別に……」

握っている手が汗ばむ。

オレの汗ではない。

アルステールの汗だ。そうに決まっている。

「おおっ！ 手を握りおったぞ！」

ルミニオンがニヤニヤしながら言った。

「あの奥手なアルステールが……。積極的ですわ」

レミュリアはその光景を見て驚いている。

実際の所、レミュリアはアルステールの浮いた話を一度も聞いたことがない。

「やっと進展したわね……。少しだけど」

やれやれと頑吉達を見つめるシエルフィス。

「私は嬉しいですわ。あのアルステールが……」

ハンカチで目元を拭うレミュリア。

アルステールと手を握って歩く。

たったこれだけのことなのに、さっきまでスローだった時間が、
妙に早く過ぎていく感じがする。

再び地図を辿って村を歩く。

丸で囲んだ終着点の所に着いた。

そこは……。

ルミニオンと一緒に酒を飲んだ店。

酔っぱらって途中から記憶が飛んでしまった店。

「昼間からお酒はまずいんじゃないの？」

シエルフィスが呟いた。

「いいんだよ。酒は飲まなくとも、あそこは普通にメシ屋なんだから。それに、酒に夜も昼間もない」

ルミニオンは自分で言ってるんうんと頷く。

「心配ですね。アルステールはお酒に弱いから……」

『なにっ!?!』

ルミニオン、シエルフィスは同時にレミュリアを見た。

「それと、弱いのに、お酒が好きなんです」

「それじゃ、酔うと性格が変わるとか？」

ルミニオンはニヤニヤする。

「そうですね……。多少……。いや、結構変わりますね」

「そういえば、お腹が空いたな……。ボク」

アルステールが細いお腹を押さえながら呟いた。

「お前、昼飯食ったのか？」

「実は……。まだ」

「……」

オレは考えた。

メシ屋なんぞ、この町ではここ以外知らない。かといって探していたら日が暮れそうだ。

……。

「へえ、結構メニューがいっぱいあるんだな……」

アルステールはよく分からない文字で書いているメニューを見て

言った。

……。

入ってしまった……。

この店に。

「ガンキチは何を頼む？」

オレにメニューを見せる。

「いや、オレはその文字、読めないから。お前、適当に頼んでくれ」

「……うん、わかった。……ええと、……。あつ。これ、この名物じゃないか」

しばらくメニューを眺めた後。

「すみませーん！ 注文したいんですけどー！」

ウェイトレスを呼び、注文を済ました。

妙な物が来ないよう祈りつつ、オレは料理を待った。

アルステールは『どんな料理か楽しみだな』みたいな顔をして待っている。

しばらくして、ウェイトレスが料理を持ってきた。

次々と並べられる料理。

その中に、ひとつ見たことのあるボトルが……。

「あれ？ これ、酒だ」

あっけらかんとアルステールが呟いた。

「さ、酒だな」

「ここの名物って書いてたから……」

紫色の液体。

ルミニオンと一緒に飲んだ酒。

あの、妙に甘い味で凄まじいアルコール度数の――。

「まあ、いいか」

良くない。

良くないぞ。

グラスにコポコポと紫色の液体を注ぐアルステール。

オレは絶対に飲まねえぞ。

「ガンキチも飲む？」

「い、いや、オレはいい。苦い経験もしたことだから」

「そうだな。またキスしてくるかも知れないし」

言って、あつと口を塞ぐアルステール。

途端に真っ赤になる。

まずは、ここの店のまともに食った事のない料理から手を付けてみる。鳥の唐揚げやソーセージ、キャベツのような葉っぱにくるまれたロールキャベツのようなものなど、肉料理ばかり目に付くが、アルステールは肉好きなのか、それともメニューには肉料理しか載ってなかったのか、とにかく胃がもたれそうだ。

食ってみるとうまい味だったが、野菜も食わないと病気になりそうだ。

オレが肉料理にちびちびパクついていると、例の紫色の酒、それを少し口に含むアルステール。

「あれ、この酒、甘くて飲みやすい」

そしてごくごく飲み始める。

ダメだ。それが、その甘さが罠なのに。

そんな一気に飲んだら……。

ダン！ と勢いよく置かれるグラス。

「……」

……め、目が座った。

酔ったアルステールの完成だった。

そんなオレを見て、

「なによ。にやんか文句あんの？」

おまけに弱いときたか！

「お、おい。酔ったのか？」

料理を食べ終わったオレは、アルステールに一応声を掛けてみる。

「酔ったわよ。ええ、酔いましたとも」

お、女言葉。

あの、アルステールが女言葉。

「なによ、わたしの顔に何か付いてんの？」

わたし！ ボクって言うていたアルステールがわたし！

「ガンキチ！ どうしてよ。どうして、もっと積極的になってく
ないのよ。酔ってる時はあんなに積極的だったのに」

いきなりオレにカラんできた。

そして、ふらつきながら立ち上がり、わざわざオレの隣に腰掛け
る。

「あんたが積極的になってくれないのなら、わたしが積極的になる
しかないじゃないの」

ぴたつと身体を密着させてくるアルステール。

普段のアルステールは絶対こんな事をしないぞ。

や、やばい、心臓が……。

「ねえ、聞いてんの？」

「あ、ああ、聞いている」

ジーツと見つめてくるアルステール。その焦点はあからさまに合
つていない。

アルコールで赤くなったのか、別の理由で赤くなったのか定か
ではないが、妙に艶っぽい顔だ。

「……」

いきなり、オレの胸に手を当ててくるアルステール。

「おわっ！」

「きやはははっ！ 何、心臓バクバク言わせてんのよ」

「い、いや、それはお前が……」

「何よ、わたしの心臓の音も聞きたいの？」

「だ、誰が、んな事言った」

オレの手を掴むアルステール。

そしてその手を自分の胸に当てた。

「!？」

柔らかな感触。

頭に血が上る感覚。

む、胸、オレ、アルステールの胸を触ってる！

しかし、伝わってきた鼓動はオレと同じテンポだった。

「あ、あれ？」

「きやはははっ！ わたしも、あんたと居るから心臓の音が早くな
っちゃってるみたい」

……。

何だよ。

結構、可愛い奴じゃねえか。

「ねえ……、ガンキチい……」

コツンと頭をオレの肩に乗せてくるアルステール。

「な、何だ？」

「……あんた、トシいくつ？」

「じゅ、１７だ」

「じゅうななあ？ わたしより年下じゃないの」

「そ、それじゃお前はいくつなんだよ？」

「ききたいの？」

「オレにトシを聞いておいて、お前は教えないってのか？」

「仕方ないなあ……。わたしのトシはねえ……。１８よ……。うふ
ふふっ。きやはははっ」

ひとつ上。

ほう、ひとつ上だったのか。

「に、しちやあ結構子供っぽいな。お前」

オレの一言に、アルステールは頬を膨らます。

また普段のアルステールらしからぬ行動を……。

「なによあ……。わたしがコドモだっていうの？」

「こ、子供じゃない。子供っぽいって言ったんだ」

「子供だっというのね？ わたしをコドモだっというのね？」

「ち、違う」

と、弁解するオレの声には聞く耳持たずにまた、オレの手を掴んで、

むにゅっ

「!？」

柔らかい感触。

アルステールの胸……。

また、触ってしまった。

「ほらあ。これでもコドモだっていうの？」

むにゅに

オレの手を上から押さえつけて上下に揺する。

あ、まずい、理性が……理性が……。

「こ、子供じゃないッ!! わかった! わかったから……」
パツと手を離す。

「やだあ……。ガンキチのえっち」

なんか、あんまり恥ずかしそうじゃないな。

「お前がやったんだ、お前が」

「そうよ。わたしがやったのよ。何か文句ある？」

おかしい……。

このアルステールは、アルステールじゃない。

ごくごくグラスに入っている紫色の液体を飲み干す。

「お、おい。そんなに飲んだら……」

慌てるオレを尻目に、ダンッ! と、グラスを置く。

「にゃによお……。ガンキチい……。心配ばかりしちゃってさあ……」

アルステールの目が更に座った。

「お、お前、ヤバイぞ。これ以上飲むな」

「飲むなって言うの？ わたしに飲むなって言うの？」

「いや、だから、お前の身体が心配なんだ、二日酔いになるぞ
この酒は思った以上に強いんだ。」

「それじゃ……。飲まないからキスして」

……。

な、何だと！？

アルステールが——キスして。だと！？

オレの空耳か！？

その前にここは店の中だぞ。

「どうするの、するの？ しないの？」

オレの肩に体重を掛けてくる。

アルコールで濃くなったピンク色の唇が、妙に艶かしい。

必死に欲望と戦っているオレに痺れを切らしたのか、アルステールは、

「いいわよ。してくれないのなら、飲むから」

ボトルとグラスを掴む。

「わわわわっ！ 飲むな！ 頼むから飲むな！」

慌ててその手を掴む。

「……それじゃあ、キスしてよ」

ん、と目を閉じてオレに唇を突き出すアルステール。

ど、どうしよう……。

こっいつ時に限って硬直する身体。

「……………」

目の前で目を閉じているアルステール。

固まったオレ。

……。

ど、どうすればいいんだ。

こんな、どさくさ紛れにしてもいいのか？ そりゃ、あの時、オレは酔ってて、アルステールにキスしてしまったようだ……。

シラフのオレに、そんな度胸は無い。

「なによ。一度、わたしにキスしたくせに、今更できないっていうの？」

目を閉じたままアルステールが言う。

……。

アルステールが嫌いなわけじゃない。

どちらかというと、妙に気になる……。

いつもオレの気付かない所で気をきかせてくれるアルステール。仮面を取った時から、妙に気になりだしたアルステール。

くっ、くそつ。覚悟を決める、オレ！

アルステールの肩を掴んだ。

震えながらも、唇を近付ける。

かくん。

？　なんか変な感触だな。

妙に固いぞ。

クチビルってこんな感触だったか？

「……？」

オレは片目を開けて見てみる。

キスしようとしたオレの唇は見事に空振りして、顎にキスしてしまっている。

それは何故か？

アルステールの首が人形のように力なく後ろへ傾いたからだ。

「！？」

オレは思わずその顔をみる。

「……くー……くー……」

寝てやがる。

さっきまで真剣に悩んだ苦労は、一体何だったのだ。

はあ……。

まあ、パターン通りだけだな……。

つぶれたアルステールを背負って、ルミニオンの家へ帰るオレ。
力の抜けた人間が、これほど重く感じるとは……。

やっこのこと、ルミニオンの家に辿り着いた。

「おっ！ 帰ってきたな」

リビングに入ると、ルミニオン、シェルフイス、レミュリアの三人が待ち構えていた。

「少しは進展した？」

「アルステールを大事にしてあげてくださいね」

口々に、デートの結果を聞きにくる。

もう、勘弁してください……。

次の日。

朝、オレは目が覚めた。

もうすぐ、小規模ながら戦闘が始まるかもしれないというのに、オレはグッスリと眠れた。

まあ、ハッキリ言って考えても仕方がない。

ゲームでも何でも、やってみなけりゃわからないしな。んな事を考えながら、廊下を歩いていると。

「……うつ」

フラフラしながらアルステールがこっちへ歩いてくる。妙に顔色が悪い。

「よ、よお。気分は大丈夫か？」

オレは何の気兼ねなしのフリをして声を掛けた。

「……あ、頭が痛い……」

ヨロヨロと廊下の壁にもたれ掛かる。

「おい、大丈夫か？」

アルステールの肩を抱いて支える。

普通なら、ここで顔を赤くするんだが——実際オレは赤くなっているけど——今のアルステールはそれどころではないようだ。

「……ガンキチ、ボクは昨日、何をしていたんだ？」

「……えーっと……。ま、まあ、人間、色々あるさ。気にするな」

オレは焦りを顔に出さないよう、なるべく冷静に、冷静に答えた。

「全く記憶が無いんだ……うつ。店に入るまでは覚えてるんだけど……」

再び頭を抱える。

「ね、寝とけ。お前は酒を飲みすぎたんだ」

「うつ……、思い出せない……」

うめくアルステールを部屋に連れて行って布団に寝かせた。

「ごめん……。ガンキチ……」

部屋を出ていく時、アルステールが呟いた。

……何か、妙に素直だな。

まだ、アルコールが抜けてないせいかな？

「き、気にするな。それより、またヒマができたらどこか行こうぜ」
何でオレはこんな事を言ってるんだ？

「うん……」

……。

うん？

うんだと？

オレの空耳かな？

とりあえずパターンとドアを閉める。

「ふう……」

オレは閉めたドアを背に、一息つく。

アルステールの奴、何か妙に人が変わったような……。オレの気のせいだろうか。そうだ気のせいだ。気のせいに決まっている。

そして、昼過ぎあたりにガザロが帰ってきた。

ガザロの諜報はこんな感じだった。

気の弱そうな兵を一人物陰に連れ込んで、尋問したところ、アテラタス砦は今、徴兵中の為、兵の数が若干減っているそうだ。

その数、約2200らしい。

2200……。まさにRPGの鉄則、序盤の敵は弱い。だな。

それにしても、ガザロの尋問とは、一体どんな酷いことをしたのだろうか。その兵士、かなり気の毒だ。

オレはその日の作戦会議でアテラタス砦攻略を決定した。

翌朝、全軍が町の広場に集まった。

早朝に出発すれば、夜にはアテラタス砦に到着する。つまり、夜襲ができるというわけだ。

これはオレが提案した。

そして、今、士気を高めるためレミュリアの演説が行われる。

全く緊張している様子はないレミュリア。

急遽作った仮ステージの上に立つ。

静まり返る広場。

「私達は、クリスエルム王国軍討伐の第一歩を踏み出したのです。しかし、相手は強い。油断はできません。みんな、気をつけて。そして、必ず生きて帰って来てください！」

『わあーーーーっ!!』

レミュリアの演説が終わると、兵たちは一斉に沸き上がった。

全軍、アテラタス砦に侵攻開始――。

*

*

*

「奴らの足取りは掴めたか？」

荘厳な雰囲気をもたらし出す柱、床に敷かれた高価な絨毯。

クリスエルム城内、謁見の間。

玉座には、やはりユーネスが座っていた。

そして、少し離れたところに、数人の男が立っている。

先頭に居る男、それは恐ろしい刺すような殺気を漂わせている。

黒く、目まで覆う長い髪、鼻に十字の傷。

髪の間から覗く眼は、視線だけで殺されそうなプレッシャーを放っている。

「……ああ、奴らは貴様の所有するアテラタス砦に侵攻を開始した」

そのプレッシャーにも動じることなく、ユーネスは平然としている。

「ふん……。アテラタスか。ザムが居る所だな。奴は俺が気に入らないようだからな。殺されるがよからう……。ふははははっ！」

ひとしきり、ユーネスは高らかに笑った後、

「引き続き監視をしろ。俺が合図を送るまでは殺すのではないぞ。リック・ザキユール」

「……わかつている。それに、楽しみは後に取っておいたほうがより味わい深い。クッククク……」

長い黒髪を揺らしながら、リック・ザキユールは気味の悪い声で笑った。

*

*

*

夜中。

アテラタス砦の前に着いた。

全軍、息を殺して、向かいの森に隠れている。

門番を昏倒させ、兵を数人中に進入にさせる。

しばらくして、中を調査していた兵が戻ってきた。

「どうだ？」

「約半数の兵は寝ているようです」

「へえ……。意外と呑気なのね」

シエルフィスがひよこつと顔を出した。

「おい、アネさんは隠れてろって言っただろ」

「アネさんはよしてって言ってるでしょ」

門の前に全軍を集めた。

オレはルミニオンの剣を抜く。

「門は開いたか？」

「大丈夫です。すぐにでも突入できます」

「よし、さあ、ガンキチ、頼むぞ」

弓を引き絞るルミニオン。

「行くぞ。全軍、突入開始だッ!!」

『ワアアアアアアッ!!』

門が開き、一斉に突入する全軍。

いきなりの攻撃に、対応できないアテラタス兵。

次々にアテラタス兵を捕獲。

そう、これはオレが命令した。

なるべくこの皆の兵は殺すなつてな。

しかし、やはり何人かは死人が出ているみたいだ。

峰打ちって言っても、渾身の力で叩けば死ぬからな。

騒ぎで叩き起こされたアテラタス兵どもが、寝ぼけ眼のまま次々と現れる。

もちろん、オレにも斬りかかってくる。

「でやあぁっ!!」

「うおっ!？」

オレは紙一重でかわした。

まずい。

非常にまずい。

何故か？

それはこの相手をしている奴が持っている武器にある。

とても長い。3メートル？ それ以上か。

そう、槍である。

剣道部員であるオレが、槍を持った奴と戦った事などあるはずがない。

そう、どう戦えばいいかわからないのだ。

とりあえず突き出される槍をよけることしかできないのだ。

柄を斬ればいいじゃないかと思ったが、あいにくとこの槍の柄は

金属でできているらしく、とても固い。実際にやってみてわかった。くそっ、手が痺れやがった。

「ガンキチ！ どけっ！！」

オレは反射的にサイドステップする。

その瞬間、矢が目の前を横切った。

「ぐあっ！」

アテラタス兵に次々と命中する矢。

しかし、全て手や脚に刺さっている。

凄いいコントロールだな。

「気を付ける。戦場では何が起こるかわからんからな。勝てそうにない相手が現れたら迷わず逃げるんだ」

矢を放ったのはルミニオンだった。

「ああ。ありがと……よっ！」

礼を言いつつオレは新たに斬りかかってきたアテラタス兵を時代劇の主役のように峰打ちを食らわし、昏倒させる。この砦の兵も寝起きだからか、動きが妙にスローだった。

奇襲攻撃が功を奏したか、アテラタス砦は僅か八時間で陥落……。の、はずだった。

だが、一人の武将により、反乱軍は思わぬ打撃を受けていた。

次々と斬り捨てられる兵。

「こんなじゃあ、肩慣らしにもなんねえぞ！！ つええヤツは居ねえのか！？ つええヤツ出てこいッ！！」

赤く鋭く長い槍を持った、時代錯誤な金髪リーゼント頭武将が、兵を蹴散らしながら吠えている。

いつの間にか、その武将の回りにバリアができたかのように円を囲んで兵が後ずさりを始めた。

「バカな奴だな」

ルミニオンの弓矢部隊が一斉に弦を引き絞る。

「待て！」

オレは慌てて止めた。

そう、こいつもひよつとすると仲間になるかもしれないからだ。

「おい、ガンキチ、まさか」

驚くルミニオンを尻目に、オレは武将の前に立った。

「お望み通り、つええヤツが出てきてやったぞ」

武将を見据える。

「ケツ！ 自分で言うヤツはよええっていう相場があんだよ」

槍を構える武将。

オレも剣を正眼に構える。

「やるんなら、名乗りぐらいあげたらどうだ？ まさか、ビビッたんじゃないだろうな？」

挑発をして頭に血を上らせて、攻撃が単調になるよう仕向ける。

これも作戦だ。

「俺はクリスエルム王国四將軍の一人、知る人ぞ知る槍使いのザム

ザム・エクストリアだ！！」

オレも名乗りをあげる。

「オレは反乱軍の正義の味方、ガンキチだ！！」

「が、ガンキチだとっ……………」

名乗った途端、ザムの表情が変わる。

そして、必死に何かをこらえている。

「スキありいっ！！」

オレはザムの赤い槍の切っ先をかわすと、素早く踏み込み、ザムの喉元に剣を突きつける。

「し、しまった。戦いの中で戦いを忘れた……………くくくっ！！」

勝負に負けたというのに、まだ笑いやがるザム。

一斉に兵が飛び掛かり、ザムを簀巻きにする。

簀巻きにされている間も、ザムは笑いまくっていた。

アテラタス砦、制圧完了。

「処遇はどうする？」

アルステールが、簀巻きにされ地面に転がされているザムを見て
呟いた。

「そうだな……。おい、お前、ユースの事をどう思う？」

オレは簀巻きのザムに問う。

「ケツ！ あんな奴、ヘドが出るぜ。恐ろしい事ばかり考えやがってよ」

「村ひとつ焼き払った事もあるらしいよな？」

前にアルステールから聞いた話を振ってみる。

「ああ、そうだ。ひでえ事をしやがる。あんな奴人間じゃねえよ。悪魔だ」

「レジスタンスの一人を処刑して、その首を一カ月間城門に吊るした事もあったんだってな？」

「そうだよ。一カ月もほったらかしにするもんだから、腐っちゃまってひでえ匂いだったんだぜ。おまけに、その首の表情といったらこりやまた怨念のこもった眼で……」

ヤケにペラペラと喋る奴だな。

「更に、姫であって、妹であるレミユリアちゃんを処刑しようとしたんだってな？」

「ああ、奴は絶対頭がおかしいぜ。あんな美人で可愛くて気立てがいい、しかも優しい天使のようなレミユリア姫を殺そうとしやがったんだからな。俺とラムド・ガル、レミユリア姫の護衛……なんて名前だったか忘れたが、そいつと共同して姫を脱出させたぜ。その時のあの悪魔の表情と言ったらもう……」

本当にペラペラとよく喋る奴だな。

「そんじゃ、何でそんな奴に忠誠を誓ってるんだ？」

「別にあんな奴に忠誠なんて誓ってねえよ。ケツ！ 誰があんな悪魔に……」

吐き捨てるようにザムは言った。

「んじゃ、何でせつせと奴の下で働いてるんだよ？」

「ぐ、そ、それは……」

唸るザム。何かわけがありそうな様子だが……。

一部始終を後ろのほうで聞いていたレミュリアは必死に笑いを堪えている。

それを横目にザムは、

「わーった！ わーったよ！！ 仲間になりやあいんだろ！！

仲間になってやんよ！！ 俺は槍使いのザム。槍を扱うのが得意だ。よろしく頼む。以上！！」

真っ赤な顔をして、開き直った。

「お前、意外といい奴じゃないのか？」

「ケツ！ 何を言ってるやがる。そこにレミュリア姫が居るから仲間になってやんだよ」

こうして、槍使いのザムが仲間に加わった。

これは後で聞いた話だが、ザムから斬られた兵で致命傷を負った奴は一人も居なかったらしい。

いい奴じゃねえか。

とりあえず、アテラタス砦は残った兵ともどもオレ達反乱軍のものになった。規模も、倍近くでかくなった。

これからは、ここを拠点にして行動することになる。

さて、これからどう展開していくかだ。

まさか、たった今戦闘したばかりの兵をいきなり使うわけにはいかない。

しばらくは、休養が必要だということか。

余談だが、この砦を手に入れた事で、そんなに額は多くないが軍

資金が手に入った。

オレの小遣いも増えたぞ。60000サフィルくらいな。

アテラタス砦を拠点にして、2日が過ぎた。

砦の中の結構大きな会議室。

オレ達は今作戦会議中である。

「やはり、今はまだ兵が疲弊している」

「そうだな」

「だが、悠長な事をしてんと、ユースの奴が攻めてくんぜ」

金色のリーゼント頭、ザムが挟んだ。

「でも、みんな今、とても疲れています。後2日、休憩をしてもらった方が次の戦いで力を発揮できるのではないのでしょうか」

それまで黙って聞いていたレミユリアが口を開いた。

「はい。その通りです」

さっきまで悠長な事をしてると……とか言っていたザムが、手のひらを返したように態度が変わったぞ。どうもこいつはレミユリアに気があるようだ。叶わぬ恋だというのに。

こうして、この日の作戦会議は終わった。

やはり後2日、兵を休める事になった。

まあ、無理をして負けちまったら元も子もないからな。

夜――。

オレは自室のテラス――と、いってもそんな大したものじゃない――から夜空を眺めていた。

星がこんなにクッキリと見える……。

オレの住んでる世界じゃ、周囲が明るすぎて星は少ししか見えない。

ふっ……。

星ってこんなに綺麗なものだっただんな。

「ガンキチ」

ポンと肩を叩かれ、オレはビビッた。

こう、星空に目を奪われている時にいきなり肩を叩かれるとビビるだろう？

「お、あ、アルステールか……」

そこにはアルステールが立っていた。

「ノックならしたよ。何度叩いても返事が無かったから……」

「だ、誰もそんな事聞いてないし、気にしちやいないぜ」

「ご、ごめん……」

……。

お、おかしい。

アルステールがまたヘンだ。

「あ、謝るなよ。お前らしくない」

「う、うん……」

妙にモジモジしている。

やはり、おかしい。

「どうしたんだ？ 何かオレに話でもあったか？」

オレは思い切って聞いてみる。

しかし、アルステールはまたモジモジと、

「いや、その、話は……別に無いんだ」

「そ、そうか。それじゃ、何の用だよ」

「用が無きゃ……来ちゃいけないかな？」

お、おかしい。

アルステールがヘンだ。

「お、お前、大丈夫か？」

「えっ？ ……別に怪我はしてないよ。ガンキチから鍛えてもらったから」

「そういうことじゃなくて、何か、ヘンだ。今日のお前」
すると、アルステールは少し俯いて、

「それは……。ガンキチのせいだよ」

と、オレの目をジッと見つめてきた。

暗くてよくわからないが、微かに赤くなっているような気がする。
な、何だ？ このラブシーンしてくださいって言わんばかりの雰

囲気は。

「ガンキチ……！」

ガバツとアルステールが抱きついてきた。

うおっ！？

あ。アルステール！

ヤバイ……。オレ、マジになっちゃいそう……。

ん？

何だ？ この匂いは……。

香水……？

何か、ジャスミンの様な匂い……。

アルステールは香水なんか付けてたか？

この間、抱きついた時はこんな匂いしなかったぞ。

違う……。

こいつは……。違う……。

こいつは……、

アルステールじゃ……。ない！

そう思った瞬間、オレはそいつを突き飛ばした。
体勢を崩すそいつ。

離れ際に、腰の辺りに焼けるような痛みが走る。

「ぐっ！」

どうやら斬られたようだ。腰に手をやるとぬるりとした感触が伝わってきた。

「ちつ……バレたか……。知らねば幸せなまま死ねたものを……」
体勢を立て直した謎の女。

アルステールの顔が、バリバリと破かれる。
どうやら皮膚のようなマスクを被って変装していたようだ。全く知らない顔が姿を現した。

その手には忍者がよく使うクナイのようなナイフが握られている。
「くそっ！」

襲いかかってくる女の手を掴む。
しかし。

「ぐ……!？」
なんて力だ！

男のオレが……押し負かされる……！
「観念するんだな……」

ち、ちくしょう！ 誰が観念するか！
オレは女の腹に膝蹴りを浴びせる。

「ごふっ！」
鳩尾にヒットした。

今だ！！
オレは女の腕を取り、床に押さえつけてワキ固めを極める。

「ユーネスの刺客か！？ そうだな！？」
しかし、女は答えない。

それどころか、極めている肩が奇妙な音を立て、あらぬ方向に関節が回り、するりと脱出された。

しかも、まるで手品のように体を入れ替えられ、気付いたらマウ
ントポジションを取られていた。

技のレベルが違いすぎる——！
「ふっふっふ……。形勢逆転、だな」

静かにクナイが振り上げられ、そして振り下ろされる。
「くっ……!」

オレはその細い手首を死に物狂いで掴むが、一体何処からこんな

力が出てくるのか、クナイの切っ先は徐々にオレの眉間へ近付いてくる。

「頑張るねえ、ボウヤ」

頑張らなければ死ぬではないか。

「ほらほら、もっと力を入れないと刺さっちゃうよお」

オレは力を更に入れようとすると、マウントポジションを取られていることと、こいつの馬鹿力のおかげで中途半端にしか力が入らない。

「それが全力かい？ 面白くないねえ」

眉間にクナイの切っ先がピタリと当てられた。

ほんの少し力を込められれば、オレは簡単にこの女から殺られると、瞬間、上からゴツンと鈍い音が響いた。

「が……あ……」

女は手からクナイをポロリと落とし、二、三度痙攣すると、オレの上に倒れてきた。

「うわわわわっ……!」

オレは女をはね除け、慌ててはい出る。

「大丈夫か!? ガンキチ!!」

そこに立っていたのはアルステールだった。通路の一角に置いてあった壺を持っている。

これで後頭部辺りを殴ったんだろう。

「妙に騒がしいから来てみれば……。暗殺者が……。大丈夫か？ 怪我は無いか!？」

壺を床に置いて、オレの身体を心配しまくるアルステール。

オレはアルステールの顔をジッと見る。

「な、何だよ。どうしたんだ？」

「お前……。本物だよな？」

「何をバカな事を言ってるんだ。ボクという人間は一人しか居ない」
「少し、確認させる」

オレはギュッとアルステールを抱きしめた。

「なっ！？ なっ！ なっ……！？」

香水の匂いはしない。

微かに甘い匂い。アルステールの匂い。

程よく筋肉の付いた丁度よい柔らかさの身体。

よく考えると、さっきの女の身体は柔らかすぎた。

こいつは、本物のアルステールだ。

「が、ガンキチ……。そ、その……」

ドタドタドタ……

「何だ！？ どうした！？ 何かあったのか！？」

ルミニオン、シエルフィス、ガザロが数人の兵を連れて部屋に飛び込んできた。

げっ！！

しまった。今、オレはアルステールを抱きしめたままだ。

しかし、既に時は遅い。

ニヤリとルミニオンが笑う。

そして、床で寝ている刺客を拘束して連れていく。

もちろん、シエルフィスやガザロもニヤニヤしながら出ていった。

顔だけ出して、ルミニオンが。

「邪魔してすまんかったな」

次にシエルフィス。

「野暮だったわね」

更にガザロ。

「焦るなよ」

すたすたすた……。

な、何か言わせろ。

頼むから何か言わせてくれ。

3人と数人の兵はスタスタと去っていった。

「……………」

結局、オレは何もいいわけがでなかった。

「す、すまん。お前は本物のアルステールだ」

オレは慌てて離れた。

「だ、だから、言ったのに」

アルステールも慌てて離れる。

……………。

……………。

……………。

こ、この沈黙は何だ。

ま、間がもたない。

「そ、それじゃ！」

アルステールは慌てて部屋を出ていった。

……………。

……………。

不思議なんだよな。人間って。

さっきまで間がもたないか思ってたのに、居なくなると妙に寂しくなるんだよな。

うつむ…………… 不思議だ。

それにしても斬られた腰が痛いぜ。

この後、オレを襲った刺客をいろいろと尋問したが、何をしても口を割らなかった。

あいにくとオレは拷問なんぞする趣味はない。と、いうわけですぐりの刑にした。

これに耐えきれぬ奴はそんなに居ないだろうと思っていたが、こいつは何をやっても何も反応しなかった。

足の裏、脇腹、太もも、脇の下、耳の裏。

全く反応しない。

これ以上に思いつく箇所は恥ずかしくてできない。

結局、日を改めてまた聞き出すことにして、とりあえず牢屋にぶち込んだ。

もちろん、脱走されないよう数人の監視兵を置いておくことも忘れない。

余談だが、オレ達は一部屋に固まってその夜を過ごした。

バラバラで寝るのは危険、とオレとルミニオンは判断したからだ。もちろん、護衛兵をこれでもかかっていうぐらい厳重に配備した事も付け加えておく。

次の日の朝。

「何だと！？ 脱走された！？」

牢屋へ見回りに行った兵からの報告に、ルミニオンは驚愕する。兵の話によると、監視兵12人が倒され、牢はもぬけの力ラだったらしい。

一人で脱獄する事は不可能だ。

何故なら、両手両足はもちろん、身体中に関節を外せても脱出できない拘束器具を付けていたのだ。

味方が……助けにきやがったか。

その日の作戦会議。

「暗殺者。これが一番厄介だ」

「その通り。ある意味、奴らが一番手強いな」

オレとルミニオンは同じことを口にした。

言っておくが斬り付けられた腰はとくにシエルフィスから治療をしてもらったぞ。

刃に毒が仕込まれていた可能性があるため、解毒剤も飲まされた。

「暗殺者……こいつが相手じゃ、コッチの兵が頼りねえな」

ザムも似たようなことを洩らす。

「それじゃ、こっちも似たような職業の人を仲間にしたらどうだろうか？」

アルステールの発言。

「こっちも、暗殺者を雇うか？ 暗殺者を暗殺するための暗殺者を

……なんか、ややこしいな」

冗談めいて言ったオレに、ザムは。

「暗殺者じゃねえけど、ボディーガードを生業としている奴らの話は聞いたことがある」

「おつ、そのボディーガードは強いのか？」

「暗殺者はもちろんのこと、様々な危機からクライアントを守るらしい。守るってんだから相当強いんだろうよ。ここの兵数十名よりはマシじゃねえのか？」

オレは考えた。

ふむ……。

弱かったとしても、戦力にはなる。

「そいつらには何処に行けば会えるんだ？」

「ここから約861ヶザルぐらい行った所にドマジという街がある。そこにシャドウギルドと呼ばれるギルドにそいつらがいるようだ。表向きは酒場みたいだな」

また酒……。

絶対、飲まねえぞ。

「その、ドマジ街までここからどのくらいかかりそうだ？ アネさん」

オレはシエルフィスに聞いてみる。

「だから、アネさんゆーな。……ええとね、861ヶザルだから……。早く着いて3日くらいかしら」

3日！

3日も歩くのか！

顔色が変わったオレを見て、ルミニオンが。

「この皆にまだ馬が何頭か残ってる。そいつに乗っていけばかなり時間短縮になる」

その日の作戦会議で出たその後の方針。

ボディーガードを雇う事。

明朝、オレは4人の仲間を選び、ドマジ街へ向かった。

パーティー編成は、アルステール、レミュリア、シェルフイス、ザムだ。

ルミニオン、ガザロは本拠地を守ってもらったため残ってもらった。

道中、ザムが。

「いやあ、姫と一緒できるなんて光栄です。はっはっは……」
態度がまるで違う。

ニヤニヤと、鼻の下を伸ばしている。
馬に乗れないオレはアルステールにしがみつきながらそれをじつと観察する。

「私も、ザム將軍が居ると心強いです。ふふふ……」
レミュリアは無垢な顔をしてそれに答えている。

「そりゃ、もったいないお言葉。俺なんぞラムド・ガルの足元にも及びませんよ」

「ははは……と照れ笑いをするザム。
「そんな事はありませんわ。貴方は強いお方。自信を持ってください」

口許に手を当てながら、ふふふと笑う。
あいつ、オレに負けたではないか。まともにやり合ったわけじゃないけど。

「お、おい。ガンキチ。あまりくつつくな」
急にアルステールが真っ赤になる。

「ば、バカを言うな。くつつかねえと落ちるんだよ」
第一、つかまるところがアルステールの身体以外無い。
オレにとっては馬の歩く振動すら恐ろしい。

「あらまあ。お熱いことお熱いこと　こっちまで暑くなってきたわ」

シェルフイスがパタパタと手で顔をあおぎながらニヤニヤして言う。
いつものイジメだ。……とわかっていながらもオレは顔が赤くな

る。

「ここ、こいつがくつついてるだけで……」

「ちちち、違う。手を離したら落ちるんだよ」

「いい口実ができたわねガンキチちゃん」

細い目を更に細くするシエルフィス。

「ち、違うつてのに」

夜。

随分馬を走らせたが、結局その日のうちには着かなかった。

これ以上は馬も人間も疲労が溜まる。とシエルフィスの指摘で、野宿の準備をする。

うまい具合に風除けになりそうなかいかい岩が何個か転がっていて、木も何本か生えている場所を見つけると荷物を降ろす。

テントを組み立てる。

馬の手綱も木にくくり付ける。

テントを組み立てた後、火をおこす。

そして、干し肉を食べた後、

「あれ？ おい、何でテントが二つしかねえんだ？　ひとつはどれいけど」

ふと、疑問に思い、聞いてみると、

「バラバラになって寝るとヤバイって言ったのはガンキチちゃんじゃない」

ニヤリとシエルフィスが笑う。

ま、まさか。

ひとつは三人くらいが定員、もうひとつはだいたい二人が定員のテント……。

「私とザムさんは姫様と一緒に寝るわ。ガンキチちゃんはもちろん

……」

あえてその先は言わない。

だが、オレはすぐに分かった。これで分からない奴はレベル99

の鈍感だ。

「ちょ、ちょ、ちょっと待て!!」

慌てるオレ。

「あら、気に入らないの？ 私の提案が」

「だけど、やはり、これは、その、若い男女が狭いひとつのテントで一夜を過ごすという事にならないか？」

「なるわね」

「不潔ではないか」

「まっ、ガンキチちゃんったら古い考え方ね」

「オレは硬派だからな」

「はいはい。そういうことにしましょう。じゃ、正当な理由が必要なのね？」

「そりゃそうだろう」

チラリとオレはアルステールの姿を見ると小さくこくりと頷いた。シエルフィスは一瞬目を閉じた後、

「私と、ザムさんが寝るのは、ザムさんが気に入らないでしょ？」

私とアルステール、私と姫様だと、もう一つのテントが男二人、女一人になっちゃうわ。更にアルステールとザムさんが一緒に寝るのはガンキチちゃんが可哀相だからダメ。姫様は婚約者が居るから、二人で寝させるわけにはいかないでしょ。ザムさんとガンキチちゃんが二人で寝たら面白くないし。私とザムさん、ガンキチちゃんが三人で寝ると、犯されそうだからイヤなの」

ポカンと口を開けて聞いているオレ。

えらい早口で、妙に説得力のある説明をまくしたてる。

「ただだ、誰が犯すか。それに、それならみんなひとつのテントで寝ればいいだろう？」

「ダメよ。あのテントは三人が限界。それに、ガンキチちゃんならアルステールくらいイザというとき守れるでしょう？ それとも、逆に守られちゃうとか？」

シエルフィスは火の側で膝を抱えているアルステールを横目で見

ながら言った。

「……」

アルステールは無言でたき火を見つめている。

そのアルステールと一瞬目が合った。

そして立ち上がりこちらへやってくる。

「なに？ どうしたんですか？ シェルフィスさん」

「ガンキチちゃんとアルステールの事を話してたのよ」

シェルフィス、何でそんな事を言うかな。

途端にアルステールは真っ赤になる。

「え！ あ、う……」

壊れたロボットのようになにも喋らなくなった。

当たり前だ。オレも喋れないんだから。この状況じゃ。

「頑張るのよ。ガンキチちゃんとイイコトがあるといいわね」

「なになっ！？」

ポンとアルステールの背中を叩くと、シェルフィスはそそくさと三人用テントの中に入っていった。

アルステールも、うすうすわかってきたようだ。

目の前にあるテントからは、ザム、レムユリア、シェルフィスの楽しそうな声が聞こえてくる。

それと対照的に、少し離れた所にある二人用テントはもぬけの殻。

「コホン。えーっと。まあ、つまり、こういう事だ」

オレは開き直った。

別にナニかしようとは思ってないし。

「ふ、二人で、寝る。のか？」

アルステールは真っ赤な顔をして、オレを上目遣いに見る。

オレの想像じゃシェルフィスに猛抗議するアルステールの図が思い浮かんだのだが、何か、いや、そんなバカな。嫌がっている様には見えないぞ。

「そ、そうだ。文句があるんなら、シェルフィスに言ってくれ」
完全に開き直ったオレ。

「ガンキチがいいんなら……。ボクも構わないよ……。ちょっと恥ずかしいけど」

お、おかしい。

こんな事をアルステールが言うはずがない。

こいつ、ニセモノか!?

オレはあの女から襲われて以来、疑心暗鬼になっていた。そして本物がニセモノかどうか確かめる方法も学習した。

「あつ!？」

オレはまたアルステールを抱きしめて、匂いを嗅いでみる。

「あ、ちよつと、やつ……」

……………。

……………。

アルステールの匂い……。

香水の匂いはしない……。

ほ、ホンモノだ。

「ご、ごめん。ほ、ホンモノのアルステールだ」

オレはババツとアルステールを離す。

「ななな、何をワケのわからない事を……」

真っ赤な顔が、更に真っ赤になる。

オレも何をしていいやら全く分からなくなった。

また奇妙な沈黙。

「お、オレは寝るぞ。寝るからな」

「ぼ、ボクも寝るさ。寝るよ」

二人同時にテントへ向かう。

ササツとオレがテントに入ると、アルステールもササツと入ってくる。

そして、お互い目一杯距離を取って、防寒処理を施したらしい寝袋の中に入る。

……………。

二人だからそこまで狭くはないはずのテントが、妙に狭く感じる。

「えーっと……、おやすみ」

「う、うん。おやすみ」

……。

……。

……。

眠れやしねえ。

当たり前だ。すぐ隣にアルステールが寝てるんだから。

ちくしょう。無心だ無心。何も考えるな。

えーっと、えーっと。

……。

……。

……。

ね、眠れねえ……。

ちくしょう。何でだ。

こうなったら色々と考えて、頭を疲れさせてやる。

今、夜だな。

そうだ、夜といたら黒、黒といたらアルステールの服……。

……。

ダメだダメだダメだッ！！

そうか、夜だからイカンのだ。

昼だ、昼にしよう。

昼、昼といたら青空、青空といたら青、青といたらアルス

テールの髪……。

……。

……。

イカンイカンイカンッ！！

昼もダメだ、昼もイカン！

えーっと、えーっと、そうだ、夕方だ、夕方にしよう。

夕方といたら夕焼け、夕焼けといたら赤、赤といたら炎、
炎といたら温かい、温かいといたら風呂、風呂といたら水、

水といたら海、海といたら青、青といたらアルステールの瞳……。

……。

……。

オレのバカバカバカ！！

ね、眠れねえ……。な、何で？

夕方もダメだ。夕方もイカン！！

うーむうーむ。そうだ、雪だ。雪にしてやる。雪なら大丈夫だろう。うむ。

雪といたら白、白といたら煙、煙といたら炎、炎といたら赤、赤といたら溶岩、溶岩といたら熱い、熱いといったらお湯、お湯といたら風呂、風呂といたらスポンジ、スポンジといったら柔らかい、柔らかいといったらアルステールの胸……。

……。

……。

……。

い、いかん、アルステールの事を考えてはいかん！

と、思いながらもさっきから全部、ラストがアルステール関連だ。ヤバイ。興奮して更に眠れなくなった。

……。

……。

……。

もう、こうなったら、アルステールの事ばかり考えてやる。

アルステールが一人、アルステールが二人、アルステールが三人……。

「ぼそぼそ……」

ん？

今、何か聞こえたか？

言っておくが、オレは喋ってないぞ。

「……ンキチが363人……ガンキチが364人……ガンキチが365人……ガンキチが366人……ガンキチが……」

……。

……。

……。

アルステールが……、オレを数えてる。
アルステールも同じ気持ち……。

……。

何か、眠くなってきた。眠るかな、アルステールの声でも聞きながら。

なあーんて……。

カッコつけても、全然眠れねえッ！！

ますます興奮してきた。おまけに心臓もバクバクいってやがる。
だあああああッ！！ 全く眠れん！！

どうすればいいんだ。どうすればいいんだ。

このままじゃ、オレ、今日徹夜しちまう。

……。

……。

……。

ん？

「くー……くー……」

寢息が聞こえてくる……。

アルステールの奴、眠ったのか。

オレは……。

ちくしょう。眠らせてくれ。頼むから眠らせてくれ……。

早朝。

テント出入口の隙間から差し込んでくる朝日に、オレは目を覚ました。

何か、頭がボーッとする。

睡眠が足りていない証拠だ。

一体何時に寝たか時計が無いからわからないが。

何か、背中が妙に温かい。

オレはチラッと後ろを見してみる。

ぬおっ！？

オレの背中には、アルステールがくっついていて。もちろん寝袋の中に入ってるぞ。

入ってなかったら、アルステールは風邪をひいてしまう。

……じゃなくて！

ま、まずい。

心臓の動きが血気さかんに……。

……。

オレの所まで転がってきたのか？

結構寝相悪いんだな。

いや、しかし、これは、むむむ……。

……はっ！？

オレは一体何を考えているんだ！？

と、とりあえず、離れねば。

よっ……。この……。うぬっ……。

必死に寝袋の身体を動かして、アルステールとの距離を取ろうと

する。

しかし。

「くーくー」

間近にアルステールの寝顔。

なななな……。何で、何で正面を向いちまうんだ。

オレはアルステールから離れようと……。

断じて違う。断じて違う。

決して、アルステールの寝顔を見ようとかもつとアルステールにくつつこうとか考えていたような。

……はっ！？

ま、まずい。アタマがヘンになってきたか。

オレの顔にアルステールの寝息がかかる。

何か、少し、甘い匂い……。それに、あつたかい。

化粧つ気のない、アルステールの顔。

日に焼けたのか、初めて出くわしたあの時より、少し小麦色の肌。口紅なんか一切付けていない、ピンク色の柔らかそうな唇……。

……はっ！？

だだだ、ダメだ！ 何を考えているんだ！

パチッという音がしそうなほどアルステールは目を開いた。

……………。

……………。

……………。

オレは顔から滝のように汗が流れ落ちる……はずである。マンガでは。

やはり、何が起こったかわからないといったアルステールの表情。や、ヤバイ。パターン通りの展開から推測するに、この次からくる行動は……。

「むにゃ……。うふふふ……」

あら？

オレが予想していた反応と違う。

それどころか、アルステールは嬉しそうに笑みを浮かべながらオレにくつついてくる。

「うふ、ふふふ……」

ね、寝ぼけてる！

完全に寝ぼけてる。

そそ、そんなに顔を近づけるなッ！！

ほ、ほっぺに、ほっぺに……。アルステールのくちびるが……。り、理性が……。

「ガンキチちゃん！ アルステール！ 起きなさい！ ご飯の準備が……」

テント出入口を開けて、中を覗き込み、シエルフィスが呼ぶ。

しかし、パターン通りか、シエルフィスはくつついているオレとアルステールを見ると、固まった。

そして、無表情でテント出入口を閉めると。

「大変。大変よ！ ついにガンキチちゃんとアルステールが……」

慌てて報告に行った。

もちろん、この事でオレが寝袋から超スピードで脱出して外に飛び出した事は言うまでもない。

「違う！ 違うぞ！！」

パチパチと燃えるたき火の前で、朝メシの干し肉と、シエルフィス自作の固形型栄養補助食を食べるオレ。

やはり、朝は冷える。

ここはオレの世界と違って冬だからな。

と、冷静に考えているオレだが、その後、延々といつものイジメが続いた。

ついに結ばれたあの、アルステールが私より早くオトナになったのだの、しかも、ザムまでこのスケベ！ などと言ってくる。

もちろん、オレはパターン通りに言い訳をして誤解を解いたことは言うまでもない。

オレの隣で、ブーツと干し肉と栄養補助食をチビチビとかじるアルステール。

さつきから、何も喋らない。

「……」

「ど、どうしたんだ？ お前」

と、オレが話しかけても、虚ろな眼でオレを一瞥してまたチビチビと朝メシをかじる。「……眠い」

ボソツと呟いて、チビチビと食べる。

「アルステールはいつも、朝はこうでしたのよガンキチさん」

アルステールとは正反対に元気のいいレミユリア。

「うん、低血圧ね。完全に」

早くも朝メシを食べおえたシエルフィスが、アルステールを観察して言った。

余談だが、シエルフィスは小食である。

「ガンキチよお、ちゃんと低血圧のカノジョを守ってやれよお」

ザムが豪快に干し肉をかみちぎりながら茶化してくる。

「ななな、何を言うか！」

焦るオレ。

*

*

*

テントを片付け、たき火を消して、オレ達一行は再びドマジ街を目指す。

相変わらず、オレはアルステールにしがみつきながら馬に乗って

いる。

言っておくが、馬にはちゃんとエサと水を与えているぞ。

まあ、放っておいても勝手にその辺の草とか食ってるけど。

それにしても……。

相変わらず、幻想的な景色だ。

もう、ここにいきなり飛ばされてから約1カ月以上経つが、未だにこの景色は見飽きない。

1カ月……。オレ、1カ月以上も向こうに帰ってないんだな。

何か、妙に寂しい気もするが、そんな事を考えていても向こうには帰れそうにない。

そう、オレはもうやるしかないんだ。

琵琶湖まではいかないが、相当にでかく、美しい湖、これは、ドマジ湖らしい。

これが見えはじめたということは、ドマジ街は目と鼻の先と、ザムが言っていた。

ザムの言うとおりしばらく馬を走らせると街が見えはじめた。この頃、太陽は真上を位置し、昼を知らせていた。

ここが、ドマジ街か……。

中世ヨーロッパ風の建物、レンガ作りの家。

オレの世界では歴史の教科書くらいでしかお目にかかれないような建物ばかりが、ここには多数存在している。

中世ヨーロッパ風といっても、やはりファンタジーらしく多少のアレンジが加えられている。

オレ達は、喫茶店のような店で軽く食事を済ませたあと、ザムの言っていた酒場を探す。

この街は結構広く、酒場といっても、何箇所もあるらしい。これはその辺を歩いているNPC……じゃなくて、民間人から聞いた。こりゃ探すのが大変だ。

かと言って、探さないわけにもいかないからとりあえず次の酒場で情報収集をする。

酒場。

どの酒場も、入った瞬間酒臭い。

そして、騒がしい……はずが、この酒場はみな静かに酒を飲んでいる。

オレは手当たり次第に飲んでいる奴から話を聞き、空振りを繰り返した。

やや気落ちしつつも、13人目の若いスラッとした黒いロングヘアの女性客に話しかけた。

「あら、ナンパ？ 坊や」

「違う、少し聞きたい事がある」

「何？ それ、新しいナンパの手段？」

やたらと茶化してくる女を無視してオレは話を続ける。

「オレ達は、シャドウギルドってのを探してるんだ」

オレの言葉に、女は表情を強張らせた。

この反応は何か知っているな。

「……ここでは話せないから」

目で外に出ましようとしてサインを送ってくる。

オレ達はロングヘアの女の後を付いていく。

そして、連れてこられたのは、静かな裏路地。

所々、果物の皮やゴミが落ちている。

辺りに人の気配はない。

少なくとも、オレの感覚では。

でも、シエルフィスは何かに気付いている様子。

「ガンキチちゃん。迂闊だったわ。囲まれている………15人………いや、20人」

長い耳をピクピクと動かしながら小声で囁く。

「なんだと……？」

オレには全く気配を感じない。

「まずいぜ。こいつは多分シャドウギルドの奴らだ」
ザムが呟いた。オレは思わずザムを見る。

「シャドウギルドの奴らだと？ 何でオレ達を……」

「おおかた、シャドウギルドの事を知ったからじゃねえのか？」

「話と違うぞ。悪者なのか？ こいつらは」

「んな事を俺に聞くな。わかるはずがねえ。単なる噂で聞いた話だ
ったからな」

まずい。

あの暗殺者と同等……或いはそれ以上の強さの奴がわんさかと出てこられると、正直、お手上げだ。

素晴らしいスピードで、一斉に現れる人影。

シエルフィスの言うとおりその数は15以上20未満。

数えているヒマはない。

オレは咄嗟に腰の剣を抜こうとするが、その手に何かが刺さった。
「うっ！？」

右手に刺さったのはダーツの様な細い短剣。

途端に右手が麻酔を打たれたように痺れだす。

毒か！？

まずい！ みんなは……。

素晴らしいスピードで当て身をして、みんな次々と昏倒させられている。唯一、ザムだけは粘っていたが、多勢に無勢。スキを突かれて三段階伸縮可能な自慢の赤い槍を使う前になすすべもなく昏倒した。

オレは右手の痺れが徐々に全身へ広がっていき、身体が思うように動かなくなる。そして、やはり当て身を食らわされた。

首の後ろへ一撃食らった時、不思議と痛いという感覚が無かった。
くそっ……。終わりか……。

薄れゆく意識の中、オレは思った――。

あれから、どのくらいの時が経ったのか。

オレは、目を覚ました。

身体の毒は……大丈夫か。

一応、身体は動く。

よく見たら、右手はご丁寧に手当てされている。

みんな、みんなは何処だ？

辺りを観察するのも忘れて、オレは4人を探す。

だが、オレの心配はよそに、すぐ近くで4人は床で寝ころがっていた。

「目が覚めたでござるか？」

薄暗い部屋の中、突然声が聞こえた。

オレは反射的に辺りを見回す。

薄暗い部屋の中に、人影が……よく見るとわんさかと居る。

「お、オレ達をどうするつもりだ？」

言いようのない恐怖を感じながらも、オレはそれを必死に押し殺し、言った。

「どうするも何も、貴殿達はここに用があつて来たのでござろう？」

「えっ？」

妙に緊張感が無い声。侍のような喋り方。

その声にオレは呆気に取られた。

「ここはシャドウギルドよ」

酒場で会ったロングヘアの女が現れた。

「言いたいことは手に取るようにわかる。ここへ初めて依頼に来た者はみなそれを口にする」

目の前の人影が言う。

だんだん目が慣れてきた。

目の前に、黒いバンダナを深く巻いた黒装束の男が椅子に座って

いた。

よく見ると、辺りに居る奴らは全員、似たような格好をしている。バンダナを巻いてる奴は目の前の男だけだが。

黒いバンダナを巻いたこの男、バンダナで半分隠れて見えないが、鋭い目つき。しかし悪意はない。そして、結構高い鼻。妙に黒い漆黒の髪。しかし、根元の部分の色が違う。顔全体から、妙に頼りになると感じさせる雰囲気がある。歳は、推定28歳くらいか？

あくまでオレの勝手な憶測だが。

そして、クールな感じのする無駄のないスラッとした身体。

ただ者ではない事が、容易に見て取れる。

「なあに？ 貴方、ブレイド・ブラッカー様に一目惚れ？」

ロングヘアの女が茶化してきた。オレがジロジロと観察していたこの男はブレイド・ブラッカーという名のようだ。

「好意は嬉しいが、拙者は生憎そういう趣味を持ち合わせておらん」
クールな表情で言うブレイド・ブラッカー。

悪いがオレも持ち合わせていないぞ。

そして、しばらくして、みんな目覚めた。

目覚めた当初、パターン通りかみんな『俺達をどうするつもりだ！？』とか『一思いに殺せ』とか『私はどんな事でも耐えてみせます』とか『イタイのはよして』など口々に言いまくった事は、やはり言うまでもない。

「すまん。この場所は誰にも知られたらいかんだ。だから、こういう形で貴殿達を——依頼者を連れてきたのでござる」

「だったらそういう風にハナっから言えよ」

「なかなか理解してくれない依頼者が多くてな、それに、我々と同じ手段で強盗をする不届き者がある。だから、素直に応じて貰えないのでござる。説明してもいいが、騒がれても困るのでな」

「それじゃ、ここから出るときは？」

「無論、また眠ってもらおう」

「……」

実的に確に誤解を解くブレイド・ブラッカー。

オレは疑問に思う事を何個か質問してみた。

企業秘密でない質問は的確に答えてくれた。

最初に、こいつらのシャドウキラーという職業。言ってみれば、忍者と似たようなものだ。

後、仲間でこの場所をバラす奴が居たらどうするんだと聞くと「仲間にそんな奴はおらぬ」と一蹴された。後、悪者——ブレイド・ブラッカーの独断と偏見で決めるらしいが——の依頼は受けないぞうだ。

余談だが、オレの右手に刺さったダーツのような短剣には毒ではなくて、痺れ薬が塗られていた。身体が痺れるだけで、命に別状は無いらしい。

「それで、依頼の内容は？　言っておくが我々は善人は殺さぬ。そう決めておる」

とりあえず質問を終えたオレに、ブレイド・ブラッカーが切り出した。

「わかってる。オレ達もいい奴は殺したくない」

ザムの肩をポンポンと叩きながらオレも答える。

「な？　ザム？」

「うるせえぞ」

悪態をつくザムだが顔は怒っていない。

オレはブレイド・ブラッカーに全て話した。

悪王ユースに天誅を食らわすために反乱軍を結成した事、少し前に刺客から殺られそうになったことを。

今になって気付いたが、ユーネスを暗殺すればいいではないかと思ひ、提案してみたが、ユーネスにも、オレ達が考えるようなボディガードが居る可能性が高いらしく、成功する確率が極めて低いと、却下された。

と、いうわけで当初の依頼を頼む。

「依頼は、オレ達をユーネスの刺客から守って欲しいんだ」

「先の話しに出た、クリスエルムの王だな」

「そう。確証は無いが、オレの予想だと多分奴の刺客だと思う」

聞いていたブレイド・ブラッカーの眉が少し反応する。

「その刺客は、どんな者であつた？」

ずいっと顔を近付けて聞いてくる。

「んーと、ヒトの物真似をするというか……、なんか、皮膚の様なマスクを付けて変装していて……」

オレが言い終わると同時に、急に立ち上がるブレイド・ブラッカ
ー。

「ザキキュール暗殺団……。間違いない」

「ざきゅーる暗殺団？」

初めて聞く言葉に、ハテナ顔をするオレとは対照的に、ザムの顔が青くなった。

「ザキキュール暗殺団だと！？ ああ、悪魔、なんて奴らを雇いやがつたんだ！」

取り乱すザムを落ちつかせて、オレは聞いてみる。

「ザム、知ってるのか？」

「ああ。俺どころか姫様も、てめえのカノジョも知ってんぞ」

オレはアルステール、レミュリアを見る。

妙に青白い顔をしている。

ザムの言つたことはマジみたいだ。

シエルフィスは知らないようだ。

「まさか……、ザキキュール暗殺団だなんて……」

レミュリアは驚愕の色を隠せない。

「……」

アルステールは言葉も出ないようだ。カタカタと震えている。

「何だ？ そんなに恐ろしい奴らだったのか？」

オレはあの時の光景を思い浮かべる。

確かに妙に強かったが……。

震えているレミュリア、アルステールに代わって、ブレイド・ブラッカーが説明を始める。

「あ奴らは残忍で悪逆非道な者共だ。依頼されればどんな善人であろうと、その刃にかける。だが、すぐには息の根を止めぬ。さんざん苦しめ、いたぶった後、果物の皮を剥くようにジワジワと殺すのだ。厄介な事に、腕も確かだ」

更に、ブレイド・ブラッカーはオレに指をさして。

「貴殿を襲ったのは、単なる暇つぶしの遊びだな。殺さなかったのが何よりの証拠だ」

「！」

「次に来るときは……。確実に殺される。しかも苦しめながら鬦るようにだ」

ブレイド・ブラッカーが、恐ろしいことを口にする。

「……」

苦しめながら鬦るように——その言葉にオレはビビってしまったように身体中に鳥肌が立ってしまった。

「うむ。依頼を受けよう。ただし、料金は払ってもらおう」

ブレイド・ブラッカーは快諾する。

「そうこなくちゃ。で、料金はいくらだ？」

「100000000サフィルだ。言っておくがこの金額以下にはならぬからそのつもりで」

『いつせんまん！？』

後ろの四人が目丸くした。

オレの小遣いは約60000サフィル。
足りないぞ。

「現在の軍資金の約半分ですわ……。苦しくなっています……。我が軍が」

レムユリアが暗算をする。

軍資金の管理はレムユリアに任せている。

レムユリアは意外に暗算が得意だ。ある意味才能と言えるほど。
人は見かけによらないとは本当だな。

しかし、困ったな。

レムユリアが言うんだからマジだろう。

かと言って、諦めたらシナリオが進まなねえぞ。

「どうにかならないのか？ 月々10000で1000回払いとか

……」

「1000回払ってもらうまでに、我々が死んでしまう。それは却下だ。まあ、ゆっくり決めてくれ。だいたい依頼者はこの金額を聞いて去っていくが」

うつむ……。ブレイド・ブラッカーの言う通りだ。

「エルフなら辛うじて生きてるのにね」

シエルフィスがボソツと呟く。

と、その時。

「……この音は！」

ブレイド・ブラッカーが最初に気付く。
言われてみれば何か音がする。

「まあ、凄い。私より早く気付くなんて」

長い耳をピクピクさせてシエルフィスがやや悔しそうに言う。

「何だ？ 何がどうなってる？」

ハッキリ言つて、何がなんだかオレには全然分らない。

「これは何かを破壊する音だ」

何かを壊している？

頭上から微かに地響きを感じる。その地響きがする度に天井からパラパラと小さな破片が落ちてくる。

そうこう考えていると、一人のシャドウキラーが目の前に現れた。

「……ああ、……ふむ……」

ブレイド・ブラッカーに耳打ちをしている。

報告を聞きおえると、ブレイド・ブラッカーはオレ達に向き直つた。

「どうやら、貴殿達の言う悪王の軍が攻めてきたらしい」

「何だつて!？」

ついにこの辺りも制圧しようというのか？ あの悪王は。

今、オレ達には兵が居ない。

かなりまずい状況だぞ。

「厄介だな。我々はサシの勝負には強いが、人数が多いと不利だ」

「んな頼り無い事を言わないでくれよ」

「我々、シャドウキラーも所詮は人間ということだ。さて、逃げる準備でもするか」

こんなヤバイ時だというのに、妙に冷静なブレイド・ブラッカー。

「ちよつと待て、逃げられるのか？ このパターンだと外はユーネスの兵でいっぱいだよ」

オレの心配をよそにブレイド・ブラッカーは壁際に寄ると、壁を触りはじめる。

そして、ある箇所を触ると壁が忍者屋敷の隠し扉のようにクルツと回転した。

扉の向こうは通路になっているようだ。

「さて、逃げるぞ」

来い、とオレ達に手招きする。

「おい」

「何だ？ 逃げないのか？」

「オレ達、ここから出るのに、眠らせないのか？」

「眠りたいのか？」

「い、いや。遠慮しとく」

「多分、この街はもう終わりだ。今更場所を知られようと、もう関係ない。さ、行くぞ」

ズン……ズン……という音が聞こえる中、オレは頷いてブレイド・ブラッカーに付いていった。

隠し通路を歩いてオレの脳内時間で1時間後。

ようやく終点に着きそうだった。

随分と長く、狭く、薄暗い通路だった。

よくまあ、こんな物を作ったもんだ。

終点に着くと、ブレイド・ブラッカーは壁をあちこちと押す。

一見普通に行き止まりのように見えるが、これはやはり開くんだろっな。

石を擦る音が響き、徐々に開いていく隠し扉。自動じゃないぞ、

もちろん力任せに手動だ。

まさかとは思うが、外にユースの兵が待ち構えていたりしないよな。

ブレイド・ブラッカーの後に続き、オレも外に出る。

もう、辺りは夕焼けに包まれていた。

結構長い時間シャドウギルドに居たようだ。

目の前には見覚えのあるでかい湖が見える。

ドマジ街へ行く前に見たドマジ湖だ。

こんな所につながっていたのか。

「さ、ここもそんなに安全ではない。とつとと逃げるぞ」

ギルドの中に居たシャドウキラー達が全員出てきた事を確認すると、ブレイド・ブラッカーはササッと足音を立てずに早足で歩きだす。

オレはふと、振り返った。

遠くの方で燃えているドマジ街。

ほんの数時間前までは、平和な街だったのに……。

ユース……。

覚えとけよ。

ブレイド・ブラッカーはわざわざ森の中を通って回り道をする。ユーネスの兵に見つかりにくくするために、こうして回り道をしてるんだろな。RPGのパターンだ。

目的地はアテラタス砦。

思わずオレが本拠地はアテラタス砦だと洩らしてしまった事で、ブレイド・ブラッカーは付いていくと言いだしたのだ。

もちろん、シャドウキラー達に異存はなかった。

このパターンだと、アジトが無くなったため、オレ達の本拠地に隠れるつもりか？

それにしても、オレのRPGの経験から考えてみると、シャドウキラーってのは滅多に外へ出ないんじゃないのか？

その滅多に外へ出ない奴らが、ゾロゾロと歩いている光景は、なかなか異様だな。

数時間か歩いて、ようやく森を出た時は、もうとくに日が暮れて、辺りは夜の闇に包まれていた。

「随分遠回りしたな。この分だとしばらくは本拠地へ帰れそうにないな」

少しは歩き慣れたオレの足だが、やはり長時間歩くとふくらはぎがパンパンになる。

アルステールとレミリアはそうでもなさそうだが、シエルフィスは結構辛そうだ。

「いや、あと1日といったところでござろう」

「なにっ？ 1日？ オレ達はドマジ街まで行くのに馬に乗っても1日とちよつとかかったんだぞ？」

「それは貴殿達が街道を通って来たからでござろう。街道を通るとどうしても道に沿って進んでしまう。これは結構な遠回りになるの

でござる」

そう言われればそうだ。

道つてのは歩きやすいところに作ってるからな。それに沿って歩くつて事は必然的に遠回りしているって事になる。

「後、我々は進みやすい所を見つけて歩いていくから、貴殿が進んできた道よりは、かなり時間短縮ができる」

「……。さすがとしか言いようがない」

夜が更けて、闇が一層濃くなった頃。

妙な雰囲気。

さっきまで、何ともなかった。

夜の闇に色を染められ、藍色に変わった草木も、山も、さっきまでは、特に気にも止めなかったのに。鳥肌が立つてくる。

シエルフィスの耳が、ピクピクと動く。

「ヤバイわ……。ガンキチちゃん。どうも、嗅ぎつけられたようね

……」

何かに気付いたようだ。

レミュリアとアルステールはカタカタと震えている。

ザムも顔色が変わっている。

突然、ブレイド・ブラッカーがダーツのような短剣を投げた。

短剣は夜の闇に吸い込まれる。避けられたようだ。

「まずい。奴らだ」

「奴ら？」

オレが聞いた瞬間、夜の闇から黒い人影が次々と現れる。

その数、約30人前後。

「ふっふっふ……。見つけたぞ。シャドウキラーと、シャドウキラ
ー頭領、ブレイド・ブラッカー！」

リーダーらしき人物が現れた。

その顔は……。何処かで見たことがある。

『ふっふっふ……形勢逆転、だな』

「あっ！ あの時の女！！」

オレは思わず叫んでしまう。

アルステールもそれに気付いた。

そう、リーダーらしき奴はオレを襲った刺客だった。

あの時は薄暗くて見えなかったが、切れ長の眼、白い肌、ややおかっぱ気味な黒い髪。

アサシンらしく、無駄のない身体。

パターン通りに悪役の容姿だ。

「ふふふ……。久しぶりだな。テクの下手なボウヤと、私の頭を殴ってくれたお嬢ちゃん。……痛かったわ」

何か雰囲気がこの間と違う。

いや、確かに同一人物のはずだ。

「そうか。我々をおびき出すために悪王の軍を利用し、街を攻めたのか……。ザキキュール暗殺団！」

ブレイド・ブラッカーが吠える。

ザキキュール暗殺団……。さっきの異様な雰囲気の原因はこいつらだったか。

「ご名答。貴様らは何かと邪魔だからな。死んでもらうよ」

リーダーの女は答えると、指を鳴らすと同時に一斉に襲いかかってきた。

ブレイド・ブラッカー、シャドウキラー達は必死に応戦する。

ザキキュール暗殺団の奴らは執拗にブレイド・ブラッカーだけを狙う。

シャドウキラーが援護に回っているがどうも苦しい状況になっている。

不思議と、オレ達には襲ってこない。

しかし、オレは黙ってみているほど頭は良くない。

腰の剣を抜くと、ザキキュール暗殺団の一人に斬りかかった。

「てやつ!!」

胸に向かって思い切り振る。

オレの予定では、胸を避けられたら面を狙うつもりだった。これは燕返しもどきといって、もし部活でこの技を使うと顧問の先生からこつてりと絞られてしまう。

しかし、山賊や、アテラタス兵には当たるはずの剣は、ことごとく避けられた。

暗殺兵は、くると身を翻すと、何事も無かったかのようにオレを無視して再びブレイド・ブラッカーに斬りかかる。

ブレイド・ブラッカーは襲いかかってくる暗殺兵の刃を紙一重でかわし、返す刀で斬り捨てている。しかし、やはり多勢に無勢のようだ。

「うぬっ!!」

ブレイド・ブラッカーの左上腕が、僅かに斬り付けられた。

顔をしかめながらも、左手で短剣ダーツを投げ、命中させる。

援護をするシャドウキラー。しかし、徐々に倒れる者が出始めた。

あの女リーダーと目が合った。

「ちくしょおっ!!」

アルステールとザムの三人がかりで斬りかかる。

一撃、二撃とあっさり避けられ、ザムは吹っ飛ばされ、鎌のように

先の曲がった短剣で、オレの剣は簡単に止められる。

「うぐぐぐ……!!?」

物凄い力だ。

この間より強い。

まさか、手加減してやがったのか。

「ふふふ……。坊や達の相手は、また今度だ。まだ、お許しが出ていないからな……」

足が宙に浮いた。

吹っ飛ばされた。

地面に落ちた瞬間、一瞬息が詰まった。

「ごほっ！」

「ガンキチッ！」

アルステールが慌てて駆け寄る。

っ、強い。

剣を杖代わりに立ち上がる。

こっちの方がやや押され気味だ……。

このままではまずいぞ。

ブレイド・ブラッカーは一瞬の隙を突いて暗殺兵との距離を取る。

シャドウキラー達が次々に地面へ何かを叩きつけた。

その途端、濃い煙が吹き出し、周囲が見えなくなる。

煙玉だ。

「逃げるぞー！」

何者かがオレの手を引く。

ブレイド・ブラッカーだ。

オレは側に居たアルステールの手を引くと、反射的に走り出した。

おとりのシャドウキラーが数人敵を引きつけ、応戦している。

……あいつら、死ぬだろうな。

くそっ……。オレって無力だ。

オレはレミュリア、シエルフィス、ザムを探した。が、心配には及ばず、ザムはレミュリアを抱き抱え、シエルフィスは全速力で走ってきていた。

くそっ！ 絶対逃げてやる！

*

*

*

本拠地、アテラタス砦。

監視塔から外を眺めていた兵が、何かに気付き、驚愕する。

カーンカーンカーン！！

ひとつの監視塔から鐘の音が鳴り響くと同時に、他の監視塔からも連鎖して鐘が鳴りはじめる。

途端に慌ただしくなる周囲。

「敵襲ーッ！！ 敵襲ーッ！！」

ルミニオン、ガザロの居る部屋に、兵が飛び込んでくる。

「どうした？ 何事だ！？」

「ゆ、ユース軍です！ ユース軍が攻めてきましたッ！！」
大慌てで報告する兵。

それを聞いて、やや焦りの色が隠せないルミニオン。

「数は？」

「はい、約8000との報告です」

「8000だと！？」

アゴの不精髭を触りながら、ガザロが険しい表情になる。

「まずいな……。あいつらが帰ってくるまで持ちこたえられるか？」

「仕方ない。俺達はガンキチにここを守るよう言われたんだ、やるしかないぜ、おやっさん」

ルミニオンが壁に立てかけていた弓を取り、矢筒をしょって言う。

「お前まで『おやっさん』はやめる。何か、お前、ガンキチに似てきたぞ」

と、言いつつも傍らに置いていた大剣を拾って柄を握る。

「よし、籠城だ！ 剣、槍兵を広場に集め、門を固めろ！ 弓兵は城壁の上に待機！ ここを死守するんだ！！」

あれから何時間経ったんだろうか……。

ガムシヤラに逃げ回っていたら、気付くともう夜が明けかけていた。

体力も精神力も限界が近い。

ザキキュール暗殺団の奴らは、辛うじて撒いたようだ。

シャドウキラーの約3分の1がザキキュール暗殺団の奴らに殺られ、随分と少なくなってしまった。

それと、ブレイド・ブラッカーの斬られた左上腕はパターン通りに毒の塗られた武器で斬られていた。

しかし、シエルフィスの持っていた解毒剤のおかげで事なきを得る。

「着いたぞ。予定より早かったな」

ブレイド・ブラッカーは疲れた素振りを見せず、クールに言った。茂みの間から、本拠地、アテラタス砦が見える。

やっと着いた……。

と、普通は安堵するはずが、オレは目の前の光景を見て愕然とする。

本拠地が、ユーネス軍に囲まれていたのだ。

双方とも攻撃を仕掛けず、膠着状態に陥っている。

弓や剣、槍を持ち、銀色の甲冑をつけた中世ヨーロッパ風の兵。忘れもしない、あれは間違いなくユーネスの兵だ。

白い馬に乗った騎馬兵が多い。

ついでに、数も多い。

「まずい。囲まれてやがる」

ある程度予想はしていた。こうなるだろうなとは思っていた。

「貴殿の本拠地も風前の灯火だな」

冷静に語るブレイド・ブラッカー。

「ガンキチちゃん、どうするのよ？」

明らかに焦っているシエルフィス。

そんな事を言われても、こうなるとお手上げだ。

だが、絶対にゲームオーバーになるゲームは存在しない。

もし、あったとしたら、それはデバッグしていない不良品だ。

何か手はあるはずだ。何か……。

「おい、あれ。あの白馬。白騎士。あれはまさか……」

指をさしながら、ザムが言った。

白馬？ 白馬がどうかしたのか？

「ラムド……」

さっきまで疲れの色を隠せなかったレミュリアが、我を忘れて飛び出した。

「レミュリアちゃん！ 危ねえ！」

と、腕を掴もうとしたが、一瞬遅かった。

握っていたのは空気だった。

「くそっ！」

オレは飛び出す。死を覚悟して。

ザム、アルステールも飛び出した。

「もう、どうなっても知らないわよ！」

シエルフィスも飛び出す。

「全く、面倒な事になったでござる」

と、洩らしつつ、ブレイド・ブラッカーも生き残ったシャドウキラーと一緒に後へ続く。

パターン通りか、兵に囲まれた。

あつと言っ間だった。

「何だ貴様は！ 貴様もこの砦の人間か！？」

部隊長らしき兵から問われる。

数十人の兵から槍を突きつけられる。

ああもう。マジで終わった……。

ギリギリと無数の刃が、目の前で光っている。これで怖いと思わないほうがおかしい。しかし。

「ラムド・ガル！　ラムド・ガルに会わせてください！」

わめきちらすように叫ぶレムリア。

ラムド・ガル？　レムリアちゃんの恋人の？

「むっ！？　何故この軍がラムド・ガル様の軍だとわかった！？」
険悪な雰囲気だ。

「私はレムリア。レムリア・クリスエルムです！　お願いです、ラムド・ガルに会わせて！」

泣きそうになりながらも、レムリアは引き下がらない。

レムリアという名を聞いた部隊長の顔色が変わった。

「……レムリア！？　レムリア姫！？」

「はい、レムリアです！」

「ま、まさか……」

と、うろたえるも、部隊長は兵の一人に耳打ちする。

こくりと頷くと、一人の兵は早足でその場から去っていった。

だが、まだ、目の前に突きつけられている刃は下ろしてくれない。

「……まだ、貴様らを信用したわけではない。今、ラムド・ガル様を呼びに行かせたが、少しでも妙な動きをしたら、容赦なく斬る！」
「……」

少し、安堵した表情のレムリア。

オレはとても安堵できない。だって目の前で刃を突きつけられているんだぞ。

とりあえずは、殺されずには済みそうだが。

約30分後――。

ドトドトドトツと馬を全速力で走らせる独特の音が聞こえてき

た。

そして、兵の少し前でザザッとブレーキングして、馬から降りる。

「構わん」

妙に爽やかな男の声が響き渡った。

その途端、オレ達の前に突きつけられた槍が上に戻される。

そして、兵が二つに割れると、ひとりの騎士が姿を現した。

赤い長髪。グレーの瞳。つんと高く、格好のいい鼻、端正のとれた顔。長身で細身——と言ってもオレより一回り大きい——の、何かこう頼りがいのありそうな爽やかなナイスガイ。

白い甲冑、白い盾、白く輝く刀身の長い剣を装備している。

もう、単純に言ってしまうえば、悔しいがとてもイイ男だ。

こいつがラムド・ガルなのか？

まるで、ゲームでは定番の白馬の王子様みたいじゃないか。

「レミュリアッ——！」

ラムド・ガルは顔を輝かせ、レミュリアに駆け寄った。一目でわかったようだ。

「ラムドッ——！」

レミュリアも一目でわかったらしい。

二人はひしと抱き合う。

感動のシーン。

しかし、

……。

何か、悔しいぞ。

感動の再会シーンを見て、アルステール、ザムはボロボロと泣きまくる。

パターン通りだが、ラムド・ガルは手のひらを返したようにオレ達の反乱軍へ寝返った。

この事が兵全体に伝わるまで結構ヒマがかかった事は、言うまで

もない。

更に、本拠地の兵にも、ラムド・ガルの軍が仲間になった事が伝わるのに、やたらとヒマがかかった事は、やはり言うまでもない。都合のいいことに、ラムド・ガルの兵はみなラムド・ガルに固い忠誠を誓っているらしく、二つ返事で寝返りに賛成した。

元々、戦力が集まればユーネスに反旗を翻すつもりでいたらしいと、ここまで話を聞いたところで、

疲労もあつたせいか、オレは緊張の糸が切れて、ぶっ倒れた。

次の日の朝。

気付くと、オレはベッドの上に寝ていた。

それも、本拠地内のオレの部屋。

誰が運んでくれたのか……と、思った瞬間、その張本人らしき人物が、ベッドの脇で突っ伏している。

アルステールだ。

「くー……くー……」

全く……。風邪ひくぜ。

オレはアルステールを抱き抱えると、ベッドに寝せて、布団を掛けた。

作戦会議室。

多分、皆そこに集まっているだろうと思い、オレは足を運んだ。しかし、読みは外れた。

そこに居たのは3人。

白い甲冑を着ていない白い貴族スーツ姿のラムド・ガル。

後、ブレイド・ブラッカー、レムユリア。

「身体は大丈夫でござるか？」

ブレイド・ブラッカーが腕を組みながら訊ねてくる。

「ああ。何ともない」

身体を動かして、元気なことをアピールしてみせる。

ラムド・ガルが爽やかな顔をして、オレを見ている。

うつむ……。やはりイイ男だ。悔しいが。

「ガンキチさん。ラムドから話があるそうです」

いつになくニコニコと顔を輝かせて、レムユリアが告げた。

そして、ラムド・ガルが前に出る。

「ガンキチ殿。改めて礼を言いたい。今までレムユリアを守ってく

れたこと、私の代わりに反乱軍まで作ってくれたこと……。いくら感謝しても足りないくらいだ」

ラムド・ガルは、爽やかな笑顔でくすぐったくなるような事を言っ
て、頭を下げる。

「そ、そうでもないぜ。オレはただクリアのため……。あわわわっ
！　じゃなくて、正義の味方だから当然の事をしたままだ。それに、
ガンキチ殿なんて呼ばないでくれ。妙にくすぐったい」

オレは精一杯照れ隠しをして答える。

「わかった。では、ガンキチ。本当にありがとう……。そして、こ
れからよろしく頼む」

と、右手を差し出してきた。

オレは迷わずその手を握った。

ラムド・ガルとしばらく雑談を交わし、話が一区切り着く。そこ
で妙にタイミングのいいところでブレイド・ブラッカーが話しかけ
てきた。

「ガンキチ。拙者達は貴殿の傘下に入る事を決めた」

「えっ？　それは本当か？　でも、金が……」

オレは思わず懐のポケットに手をつ込み、金を出そうとする。
到底足りそうにない金を。

それを、手で制するブレイド・ブラッカー。

「金はいい。ツケにしておく。あの悪王を倒したあとでも間に合う
でござるからな」

「……すまん」

「謝る必要は無い。これは拙者自身が決めた問題でござる。それに、
貴殿に付いて行けば、あの憎きザキュール暗殺団を壊滅に追い込め
るかもしれん」

それだけ言うと、ブレイド・ブラッカーはおもむろに指笛を吹く。
すると目の前に、ササツとシャドウキラーが3人現れた。

ひとり、あの酒場で会った黒いロングヘアでスラッとした身体

の女。

こっちのふたりは同じ背丈で、小さな身体まで同じの女の子。
だいたい、オレの胸くらいの身長だな。

よく見ると、顔、髪形まで同じ。

3人とも、黒装束だ。

「？ この3人は？」

「貴殿に付けるボディーガードだ」

「でも、3人は付けすぎじゃないのか？」

「案ずることはない。他の武将達にもキッチンとボディーガードを付けている。数は減ってしまったが、一応貴殿達を護衛するくらいのシャドウキラーは揃っている」

ブレイド・ブラッカーが言い終わると同時に、黒いロングヘアの女がオレに手を振る。

「おい、自己紹介だ」

ブレイド・ブラッカーは3人に言う。

「私はティカイナ。よろしくね。坊や」

黒いロングヘアをかきあげながら、ティカイナは名乗り、手を差し出した。

やや照れながらも、オレは握手した。

紫色の瞳が微かに覗く。

な、何か妙に色っぽいな。

まあ、酒場で会ったときは、シャドウギルドの事しか頭に無かったからな。改めてこうして見てみると、妙にこれまた……。

い、イカン。

次に、全く同じ顔、姿をした女の子ふたりが前に出てくる。

「私はレザよ」

「私はラザです」

ふたり交互に言うが、どちらも髪の毛は焦げ茶色のポニーテール。ゴールドブラウンの瞳。オレの世界の言葉で言えば、ロリータフェ

イスの小顔。小さな身体で、見分けがつかない。

ふたりを見て、理解に苦しむオレに、

「私達は、双子なんです。ふたりともそっくりだから、よく間違われて……」

控えめに言うレザか、ラザのどちらか。ハッキリ言っで見分けが付かない。

「明るく喋る私がレザ。そして、妙に根暗なこの人がラザ。後、見分け方はラザのアゴに付いてる小さなホクロ。私はホクロ付いてないから。わかった？ 頼みますヨ、おにいさん」

と、言っオレの手をギュツと握ってくる。

ふむ…… また随分と陽気な奴だな。

「レザ、根暗はヒドいです……。私はただ控えめなだけなのに……クスン」

鼻をすすりはじめるラザ…… なのかな？

アゴに小さなホクロがあるからラザだよな？

「え、えーっと。お前がレザで、君がラザ。で、いいんだよな？」

こくりと頷くラザ。

「ちよっと！ 何でラザが『キミ』で私が『オマエ』なのよ」

アゴにホクロが付いていないレザがプンスカと怒る。

「何となく」

「何か、納得がいかないわね」

と疑問な顔をするレザを無視して、アゴにホクロが付いているラザに、

「それじゃ、よろしくね。ラザちゃん」

オレはラザの手を取って優しく握った。

いや、何かこう、こういう風にしなきゃいけないというような使命感がこみ上げて来たから、こういう行動をとったのだ。

柔らかい小さな手だ。

ラザは途端に顔を赤くする。

「あ……。はい。よろしくお願いします」

小さな声で答える。

うゝむ。妙に可愛いぞ。

「ナンカ、結構な差別を受けてる気がするの、私の気のせいかしら？」

眉尻をピクピクさせ、抗議してくるレザ。

「気のせいだ」

ボディーガードのシャドウキラー達が仲間になり、これで暗殺者に狙われる危険がグンと減った。

特に、ブレイド・ブラツカーは、ティカイナ、レザ、ラザが言うには、相当な修行を積んでいて腕はピカイチらしい。さすがはシャドウキラーのリーダーだけある。

ラムド・ガルも、大量の兵を連れて仲間になってくれて、更に軍資金まで持ってきてくれた。

一段と規模がでかくなった反乱軍。

これで、いよいよユース軍と全面戦争突入だな。

——ただ、ひとつだけオレは気にしている事があった。

ザキユール暗殺団。あいつらがわんさかと出てきたとき、オレは手も足も出なかった。自分の無力さを痛感させられた。

所詮はRPGの世界だろうと、ナメていた事が、今になって悔やまれる。

オレには、特訓が必要だ。

部活の練習のような遊びじゃ、この世界で生きていける自信がない。

そう、精進あるのみだ。

昼を過ぎて、オレはアルステールと共に、ある人物へ手合わせを申し込んだ。

約束どおり、アルステールと一緒に中庭でその人物を待つ。

「ふむ、時間丁度である」

ブレイド・ブラッカーが来た。

時間つてのは、日時計で決めている。

これが結構正確なんだぞ。

「久々に、腕が鳴る」

レミユリアと一緒に、ラムド・ガルも姿を現す。

そう、オレはこのふたりに手合わせを申し込んだのだ。

將軍同士の対決を見ようと、野次馬と化した兵達が周囲をぐるりと囲んでいる。

オレの仲間達も、もちろん居るぞ。

シエルフィスなんかは、審判をする！ と、言っただけで、仕方なくシエルフィスに審判をさせる事にした。

後、いつの間にか、オレは兵達からガンキチ將軍と呼ばれていた。悪い気はしないけど、妙にくすぐったいな。

それと、これは試合じゃないぞ。特訓だ。

まず、オレとブレイド・ブラッカーが前に出る。

双方へ、木で作った剣が渡される。

な、何か、ドキドキしてきた。

まるで、剣道の公式試合の時みたいだ。

木製の兜、鎧を着ながら、オレは思った。

この兜、鎧の内側にはワタのような柔らかい物が詰められており、衝撃を吸収するみたいだ。

「ブラちゃんを着ないのか？」

オレが勝手に付けたニックネームにブレイド・ブラッカーはズッコケる。

サッと起き上がると、

「ぶ、ブラちゃんは勘弁してくれ。せめて、ブレちゃんとも言うてくれ」

「わかった。ブレちゃん」

「……防具の事だが、あれを着ると拙者は動きが鈍くなってしまう。それに、心配には及ばん」

ブレイド・ブラッカーは黒装束の胸をはだけさせる。

細かいメッシュの服……鎖かたびらだ。

更に、黒いバンダナの中から、薄い金属のような物を取り出す。

「まあ、大丈夫という事だ」

ブレイド・ブラッカーは口の端を持ち上げた。

オレもこくりと頷く。

オレは木剣を正眼に構える。

基本の構えだ。

顧問の先生は上段構えが気に入ってるらしく、いつも上段構えだ。しかも、相当強いぞ。

対するブレイド・ブラッカーは、木剣を右手で逆手に持って、ただ突っ立っているだけ。

しかし、凄まじいプレッシャーだ。

「はじめっ！」

シエルフィスの声に、オレは反射的にブレイド・ブラッカーへ斬りかかった。

右足で踏み込み、一気に間合いを詰め、ブレイド・ブラッカーの胴目掛けて振る。

だが、当たる瞬間、だらんと下げていたブレイド・ブラッカーの右手の木剣が動いた。

そして次の瞬間、カキインと乾いた音が響いた。

「えっ!？」

ジッと見守っていたアルステールの顔色が変わった。オレも、その『えっ!？』を言いたい。気付いたら、オレの右手から木剣が消えていたんだから。木剣を持っていた右手がジーンと痺れている。オレは一体何をされた？

カランカランと木剣が地面に落ちる音。静まり返る周囲。

止めに入ろうとしたシエルフィスを制してブレイド・ブロッカーは。

「ほれ、これで終わりではないだろう？ 拾うでござる」

余裕たつぷりに、転がったオレの木剣を指さす。

オレはサッと木剣を拾う。

まだ、右手が痺れている。

「ちくしょう。強ええよ。ブレちゃん」

剣道の『け』の字も無いぜ、今の攻撃は。

ということは、オレも剣道というワクにはまらないような攻撃をしてもいいという事だ。

そう考えたオレは、木剣を片手で持った。

そして、再度、斬りかかる。

さっきまでブレイド・ブロッカーは構えなしかったのが、今度は逆手に持った木剣を胸の前で水平に構えている。

木剣を振る。

と、見せかけて、しゃがんで水面蹴り。

「ふむ」

と、ひと声聞こえたと思ったら、見事にスカした。

約1メートルほど跳躍して、見事に避けるブレイド・ブロッカー。

しまった。この次の行動を考えていない。モロに隙だらけだ。

ブレイド・ブラッカーは着地と同時に、オレの兜へ一撃。

コッソんと手加減して叩かれた。

「うっ」

手も足も出なかった。

「うむ。剣も体術もなかなかスジがある。山賊を相手にただけの事はあるでござるな」

ニヤリと笑うブレイド・ブラッカー。

しかし、負けた後に言われると、結構惨めだぞ。

「見たか？ ガンキチ將軍のあの踏み込みの速さ！ あんな速さで踏み込まれたらひとたまりもないぞ」

「ブレイド・ブラッカー様も凄い。そんなガンキチ將軍を負かしたんだから」

双方をほめたたえる兵達。

しかし……メチャクチャ悔しいぞ。

続いて、アルステールとラムド・ガルの手合わせも、オレと似たようなパターンに終わった。

オレが教えた通りのやり方で、果敢にも斬り込んでいくが、2、3撃、剣を交わしたあと、あっさりと胴を決められた。

しかも、ブレイド・ブラッカーみたいに格闘術は使わず、正統派の剣士だ。

ラムド・ガルの強さは半端じゃない。

まるで顧問の先生のような。

2回ほど手合わせをして、本日の特訓は終了した。

夜。

オレは密かにブレイド・ブラッカーに、特訓の約束をしていた。砦の中であると、また野次馬の兵が集まってくる。それでは落ち

ついて特訓できない。

もとい、オレが無様にやられるところを見られたくないと言った方が正しい。

で、今、砦の外に居るわけだ。

あのボディーガード達が陰ながら見守っていてくれるおかげで、安心して居られる。

今もそこら辺で見張っているみたいだ。

ふと微かに気配を感じた。

来たか。ブレちゃん。

と、思ったら。

「あれ？ ガンキチ」

アルステールだった。

「お、お前、何でこんなところに……」

予想外の出来事に慌てるオレに、

「いや、その、ラムド・ガル様に特訓を……」

「お前もか？」

「お前もつてことは、ガンキチも？」

「ま、まあな。少し、ブレちゃんに鍛えてもらおうと思って」

「ははは……気が合う」

アルステールは嬉しそうに笑う。

……何か、妙に可愛いぞ。

今、一瞬ドキツとしてしまった。

靴音が聞こえてくる。

闇の向こうから、ラムド・ガルが姿を現した。

「……おや、ガンキチ。君も来てたのか。……こりゃ、お邪魔だったかな」

会っなり茶化してくるラムド・ガル。

このナイスガイもこういうキャラだったのか。

「な、何を……」

「さ、さあ、ラムド・ガル様、特訓を始めましょう！」

真っ赤な顔をこまかすように、アルステールが切り出す。

「はっはっは……。レミユリアから聞いた通りだ。ガンキチ、アルステールを大事にするんだぞ。こう見えて、この子は繊細だからなとも傷つきやすい。守ってやるんだ」

えらく真面目に言うラムド・ガルにオレは、

「わ、わかった」

と、つい返事をしてしまった。

……。

わかったって何だ。

わかったって何だ。何をわかったんだ？

や、ヤバイ。迂闊な一言だった。

「が、ガンキチ。えっと……」

「ち、違う。オレは……。そ、そうだ、ユースから傷つけられないよう守ってやる。と、いう意味で返事したんだ」

苦しい言い訳だ。自分でもそう思う。

「ふふ……」

オレとアルステールのやりとりを見て、楽しそうに笑うラムド・ガル。

とりあえずアルステールとの話を何とか丸め込むと、オレは、ふと後ろを見た。

「どわっ！ ブレちゃん！ いつの間に……」

そう、後ろにはブレイド・ブラッカーが立っていたのだ。

全く気配を感じなかった。

いや、アルステールとの話を丸め込むのに夢中だったからか。

「……何となく、声をかけにくかったでござる」

とにもかくにも、特訓は予定通り開始された。

ブレイド・ブラッカーは巧みにオレの攻撃をかわし、かすりもし

なかった。

オレが考えつく攻撃は全てかわされる。レベルが違いすぎた。

「ふむ……。ガンキチ、貴殿に足りぬものが何となくわかった」

特訓を始めて約30分くらいか、スタミナをすり減らしたオレは、回復を図るため距離をとった時、ブレイド・ブラッカーは口を開いた。

「……はあはあ……。そりゃ一体何だよ」

オレは乱れた呼吸を整えながら訊いてみる。

攻撃は一切していないが、あれだけ動き回ったのにも関わらずブレイド・ブラッカーは息ひとつ乱れていない。

「基礎体力は十分とはいかないが、結構ついている。筋力もそこそこにある」

「はあはあ……。ふむ。んで？」

「無駄な動きが多すぎる。後、無駄に力を入れすぎている。このふたつは俊敏な動作を欠かせ、更にスタミナも多く消費してしまう」

「……」

何か、顧問の先生に言われてるみたいだ。

「んじゃ、筋肉を鍛えりゃいいのか？ 早く動けるように」

「それは個人に任せる。現に拙者の力は多分、貴殿と同じくらいと思う」

「何だと？ それじゃあ……」

オレはうまい具合に切り株を見つけると、その上に上着を敷いて、右肘を置く。

「やってみようぜ」

そう、腕相撲だ。

オレの意図することを感じ取ったか、ブレイド・ブラッカーは右腕の肘を切り株の上に付け、オレの右手を握る。

「よし、それじゃ、この石ころが落ちた時スタートだ」

オレは左手で石ころを上放った。

カチンと石ころが落ちた瞬間、オレは全力を右手に注いだ。

「おりゃあああああつー!!」

「うぬぬぬぬ……」

動かない。

力の差が圧倒的でピクともしないわけではない。お互いの力が均等で動かないのだ。

現にオレの右手にかかる負荷は、倒されるほどではない。

ほんの20秒くらいか、オレは手を離した。

少し右腕がピクピクと痙攣する。

「……ふうふう……。と、まあ、こういう事でござる」

さっきまで息ひとつ切れていなかったブレイド・ブラッカーが、少し苦しそうに呼吸している。

「はあはあ……。こういうことだ。昼の特訓の時は、簡単に剣をはじき飛ばされたというのに」

呼吸を整え、オレは聞く。

右手をブラプラとさせるブレイド・ブラッカー。

「あれは当てる場所に秘密がある。力は弱くとも簡単にできる」

すると、ブレイド・ブラッカーは昼間の木剣を持ってきていたのか、オレに1本放った。

反射的に受け取る。

「それじゃ、ゆっくりとやってみよう」

ブレイド・ブラッカーの指示どおり、オレはスローに斬りかかる。

「ここだ。コツはこれだ」

斜めに振ったオレの木剣の切っ先を、ブレイド・ブラッカーは木剣の根元で軽く合わせる。

不思議なことに、持っている柄が妙に振動する。

「テコの原理をうまく利用するのだ。ただ、この技術は勘と反射神経を必要とするが、それは慣れれば何とかなる」

「ほうほう……。それで、避けるのは？ どうやってあんなに素早く避けられるんだ？」

「それは、相手の動きを空気と僅かな事前動作で読んで、予測する

のだ。予測できると、避けやすくなるのは当たり前だな。後は、常に有利な場所へ移動する。有利な場所は平地であろうと山道であろうと必ず存在するのでござる」

「ふむ。プロの技だな」

「後は、相手の弱点を見つける事。弱点と言っても、そんなに難しく考える必要はない。要は方向である。誰でも苦手な方向というのは、あるものでござる。これが見極められるようになると、有利な場所へ自然と移動できるようになる」

「へえ……。ためになる」

「後は、ひたすら経験でござる」

「それじゃ……。協力、頼むぜ。経験値稼ぎの」
「御意」

それからオレは、ブレイド・ブラッカーとの特訓に励んだ。

アルステールもラムド・ガルにだいぶ絞られているようだ。

しかし、厳しくともやはり紳士か、女の子に対する扱い方が上手い。さすがは騎士だけある。

この日、オレの手足、木剣はブレイド・ブラッカーにかすりもしなかった。

あれから9日が過ぎようとしていた。

いまだにユーネスの進軍は無く、ザキユール暗殺団の襲撃も無い
穏やかな日々が続いた。

中庭を歩くと、兵の訓練する声が聞こえてくる。

結構な人数に膨れ上がった為、弓兵隊の部隊長ルミニオンは結構
辛そうだ。

斧を主力武器としたガザロの山賊部隊もラムド・ガル精鋭部隊も
もちろん日々訓練に明け暮れている。

ブレイド・ブラッカーには、相変わらず特訓の相手をしてもらっ
ている。

まだ、オレの攻撃が当たった事は一度もない。

ブレイド・ブラッカーが言うには随分動きに無駄が無くなったら
しいが、オレにはイマイチ実感が無い。

だって、一度も攻撃が当たらないんだぞ。

スタミナも結構付いてきた。

新しいコンビネーション技も編み出した。

だが、それでも、ブレイド・ブラッカーの前ではことごとく避け
られる。

アルステールの方は、ラムド・ガルの上手い指導もあつてか、徐
々に腕を上げつつあるようだ。初めて会った頃の動きと比べれば雲
泥の差だ。

作戦会議。

「準備は整った。兵の士気も高い。悪王ユーネスの潜むクリスエル
ム方面への侵攻を提案する」

ラムド・ガルのナイスガイな声が響く。

円卓の騎士のように、丸く大きなテーブルにずらりと勢ぞろいする仲間達。

今では、みな將軍みたいなものか。レミユリア以外は。

シエルフィスは女医將軍と呼ばれている。

何でもこじつけて將軍と呼びたがるようだな。ウチの兵は。

「アネさん。ここから近い悪王軍の拠点はあるか？」

ラムド・ガルの提案を受理して、オレはシエルフィスに地図を見もらう。

「アネさんゆーな。……えーと、そうね。確かこの辺にユパナ砦っていうのがあったはずよ。一応、シャドウキラーさんに調べてもらった結果、ウチの戦力より遙かに弱いみたいね。でも、油断は禁物よ。後、距離は604ケザルね。ここから約2日くらいかしら」

地図を眺めて、一同沈黙する。

「何を考えているんだろうか？ いかにも攻めて下さいと言わんばかりだな」

オレは呟く。

「そうだな。しかし、ここを落とさずには先に進めない。もし畏だとしても、進むしか他に方法がない」

ラムド・ガルの意見。

確かにそのとおりだ。

「と、言うことは、次はユパナ砦だな」

三段階伸縮可能な赤い槍を磨きながら、ザムの言葉。

この言葉で、ユパナ砦侵攻が決定した。

*

*

*

クリスエルム城、謁見の間――。

険しい顔つきで玉座に座るユーネス。

禍々しい眼が、更に凶悪になっている。

腰に下げた剣から、異様な雰囲気漂わせる。

「ドマジを焼き払い、シャドウキラーを追撃し、失敗。更にレミュリア暗殺を躊躇っている……か」

ユーネスの恐ろしい眼が光る。

額には血管が浮き上がっている。

「貴様らしくないな。リック・ザキユール」

苛立っている。

「ブレイド・ブラッカー。奴が一番の曲者だ。奴さえ倒せれば、あんな寄せ集めの軍隊なぞすぐに壊滅させられる」

冷静な表情のリック・ザキユール。

「それに、お前こそ、あっさりと裏切られたな。ラムド・ガルだったか……」

「貴様には関係ない」

リック・ザキユールの声を遮るように、ユーネスの声色が高くなる。

「ふん。まだ、こちらには手段がある。そうだな？ エマン・カシユール」

赤い軍服に身を包んだ女将軍、エマン・カシユールがユーネスの前に跪いた。

「はい……お任せを」

ユーネスと同類の邪悪な眼を光らせ、ニヤリと笑う。

*

*

*

まるで、戦意が感じられない。

攻め込んできたとわかった途端、砦を明け渡して逃げていきやがった。

ユパナ砦――。

あつと言つ間に手に入った。

正直、気持ち悪いくらいに。

侵攻を開始して、まだ3日目だった。

ユパナ砦を新たな本拠地にし、更にまた一歩進んだ反乱軍。
この砦は、アテラタス砦より大きい。
それに伴ってか、オレの部屋も広くなった。

その日の夜。

うまい具合に広く、椅子もあり、円卓もある会議室らしい部屋を見つけ、オレ達はそこで作戦会議を行う。

「何か、事がうまく運びすぎて怖いくらいだ」

オレは素直に心境をみんなに打ち明けた。

今回の作戦会議にはティカイナ、ラザ、レザも参加している。本人の要望だ。

アルステールは密かに『何でガンキチの周りには女が集まって来るんだ……』と、洩らしていたらしい。ラムド・ガルから聞いた。
「そうだな。妙に余裕があるというか……。何を考えているのかわからないな」

ルミニオンが呟いた。

「向こうにはエマン・カシユーが付いている。奴は頭がいい。これからは注意して進軍しなければならない。だが、残るユーネスの砦はふたつだ。ここを攻略すれば、残すは王都クリスエルのみ……」
ラムド・ガルの意見。

しかし、エマン・カシユーか……。このナイスガイが言うんだから、マジみたいだな。

「……それじゃアネさん、地図を頼む」

「アネさんゆーな！」

と、ふくれつつも、シエルフィスは地図を広げる。色々と調べてきたのか、地図には何やら赤インクで所々に印を付けている。

「何だ？ アネさんが調べてきたのか？」

「だーかーらー、アネさんゆーな！ 私が調べるワケないでしょ。」

シャドウキラーさんに調べてもらったのよ」

「そうよ私とラザが調べてきたのよ　　後、ティカイナも」

と、言いつつオレの腕にひっついてくるレザ……だよな？　ホク
口が無いから。

レザ、ラザの後ろでティカイナがウインクする。

……リティアといい勝負な発展途上な胸が……。

言っておくが、オレはロリコンじゃないぞ。

ちよつと前に聞いた話だが、レザ、ラザは16歳らしい。そんな
バカな。リティアといい勝負なロリータフェイスなのに。

「ごごごご……、と効果音が聞こえてきそうな殺気が、ビリビリ
と伝わってくる。」

「……」

ギロリ！　と言わんばかりの目でオレを見ているアルステール。

それに気付いたオレは、慌ててひっついていているレザを剥がす。

「そ、それじゃ、アネさん。続きを頼む」

ごまかすようにシエルフィスへ振る。

「……。この周辺には砦がふたつあるわ。ひとつはカダ砦。もうひ
つはメクダ砦ね。しかも、両方とも結構な戦力がある……。軍を
ふたつに分けた方がいいわね」

オレの『アネさん』という呼び方に反応しなくなった。もう、諦
めたわ。みたいな表情で説明するシエルフィス。

「オレ達の今の戦力は？」

オレの問いにルミニオンが答える。

「約16000だな。志願者を募集したところ、約2000ほど増
えた」

ここ最近ルミニオン、ガザロで兵を募集したらしい。どんな方法
でやったかはわからないが、焼き払われたドマジ街から逃げてきた
者も居れば、ガザロのツテで他の山からやって来た山賊も居るよう
だ。

シャドウキラー達の厳選なる目利きで通ってきている者達だから、

スパイである心配は無いらしい。
結構な戦力に膨れ上がった反乱軍。

「ふたつの砦の詳しい戦力はわかるか？」

オレはシエルフィスに聞いてみる。

「そうね、カダ砦の戦力は約10000。メクダ砦は約7000ね」
ここから東に位置するカダ砦はラムド・ガルが言うには、エマン・カシューが守る厄介な砦で、しかも、付近はガングニル谷という切り立った谷が、自然の要塞の如く行く手を阻み、進軍が困難らしい。更に、東南に位置するメクダ砦は四方が森林に囲まれていて、ラムド・ガルの強力な騎馬隊が役に立たない。

それに伴い、進軍する部隊が限られてくる。

「メクダ砦は……。兵が居るっただけで、特に將軍らしい將軍は居ないみたいね……」

シエルフィスの言葉。

「メクダ砦か……。こつちを先に攻略するっても……」

「いや、エマン・カシューの事だ、私達が比較的战力の低いメクダ砦に攻める事は計算済みだろう。進軍した途端に、手薄になった本拠地へ怒濤の如く攻めてくる。しかも、厄介な策を多々ご披露しながらだ。こうなったら勝ち目はない」

ラムド・ガルの意見はもつともだ。

しかし、厄介な策か。一体どんな策を使ってくるんだ？

それがわかれば苦労しないか。

「だったら、玉砕覚悟でカダ砦を先に攻略するってのは？」

オレの提案にシブい顔をするラムド・ガル。

「……ふむ。だが、メクダ砦はどうする？」

「あそこは多分このパターンだと、攻めてこない。そうだな。約、4000くらいここに残しておけば、多分籠城で守りきれれると思う」
「一体、何処から根拠が出てくるんだ？」

呆れ顔で言うルミニオンに、オレは。

「勘だ。オレのゲームの……あわわ、正義の味方のな」

シーン……。

啞然としてオレを見るみんな。

まあ、当たり前だな。

「なあ」

と、一人沈黙を破った者が居た。

「いい事を思いついたぜ」

ザムだ。

「お、そりゃ、一体何だ？」

すかさずオレは聞いてみる。

*

*

*

夜、ザムの部屋――。

ザムはひとり、テラスに立っていた。

その手には、レミュリアに比べるとかなり下手な文字で書かれた手紙を持っている。

それを小さく畳んで、白い鳩の足に付いている小さな筒へ入れる。そして、優しく白い鳩を両手で抱えると、夜の闇の中へ放した。勢い良く飛んで行く白い鳩を見送りながら、ザムは呟いた。

「頼むぜ。お前だけが頼りだ……」

*

*

*

出発は、2日後……。

カダ皆侵攻部隊は、オレ、ラムド・ガル、シエルフィス、ブレイド・ブラッカー、ラザ、レザ、ティカイナ、ガザロと決まった。ルミニオン、ザム、レミュリアは本拠地に残る事となった。

例のいい考えを実行するために、ザムは残ると言いだしたのだ。
ザムの部隊が居ないのは少し苦しいが、ラムド・ガルの騎馬部隊
が居れば、何とかなりそうだ。

それに、ブレイド・ブラッカー達も居るしな。

ガザロもシエルフィスも居る。

後方支援治療部隊のシエルフィスが居れば、多少の怪我は大丈夫
だ。

何も心配することはないんだ。

そう、何も……。

オレにはみんなが付いている。

みんなが付いてるんだ……。

自室のテラスから星を眺めながら、オレは思った。

もう、習慣になってしまっている。

現実の世界ではこんな星はお目に掛かれないからな。

今度の戦いはかつてない激しい戦いになる。と、ラムド・ガルが
言っていた。

ひよつとすると、オレは死ぬかもしれない。

しかし、オレがプレイしたどのゲームでも主人公が途中で居なく
なったまま、エンディングに行くことはない。

死ぬわけがない…… オレが死ぬわけが……。

そう思っていないと、気が変になりそうだ。

しかし、やはり嫌な予感が頭から離れない。

「あまり、考えるのは良くないですよ」

ふと、後ろから声が聞こえた。

振り返ると、そこにはラザが立っていた。……ホクロが……ある

からラザだな。

「な、何だ。見てたのかい」

不思議なことに、ラザが相手だと妙に優しい言葉遣いになってしまふ。

「はい。何か、ひどく思い詰めた顔をしてました」

ラザがオレの手を握る。

「私が、ガンキチさんを守ります。だから、安心してください」

ラザの真剣な表情。

何か、妙に安心する。

「ちよつと、ちよつと！ 私を忘れてない？」

レザが上から降ってきた。

スタツと何事もなかったかのように軽く着地する。

続いて、ティカイナも。

「私も守っちゃうわよ。坊や」

みんな、オレの肩や腕に触れて、元気づけてくれる。

みんなの気持ちが届くほど伝わってくる。

「ありがとう……」

不覚にも、オレは泣きそうになった。

それを何とか悟られないよう堪える。

「拙者も居る事を、忘れてもらっては困る」

いつの間にか、ブレイド・ブラッカーが立っていた。

「貴殿は随分腕が上がった。後は跳躍力と俊敏さを身に付ければ、立派なシャドウキラーだ。それは、この戦いが終わった後の宿題としておく」

オレはあれから、ブレイド・ブラッカーとの特訓を1日と欠かしていない。

こちらに視線を合わせていなくとも、オレをちゃんと見ているブレイド・ブラッカー。この無愛想な態度にも、妙に優しさを感じる。

「ブレちゃん……」

オレが呟くと、

『ぷっ……っ』

後ろに居た3人が、一斉に吹き出した。

「むっ？ 何がおかしい？」

カチンときた表情のブレイド・ブラッカー。

「くくくく……だ、だって、ブレイド・ブラッカー様をブレちゃんだなんて……」

「そ、その、結構、可愛いです……ぷっぷぷ……」

「くつくく……。坊や、いいセンスしてるわ……くつくくくくく……」

3人とも、腹を押さえている。

「そんな事言ってもなあ。ブレイド・ブラッカーなんて名前が長くて言いにくいじゃないか」

オレの説明に、

「ふむ。一理あるな」

ブレイド・ブラッカーは納得したように頷く。

前に聞いた話だが、ブレイド・ブラッカーという名は、姓と名前で分かれているわけではないらしい。

3人が落ちつく、ブレイド・ブラッカーは何かを言おうとして、
「む？」

何かの気配を感じたようだ。

確かに、何かの足音が聞こえる。

コンコン……。

誰かがオレの部屋のドアをノックした。

「どうぞー」

と、オレが言うと、控えめにドアが開いた。
入ってきたのはアルステールだった。

「な、何だ。どうしたんだ？」

オレは一瞬、何処かで覚えのあるパターンだなと思った。

「そ、その……」

アルステールは俯いて言葉を詰まらせる。

「ま、まあ、シャドウキラー達も居ることだし、こっち来いよ」と、オレは何気ない表情を無理矢理つくって誘ってみる。

素直に付いてくるアルステール。

が、しかし。

「あら？ ブレちゃん？」

そう、テラスに居たはずのブレイド・ブラッカーと、3人はいつの間にか姿をくらましていた。

「あ、あの！」

アルステールは意を決したように口を開く。

*

*

*

屋根の上に立っているブレイド・ブラッカーと、レザ、ラザ、テイカイナの3人。

「ブレイド・ブラッカー様ったら、気が利くんですね。私、少し見直しました」

テイカイナが囁く。

「拙者は野暮な事はしたくないだけだ」

腕を組み、無愛想に呟くブレイド・ブラッカー。

「何か、ムカつく……」

不満げなレザ。

「……ふう……」

憂いを帯びた表情で、ため息を付くラザ。

＊

＊

＊

「何だと？ カダ砦攻略に参加したいだ？」

目の前で俯いているアルステールの言葉にオレは耳を疑った。

アルステールにはレミュリアを守るため、ここに残るよう言っていた。

理由は嫌なパターンが頭をよぎったからだ。

「姫様は許しをくれた。ガンキチと一緒に行っていいって……」

「バカッ！」

ビクツと肩をすくめるアルステール。

「レミュリアちゃんは優しいからそんな事を言っただぞ。お前が居なくなったら……」

「でも、シャドウキラーが守ってくれるって……」

アルステールの表情がやや悲しげなものに変わった。

確かにシャドウキラーは強くて頼りになる。

あいつらのおかげで、ここ最近ザキュール暗殺団の襲撃はない。

だが、ここで引くわけにはいかない。

それは何故かって言うと。

「し、シャドウキラーだけでは不安なんだ。護衛のお前が付いていないと……」

ちくしょう、言えねえ……。

言ってもどうせ信用してくれねえ。

スタツと何者かがテラスに着地した。

アルステールも気付いた。

「ちよつと！ シャドウキラーだけでは不安ってなによ。それは私達をバカにしてるの！？」

レザだ。

もう、声と喋り方でわかってきた。

だが念のため確認を忘れない。

ホク口はない。

しかし、こいつ、聞いてたのか？

「ち、違う！ ああもう……、くそっ！ 何で聞いてるんだよ！」
オレはやりきれない思いでいっぱいだっただ。

そう、このパターンは、パターン通りになつて欲しくない。

だから、オレはアルステールにレミリアを守れって言ったのだ。
嫌な予感がある。これはどうしても、オレの頭から拭いきれない。
「おにいさんねえ、カノジョの気持ち、わかってんでしょ？ 一緒
に行けばいいじゃない。それに、危なくなったら守ってあげれば……」

「できないんだよ！ パターン通りだったら……」

オレはレザの言葉を遮った。

はたから見れば、オレはかんしゃくを起こしているガキのように
見えるかもしれない。

言い返そうとしたレザは、オレの表情を見て言葉を飲み込んだ。

「頼む、頼むよ。アルステール。ここに残ってくれ……」

オレはアルステールの肩を掴んで必死に説得する。気付かない
ちに相当接近している。

あつ、まずい……。と、いう表情で顔を赤くし、レザが出てい
たが、オレはそんな事に気を配っている心の余裕はなかった。

肩を掴んでいる手の上に、優しく手が置かれる。

下を向いていたアルステールの目が、オレの顔を捉える。

「ガンキチ、ボクを心配してくれているんだね」

熱い視線。

でも、不思議と今は心臓が暴れない。

「でも、ボクは大丈夫だよ。ラムド・ガル様に鍛えてもらったから」
「くそっ、なんでだよ」

オレはやりきれない思いに身をまかせ、アルステールを抱きしめ
た。

「が、ガンキチ？」

どうしてだ？ R P Gのキャラはどうしてこうなんだ？ 断つて

も食らいついてくる。

選択肢がふたつあるのに、悪い方しか選べない。もうひとつの選択肢は無条件で却下か、悪い方を選ぶまで無限ループだ。

アルステールの背中に回している手に力を込める。

「嫌な予感がするんだ。何か、とても嫌な予感が」

「ガンキチ」

アルステールもオレの背中に手を回し、力を込める。

「何か、良くないことが起こる。これだけはパターン通りになって欲しくない」

オレはアルステールを離すと、真剣な目で訴えかけた。

じっと見つめ返すアルステール。

「今日のガンキチは、ガンキチじゃないみたいだ」

「えっ？」

聞き返すオレに、笑顔のアルステール。

「いつもはぐらかすのに、今日は妙に積極的だし」

「それは」

と、言いかけて言葉に詰まる。

更にアルステールは笑って、

「ニセモノ。じゃ、ないよね？」

「ち、違う。オレという人間は一人しか居ない……」

これはアルステールが言ったセリフ？

可笑しそうに笑うアルステール。

「本物かどうか、確かめさせて」

「えっ」

これはオレが言ったセリフ？

と思った瞬間、オレの首に回される腕。

アルステールの顔が急接近。

オレの唇に、アルステールの唇が。

「……」
「……」

重なる唇。

アルステールから――。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

な、長いっ！

そ、そろそろ息が……。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

「ぷはっ！」

先にギブアップしたのはオレだった。

「勝った」

ふーっと息を吐きながら、アルステールは笑った。

オレ、アルステールと。

キスしたのは初めてじゃないけど。

バク、バク、バク。

な、何でこんなに心臓がバクバクいいやがる！ オレの胸は！
その胸に、アルステールの手が添えられる。

「ガンキチ、ボクは死なないよ。だから、心配しないで」
眩しい笑顔を見せるアルステール。

また、嫌なパターンが頭をよぎる。

「それに、ボクはガンキチと一緒に行きたいんだ。ガンキチと一緒に戦いたい」

「——くそつ。絶対守ってやる。守ってやるからな」

それを振り払うかのように、オレはアルステールの身体を抱きしめた。

「ありがとう、ガンキチ——」

カダ咎。

王族の類の部屋と見間違っほど豪華な部屋。

薄暗く、異様な雰囲気を漂わせている。

ロウソクの火が、何者かを照らす。

赤い軍服、カールした金色の長い髪、細い身体に似合わない邪悪な眼の女性。

エマン・カシューである。

「くつくつく……。この武器さえあれば……反乱軍なぞ……」

エマン・カシューは宝石のちりばめられた、豪華な革製の鞆から何かを取り出し、それを恍惚とした表情で眺めている。

鞆を閉めると、エマン・カシューは立ち上がり、ドアに視線を向ける。

「ソグト、入ってきなさい」

エマン・カシューの一言に、ドアの向こうで待機していたのである。側近らしき男が現れる。

「お呼びですか、エマン・カシュー様」

ピシッと敬礼して、エマン・カシューに注目する。

「例のこの武器の状況は？」

邪悪な視線を、側近へ向ける。

「はい。約6000ほど出来上がっております」

「……6000。まあ、よろしいでしょう。それでは、兵に全て配りなさい。戦いの準備です。反乱軍最後のね……くつくつく……」

「わかりました！ 迅速に兵へ伝えます！」

一礼して部屋を出ていく側近。

エマン・カシューの部屋のドアが、パタンと閉められた。

*

*

*

ついに、この時が来た。

カダ砦侵攻の日。

予定通り、本拠地には4000の兵を残し、残りの12000はカダ砦侵攻軍となった。

本拠地を守るメンバーはザム、レミユリア、ルミニオンとなり、侵攻軍メンバーは、オレ、ラムド・ガル、ガザロ、シエルフィス、ブレイド・ブラッカー、ラザ、レザ、ティカイナだ。

ブレイド・ブラッカーとシャドウキラーの3人は、オレのボディガード兼補佐役。

……。

ひとつ気になることは、アルステール。

仕方なくオレの部隊に入れたが、妙に心配だ。虫の知らせってヤツが、オレの耳の中でガンガンと響いている。

今は一緒に居たいとか、離れたくないとかそんな気持ちじゃない。心配だ。

だが、オレはアルステールを守ると決めた。

そう、守ればいいんだ。

オレの命にかけても。

「いいな！ みんな生きて帰るんだ！ 決して無理をするな！ 以上！」

言葉数は少ないが、オレはレミユリアに代わって演説をした。

これはレミユリアの頼みでもあった。

ガンキチさんが作った反乱軍なのに、一度も演説をしないなんておかしい。という指摘を受けたのだ。

『わああああああっ！！』

やや、笑いが含まれる歓声が起こる。

一応、士気は高まったようだ。

みんな生きて帰るんだ……。オレはその部分を強く頭の中で復唱した。

ついにカダ砦へ向けて、オレ達の反乱軍は進軍を開始する――。

進軍している間も、オレはアルステールの側を離れることはなかった。

その様子を見て、いつもなら茶化してくるはずの仲間達は、ただ見守っているだけで介入はしなかった。

オレ達の様子が、いつもと違ったから、かもしれない。

幻想的な景色と、隣に居るアルステールの顔を眺めながら進軍をして3日が経った。

目の前に広がる切り立った谷。

ガングニル谷――。

底は見える。底無しではないようだ。だが、落下するとただでは済まないだろう。

向こう岸が、やたらと遠く見える。

向こう岸へ渡らなければ、カダ砦には行く事ができない。

だが、オレが見る限り、向こう岸まで100メートルはある。

今、反乱軍はこの谷付近で立ち往生している。

しばらく向こうへ渡る道はないか、シャドウキラーに探させた結果。

「ここから南西へ約40ケザルくらいの所に、谷へ続く道がある。そして、北西へ約50ケザルの所に、向こう岸へ登る道があった」

言い終えると、サツと持ち場へ戻るシャドウキラー。

報告を聞いて、うなるオレ。

ラムド・ガルと、顔を見合わせる。

「困ったな……。わざわざ谷を降りてると、相当な遠回りになってしまう」

「うむ……。谷を迂回すると、メクダ砦の付近を通る事になるから、危険が大きい。ここで無駄に戦闘をして消耗をすると、命取りだ」
「かと言って、北側は切り立った絶壁の岩山が延々と続いているから、移動するのは不可能だ」

そう、北西は絶壁とガングニル谷が重なって迂回は不可能だ。もし迂回するならロッククライマーにでもならなければいけない。

更に、南西はメクダ砦に限りなく近付いてしまったため、戦闘は避けられない。

今、戦闘をして消耗すると、エマン・カシューの思いつぽになってしまう。

思わぬ足止めをくらってしまった。

1時間くらい付近で検討をしていた時。

「敵襲ーッー!!」

兵の声に、オレとラムド・ガルは同時に振り向いた。
突然の奇襲に兵が慌てる。

「落ちつけ！ 慌てずに応戦するのだ!!」

ラムド・ガルの騎馬隊が動く。

「敵は!？」

「エマン・カシューの本隊です!!」

報告に来た兵が答える。

何だと？

エマン・カシューはカダ砦に居るはずでは。
玉砕覚悟で出てきたというのか!？

後方から矢が雨あられのように飛んでくる。
後方にはシエルフィスの部隊が居る。

シエルフェイスが危ない！！

「くそっ！！ アネさん！！」

ガザ口の部隊は果敢にもエマン・カシューの本隊へ突撃する。
が、しかし、雨あられのように飛んでくる矢に苦戦を強いられて
いる。

「野郎！ 奴らは弓の名手か！？」

矢が普通では考えられないテンポで飛んでくる。

弓に矢をかけ、弦を引いて飛ばす。この動作があるかぎり、ここ
までのテンポで矢は飛ばせないはずだ。

まるで連発銃のように飛んでくる矢。

「くそっ！ 怯むな！ ぶっ殺すんだ！！」

負傷兵が続出する中、ガザ口は突っ込んでいく――。

「ララミル……。父ちゃん、帰れねえかもしれねえ……」

白馬の死骸、白い鎧を着た兵の死体。

被害を受けながらも、ラムド・ガルの騎馬隊は突撃を敢行する。

「くっ……このままではまずい」

*

*

*

「ほほほほっ！ バカな奴らねえ……」

高笑いをするエマン・カシュー。

そして、兵にサツと指示をする。

矢を打ち終わった兵と入れ代わり、矢を充填した兵が前に出る。
その兵が持っている弓……。いや、武器は……。

「何だ？ あの武器は！？」

驚愕するラムド・ガル。

エマン・カシューの兵が持っている武器……。それは、巨大なボウ

ガンだった。

銃身がまるでロケットランチャーを思わせる大きさ。しかも、兵の動作を見ていると銃身の横に付いているレバー弦を引くだけで矢が装填される仕組みになっているようだ。

これなら、連射も可能だ。

何て厄介な物を……。

次々と倒れていく反乱軍の兵。

くそっ……。まんまと引つかかったというワケか……。

「退路を断たれました！！ このままでは……」

「くそっ！！ 谷に降りるぞ！！ 一旦、体勢を立て直す！！」

部隊に指示を出し、後退する。

まるで、谷へ追いやられるように――。

「ここは任せろ！！ 私が何としても食い止める！！」

ラムド・ガルの騎馬隊が強力な攻撃を仕掛ける。多少の被害を与えてはいるが、やはり劣勢はまぬがれない。

「ぐっ！！」

左肩の鎧に、矢が突きたてられた。

顔をしかめるラムド・ガル。

すまねえ……ラムド・ガル……。

何とか、部隊は谷へ後退できた。

しかし、消耗が激しい。

後退はできたが、退却はもはや不可能と言ってもいいだろう。

退路を断たれた今、オレ達は進むしかない。

しかし。

「ぐわああっ!!」

「うわああっ!!」

矢が次々と兵達に命中していく。

オレのすぐ近くで歩いていた兵が、肉塊と化していく――。

「上だッ!!」

そう。上にもエマン・カシユーの伏兵が居た。

オレ達の居る下方へ向け、あの巨大ボウガンを撃ってくる。

「ぐうつ!!」

オレの腹に矢が突き刺さった。

激痛。そして、ひびの入った鎧。オレは刺さった矢を見た。木ではなく鋼鉄製の矢だった。そしてこの貫通力、これでは鎧を着ている意味がない。

オレは地面に膝を突いた。

「ガンキチッ!!」

アルステールが叫ぶ。

「……これまでか……」。

更に飛んでくる矢の雨。

ちくしょう……。アルステール……。

「はあ……はあ……。アルステール……。守ってやれなくてすまん……」

じわじわと血がにじんでいく感覚。

「ガンキチッ！！　しつかりしろ！！」

アルステールがオレの腕を肩にかけ、抱えようとする。

周囲には、オレのために盾となった兵が立ちはだかっている。

その兵の身体にも、矢が次々と刺さり、地面に崩れ落ちる。

ブレイド・ブラッカーが飛んでくる矢を叩き落とし、ラザ、レザが逆手持ちにした短剣で飛んでくる矢を防いでいる。

「くっ！　不覚……」

ブレイド・ブラッカーの脚に何本かの矢が刺さった。

膝を突くブレイド・ブラッカー。

「ブレイド・ブラッカー様！！」

その前に立ち、必死に刀のような剣を振るうティカイナ。

更に飛んでくる矢の雨。

その何本かが、オレに致命傷を与える軌道を描いた。

はは……。あっけなく終わったな……。

オレの人生――。

痛みは……。無い。

本当に死ぬときは、痛みなど感じないもの……。どこかの誰かが言っていたような気がするが……。オレは目を開けて見たその光景に戦慄が走った。

「アルステールッ！！」

オレの前に立ちただかり、矢の雨をその身に浴びてしまった。

胸、腹、脚、腕。次々と刺さっていく矢。

アルステールの身体に。多少の筋肉は付いているものの華奢なあの身体に――。

その姿は神々しくも儚い。

オレが他の女とふざけていると、殺気をみなぎらせていたアルステール。

オレには可愛い笑顔を見せたアルステール。

初めて仮面を取ったアルステール。

全てが、走馬灯のように映し出される。

アルステールが……。

嫌なパターンが。

パターン通りに。

「ちくしょおおっ!!」

オレは腹の痛みも忘れ、崩れ落ちるアルステールの身体を受け止めた。

口の中が血の味でいっぱいだ。

多分、気管が食道から逆流してきたんだろう。

いや、今はそんなことどうでもいい――。

オレ、守るって言ったのに。

絶対守るって言ったのに。

命かけても守るって決めたのに。

「うぐ……。……ガンキチ……。大丈夫……。……か?」

「くそおおっ!! オレは死なねえっ!! 死なねえようにできてるんだよ!!」

ゴホツと口から血を飛ばしながらも、オレは吠えた。

「ガンキチ……。うう……。血が……」

オレの口許を指でなぞり、血をぬぐう。

「お前の方がいっぱい出てるんだよ!! ちくしょう!!」

守られてるのは……オレの方じゃねえか！

シャドウキラー達が一斉に煙玉を地面に叩きつける。

濃い煙が辺りを包み、あつと言う間に視界を遮られた。それでも矢の雨は止まらない。

「来いッ！！」

誰かがオレの手を引く。

ブレイド・ブラッカード。

矢の刺さった脚にも関わらず、オレを抱え、矢の雨の中を全速力で走る。

「あ、アルステールが……こほっ」

真っ赤な血がブレイド・ブラッカードの顔付近にかかる。さっきより量が多い。

「喋るな！ 大丈夫だ！」

少し後ろを、ティカイナがアルステールを抱えて付いてきている。オレは、アルステールの事しか頭に無かった。

今は自分のことなど、二の次だ。アルステール、アルステールのことだけが――。

大丈夫なのか？ アルステールは死なないのか？

徐々に目の前が暗くなっていく……。

その時だった。

『わあああああつ！！』

新手の軍が来た。

しかも、数が多い。

「くそっ！！ 終わるか……。ユースめ……」

エマン・カシューの兵を一太刀で斬り捨て、ラムド・ガルは呟い

た。

表情に絶望の色が浮かぶ。

「ララミル……。父ちゃんを許してくれ……」

自慢の大剣を振るい、矢の尽きたエマン・カシユー兵を叩き斬るガザロ。

「ああもう……。カレシも作ってないのに……。仕方ないわね。これでも運命かしら」

負傷兵を手当てしながら、シエルフィスは呟いた。

「ふふん……。メクダ砦の軍勢が加勢に来たわね。……この戦、もらったわよ。ほほほほ……！」

勝利を確信したエマン・カシユー。

しかし、それは次に起こる出来事によって打ち消される。

『わあああああつー!!』

「な、何!? どうして……」

メクダ砦から来たらしい軍勢は、何故かエマン・カシユーの兵に攻撃を仕掛けたのだ。

思わぬ攻撃に、エマン・カシユーの兵が怯みはじめる。

「どうして味方を攻撃するのよ!? 伝令! 伝令をー!!」

必死に応戦するエマン・カシユー軍。

しかし、反乱軍の抵抗で消耗した軍勢は、新たに攻撃を仕掛けてきた軍勢に対応できるほど余力がなかった。

「矢を! 矢を射るのよー!!」

指示をするエマン・カシユー。

しかし、矢に最初のような勢いは無かった。

「どうしたの！？ 何故、矢を……」

「ダメです！ 弦が切れました！」

「そ、そんな……」

弦の切れたボウガンを見せながら、兵は焦った表情で言う。しかし、もっと焦っているのはエマン・カシユーだ。

普通の弓のパーツを流用したこの巨大なボウガン。

改造はしているものの、所詮は弓の弦。通常の3倍以上のペースで矢を発射する負荷に耐えきれなくなったのだ。

矢が使えなくなったエマン・カシユー軍は空が飛べなくなった鳥に等しい。

「伝令！ 伝令はまだなの！？」

金切り声を上げるエマン・カシユー。冷静さを完全に失っている。

「ぐわッ！！」

「うがあっ！！」

エマン・カシユーの周囲に居た兵が、斬り捨てられた。

あっと言う間に反乱軍から包囲されるエマン・カシユー。

彼女の前に、何者かが現れる。

「年貢の収め時だな。エマン・カシユー。無駄だぜ。メクダの兵は全員寝返った」

それは、今本拠地に居るはずのザムだった。

「き、貴様！ 裏切り者のザム！！」

エマン・カシユーの眼が剥かれる。

「どっちが悪い人間かわからねえ奴にんな事言われたくねえよ」
フン、と鼻で笑うザム。

「何故だ！！ 何故、メクダの兵が……」

ブルブルと震えながら、エマン・カシユーは叫んだ。

「教えてやろうか。メクダの兵はな、元々アテラタスに居た兵なん

だよ。つまり、俺の味方。そうだな。ユーネスの野郎が俺から兵を奪わなかったら、こんな事にはならなかっただろうな」

ニヤリと笑うザム。更に続ける。

「俺が行くから、用意しとけ」って書いた手紙を出して、後は途中で合流した……そのくらいだな」

「くっ……」

エマン・カシューはギリツと歯を噛む。

その仕種を見て、ザムは笑顔になる。

「ユーネスの野郎は、余程人徳が無いんだろうな」

「黙れ……！」

キツと睨むエマン・カシュー。

「色々好き勝手やっていた罰だな。はっはっは」

「黙れ！ 黙れ……！」

「ま、話はここまでだ。で、どうするんだ？ 仲間になんのか？

それとも……」

笑顔のままのザムに、エマン・カシューの邪悪な双眸が険しくなる。

「貴様らの仲間になるだ……？ この私が貴様らのような下賤な輩の仲間になるだ？ フフフ……ハハハハッ！！ 笑わせる

……！」

腰に下げていた剣を抜く。

そして、何の躊躇いもなく、自分の首に切っ先をあてがう。

「何を……！」

「私の事を、身体の隅々まで理解してくださるのはユーネス様だけ

……。貴様らに捕らえられるくらいなら……」

ザムはそれを阻止しようと手を伸ばす、が。

真っ赤な鮮血がザムの顔に飛び散る。

エマン・カシューはニヤリと邪悪な笑みを残し、崩れ落ちる。

「……」

既に、こと切れていた。

*

*

*

「何だ！？ エマン・カシューの兵が、退いていく……」

ブレイド・ブラツカーは、頑吉を抱えたまま立ち止まった。

頑吉は既に意識を失っていた。

「とにかく、治療を！！ 早くシエルフィス女医の元へ……！」

ラザ、レザがブレイド・ブラツカー、ティカイナの手から頑吉、アルステールをひたくり全速力で走っていく。

「死んじゃダメ！ 死なないで……。おにいさん……」

「死なせない！ ガンキチさんのためにも……」

一体、あれから何時間？ 何日？ どのくらいの時が過ぎたのだろうか……。

暗闇の中で、何度も嫌なシーンがリピートされる。

守る。

守ってやる。

アルステール。

あの笑顔。

あの匂い。

絶対に守る……。

だけど肝心な時に動いてくれない身体。そして、為す術もなく俺に向けられた嫌なシナリオを華奢な身体で代わりに浴びる。

ちくしょう！ 守るって決めたのに！！

『アルステールッ！！』

「ぐっ！ あっ！？ いててて……」

オレはガバツと起き上がった。

その途端、腹部に激痛が走る。

「あっ！ ダメよ動いちゃ！」

ぼやける視界から、何者かの声が聞こえてくる。

そして、再び身体を布団に戻された。

徐々に、視界がはつきりしてくる。

目の前で、心配そうに覗き込んでいるシエルフィス。

「……よかったわ。目が覚めて。もう少し遅かったらどうなったた
事か……」

よく見ると、周囲にはオレの仲間全員が見守っていた

ガザロ、ラムド・ガル、ブレイド・ブラッカーは手足や頭に包帯を巻いている。

戦いで負傷したのだろう。

「よかったぁ……。ガンキチお兄ちゃん。よかったよぉ……。4日も眠ったままだったんだからぁ……」

オレの腕にしがみつき、号泣するリティア。

オレ……。4日も寝てたのか。

リティアの頭を撫でながら、オレは誰に言うのでもなく聞いてみた。

「オレ達……。勝ったのか？」

すると、ザムが前に出てきて、

「ああ、俺のいい考えのおかげで、どうにかな」

何となく、ザムの表情が暗い。そう感じたのはオレの気のせいだろうか？

「そうか……」

「ここは、カダ砦だ。ついでに、メクダ砦も占領したぞ」

「えっ？ マジか？」

「ああ、マジだ。俺のいい考えのおかげでな」

「そうか……」

生返事を繰り返すオレ。実感が無いせいもあるが、何か頭に引かかる事があった。

『ガンキチ……。うう……』

——っ！！

全てを思い出したその瞬間。

「あ、アルステール！！ アルステールは！？」

オレは激痛をこらえつつ起き上がった。

「が、ガンキチちゃん！ ダメよ起きちゃー！」

慌てて止めようとするシエルフィスの腕をオレは掴んだ。

「アネさん！ アルステールは大丈夫なのか！？」

オレはシエルフィスをジッと見つめ、問う。

だが、シエルフィスは目をそらした。

悲しげな表情で。

オレの頭に衝撃が走る。

「どうなんだよ！！ 何で答えないんだ！！」

シエルフィスは答えない。

レザが車椅子を持ってきた。

「おにいさん。カノジョの所に行きたいんでしょう？ 連れてってあげる……。いいでしょ？ シエルフィス先生」

「……ええ」

チラッとレザを見て返事をする、シエルフィスは部屋を出ていった。

レザ、ラザに抱えられ、車椅子に乘せられるオレ。

オレは一刻も早くアルステールの安否を知りたくて仕方が無かった。

ゆっくりと、レザが車椅子を押す。

ノロい車椅子。

早くアルステールに会いたい。

早く元気なところを見たい。

しばらくはベッドに寝ていることとなるうとも、元氣になれば問題はない。

アルステールが寝ているだろう部屋の前に来た。

このドアを開ければ、『ガンキチ？』と、いつ具合に呼ばれるんだ。そう、あいつが死ぬはずがない。

あいつは、自分で『ボクは死なないよ』と言ってたじゃないか。

約束は守ってもらわなきゃ困る。
約束は……。

真っ青な顔。

ベッドに寝ているその人物の顔。

アルステール。

ヒトが入って来たのに、反応くらいしろよ。

何で、目を閉じてるんだよ。

寝てるのか？ はは、太い神経してやがる。

そうだろ？ 寝てるんだろ？

「おい、起きろよアルステール……」

オレは車椅子から落ちるように降りて、アルステールが寝ている
ベッドまで無我夢中で這う。

腹の痛みなんぞ、関係ない。

近くで見るアルステールの顔は、更に真っ青だった。

オレの目から涙が溢れ出た――。

「おい、冗談はよせよ。はは、オレはこういう冗談は嫌いなんだよ」
オレはアルステールの無傷の顔に触る。

温かい。生きている。

まだ、生きている。

「ああ……。生きてた。良かった……」

アルステールの胸は、微かに上下していた。

オレは心の底から安堵した。

「ガンキチちゃん……。少し、話があるの……」

いつの間にか、シエルフィスがオレの横に立っていた。

少し、冷静さを取り戻したオレは、

「……わかった、アネさん」

と、返事をする。

しかし、立ち上がろうとして腹部に激痛が走り、再びうずくまってしまう。

ラザ、レザの手助けにより車椅子に乘せられ、オレが乘せられた車椅子を、シエルフィスが押す。

そして、そのまま部屋を出た所で、

「ガンキチちゃん……。実は……」

シエルフィスは後ろで小さな声で呟いた。

その言葉に、オレはまた嫌な予感がした。

「何だよ。その先を早く言えよ」

オレは後ろを振り返り、シエルフィスの眼を見つめ、言った。

「……」

「何だよ……」

シエルフィスは、オレを見つめたまま黙っている。

しばらくにらみ合いが続いた後、意を決したようにシエルフィスが口を開いた。

「アルステールは……。もう、長くはもたないわ――」

泣きそうな声で、シエルフィスが呟いた。

オレはその言葉を聞いた瞬間、

全てが聞こえなくなった。

ざわざわ――。

その音だけが、耳の中に鳴り響いている。

ざわざわ――。

「じよ、冗談だろ？」

「……」

「なあ、冗談だと言ってくれよ！」

「……」

「何だよ、まだ生きてるじゃないか！」

「全ての手は尽くしたわ……。でも……」

「治るんだろ？ アネさんの薬は最強だからな。元気になるんだろ！？」

「……」

「なんで……。なんでだよ——」

オレの眼から、引つ込んだはずの涙が溢れ出た——。

「……運ばれてきたアルステールを見た時、正直言って何処へ手を付けていいのかわからなかった……。それだけ、ひどい傷だったの……」

それだけ言っで、シエルフィスは目を伏せた。

「——くそっ」

オレは悔しさのあまり、それ以上の言葉は出てこなかった。
死ぬ。

アルステールが、死ぬ。

何で、こんなパターン通りになっちまうんだよ。

「私だけの力じゃないわね……。本人の精神力も関係してる……。多分、ガンキチちゃん。キミよ」

「……オレ……？」

「そう、キミに対する想いが、彼女の生命を辛うじて維持させている。としか思えない」

「オレ……なのか？ アイツ、オレのために……？」

シエルフィスは目尻を指で拭いながら、オレの肩に手を置く。

「……傍に居てあげなさい。少しでも彼女の命を延ばすためにも」
「……」

オレは袖でゴシゴシと涙を拭くと、

「……わかった」

と、答えた——。

*

*

*

クリスエルム城、謁見の間。

エマン・カシユーが敗れた事を、近衛兵から報告されたユーネス。その顔は、一層凶悪になっている。

「そうか、エマン・カシユーは死んだか……」

動じることなく、ユーネスは高らかに笑う。

この反応は、もはや尋常ではない。

「万策尽きたな」

側に居たリック・ザキユールが冷静に呟く。

「策？ 策だと？ ふふふふ……そんな物、あんなカスどもには必要ない。エマン・カシユー。奴は策に溺れた。その結果がこれだ」
クツクツクと笑うユーネス。

「ふつ……。相変わらず面白い男だ、お前は」
長い前髪をかきあげながら、リック・ザキユールは同じように笑った。

気味の悪い声が、謁見の間に響いていった。

*

*

*

1日――。

アルステールは目を覚まさないまま、また1日、1日と時間は過ぎていった。

オレの腹の傷は、完全にはいかないがそこそこの良くなり、徐々にだが特訓をできるようになった。

しかしブレイド・ブラッカーとの特訓の最中、アルステールの事はかり頭に浮かんで、全く身に入らなくて、頭を冷やしてこいと言われる始末。

朝、昼、晩とアルステールの側で、寝顔を見て、顔や手を触る。

毎日が、この調子だった。

たまにレミュリアもアルステールを見に来るが、変わり果てたあいつを見て、泣きじゃくる始末。

……。

……ちくしょう。

あれから、約10日が過ぎた頃か。

オレは、いつものように、アルステールの寝ている部屋へ入る。

「あ……。ガンキチ……」

オレは耳を疑った。

久しぶりに聞く声。

聞きたかった声。

「アルステール！？ 目が覚めたのか!？」

と、駆け寄ろうとしたオレを、シエルフィスが止め、耳打ちする。

「無理をさせちゃダメ……。命を縮めるから……」

「……わかった」

オレは冷静さを取り戻すと、

「あ、アルステール。オレは元気だ。お、お前も元気になれよ」

ちくしょう……。何でこうぎこちなくなっちまうんだ。

アルステールは無理して笑顔を作る。

「はは……。……そうだね。……ガンキチと……。また、デートするって……。約束したしね……」

力ないアルステールの言葉……。

何でそんな事覚えてるんだよ。

「何て顔してるんだよ……。……大丈夫……。ボクは、死なない……から……」

絶対に無理をしている。

オレに心配かけまいと、必死に作っている。
アルステールの手を優しく握った。

「あったかい……。ガンキチの手……」
そういうお前の手は、冷たいじゃねえか。
くそ……。言葉が出てこねえ……。

ただ、ジッとアルステールの目を見ている事しかできねえ……。
「……………」

「ガンキチ……。頼みがあるんだ……」

「何だ？ 言ってみろ」

「一刻も早く……。姫様に平和を……。クリスエルムに平和を……。
ユーネスを止めて……。欲しい……」

こんな状況になっても、こいつはレミユリアの事、王国の事を考
えている。

もう、オレには返事をするしかなかった。

「わかった。安心しろ。オレがカタを付けてやる」

アルステールはニツコリと笑う。

そして、目を閉じた。

「……アルステール？」

「……少し、眠くなつてきちゃった……」

おい、アルステール！？ と、揺すりそつになつたオレを、シェ
ルフィスが止めた。

「今日はこの辺にしよう……。無理をさせると危険だわ……。彼
女、気付いてから、ガンキチちゃんが来るまで、ずっと目を開けて
たから……」

「……わかった……」

アルステールの寝顔を見ると、オレはシェルフィスの言う通りに
部屋を後にした。

作戦会議室。

オレはアルステールの願いを叶えるべく、急遽仲間を集め、作戦会議を開いた。

そう。全てを終わらすために。

アテラタス、ユパナ、カダ、メクダ。この四つの砦を押さえた事により、ユーネスの勢力は弱体化した。

残るは、ユーネスの潜む王都クリスエルム。

これを攻略すれば、全てが終わる。

「クリスエルム攻略作戦を提案する」

誰も、オレの言葉に異論を唱える者は居なかった。
みんな、わかってるんだ。

ユーネスを倒せば、全てが終わる。
全てが、終わる――。

*

*

*

翌朝。

中庭に、やや数が減ったものの全軍が集結する。

そして、おそらく最後になるであろう演説を行う。

「ついに、この時が来ました……。変わり果てたユーネスを倒し、悪政を止め、クリスエルムに輝かしい未来を切り開くため……。みなさんの力を貸してください！」

『わあああああつ!!』

かつてないほどの士気の上がり様だ。
演説を終え、ステージからレミュリアが下りる。
入れ代わりに、今度はオレがステージへ上がった。
最後の、演説――。
オレの、この世界での――。

「みんな、最後の戦いだ。だが、決して無理をするな！ 最後は、みんな笑って帰ってくるんだ!! 以上!!」

『わあああああああつ!!』

凄まじい反響だ。

……。

みんな、わかってるんだな……。

最後の戦いつて事が……。

*

*

*

アルステールの寝ている部屋――。

ゆつくりとドアを開け、入ってくるオレにあいつは気付いた。
日を追うごとに、アルステールの顔色が悪くなってくる。

だが、オレの前では無理をして笑顔を作っている。

「それじゃ、行ってくるぜ。片付けにな」

笑顔で、なるべく笑顔でオレは言った。

今のオレには、これが精一杯だった。

「……気をつけて……。後、約束して……。絶対、生きて帰ってくるって……」

弱々しく、布団から手を出してくるアルステール。

オレはその手を優しく握った。

動くだけでも苦しいだろうに、アルステールは気丈にもそれをこらえている。

「ああ。帰ってくる。オレは約束は破らん」

「絶対……だよ。破ったら、ボク、泣くから……」

「なんか、妙に素直だな。お前、二セモノだろう？」

「……気になるんなら……。確かめてみれば……？」

ジッとオレを見つめるアルステール。

顔を近付けてみる。

そっと、アルステールは目を閉じた。

オレは、優しく唇を重ねる。

「……」

「……」

そっと唇を離した。

「……なんか、元気が……出てくるよ……」

微笑むアルステール。

その顔を見ると、いつの間にかオレの目から涙が溢れ出ていた

「バカ。言ってる事と、様子が矛盾してるじゃないか」

「あはは……。ガンキチが優しい……。ずっと……。ここで寝てようかな……」

「それじゃ、デートできないぞ」

「あ、そうか……」

「いいか？ オレが帰ってきたらデートするんだ。これは、オレからの約束だ。破ったら泣くぞ」

「……はは……。もう、泣いてるじゃん……」

オレはゴシゴシと袖で目をこする。

「こ、これは汗だ。オレの汗は目から出てくるんだ」

「……へえ……。変わってる……」

笑ったまま、アルステールは弱々しく言った。

「と、とにかく。行ってくる。約束を破るんじゃないぞ」

「……うん、わかった……。ガンキチ……。死なないで……」

「オレは死ねない身体なんだ。心配するな」

涙目で必死に笑顔を作り、オレは静かに部屋を後にした。

ちくしょう——終わらせてやる——！

何が何でも終わらせてやる——！

それまで——アルステール、約束を破るんじゃないぞ——。

*

*

*

予想以上に早く、王都クリスエルムの前に到着した。

ここまで、約1日と半日。

パターン通りに、最後の抵抗を仕掛けてくるユース軍。

しかし、ただ突っ込んでくるだけの実に頭の悪い部隊だったため、ルミニオン率いる弓兵隊の餌食となった。

シャドウキラーの報告によると、この部隊を指揮している者は、クラザート・トライドという武将らしい。

数でも、頭脳でも上回る反乱軍には、こんな部隊など敵ではなかった。

あつと言つ間に蹴散らしていき、クラザート・トライドひとりを追い詰める。

果敢にも、大男クラザート・トライドはその剛腕で挑んでくるが、この人数を相手に勝てるはずもなく、ましてや、オレはブレイド・ブラッカーに鍛えられている。

ブレイド・ブラッカーに教えられたとおりオレは様々な攻撃を繰り出し、クラザート・トライドに命中させていく。

そして、手負いとなったクラザート・トライドは、地面に片膝を

突いた。

ガザロ、ルミノオン、ラムド・ガル、ブレイド・ブロッカー、ラザ、レザ、ティカイナが、大男クラザート・トライドに詰め寄る。

「何か、言いたいことはあるか？」

ラムド・ガルが剣を突きつける。

それに答えるかのようにギロリと、血走った目を光らせるクラザート・トライド。

「貴様らを、道連れにしてくれる……」

恐ろしく低い声で呟いた。

「！！」

「ユーネス様に逆らう愚か者どもめが！！ あの時へ行つて後悔するがいい！！」

クラザート・トライドは懷に手を入れた。

何か、隠し持っている！？

それを真先に気付いたのは、ブレイド・ブロッカーだった。

「まずい！！ 離れる！！」

この一言に、みんな一斉に後ろへ飛んだ。

ニヤリと、大男クラザート・トライドは笑ったかと思うと、その瞬間。

鼓膜を突き破るような轟音とともに、その身体が爆発した。

全速力で逃げていたオレの足が、爆風にあおられ宙に浮く。

「うぐっ！！」

辛うじて、直撃はまぬがれたものの、爆風に吹っ飛ばされてオレは背中をしたたか地面に打ちつけた。一瞬息ができないほどの衝撃だった。

舌を少し噛んだようだ。血の味がする。

「あたたた……。パターン通りだが自爆するとは……。みんな、大丈夫か！？」

オレは背中をさすりながら起き上がり、辺りを見回す。

幸いな事に、被害は少ないようだ。

「私とラザ、ティカイナは大丈夫よ」

「拙者も大丈夫だ」

レザ、ラザ、ティカイナ、ブレイド・ブラッカーは無事のようだ。
「俺も大丈夫だ……。ちと、擦りむいたけど」

ルミニオンも無事か。

「私は大丈夫だ。……しかし、ガザロ殿が……」

ラムド・ガルも無事のようだが……。

オレは地面にうずくまっているガザロに駆け寄る。

「おやっさん！？ 大丈夫か！？」

ガザロは足を押さえながら、痛みを堪えている。

その顔に脂汗が浮かんでいる。

「ぐ……。どうも、足をやられたみたいだ……」

ガザロの右足が、変な方向に曲がっている。

これは完璧に折れてるな。

まずい。シエルフィスは本拠地に居る。

戻っているヒマはない。オレには時間がない。

「おやっさんは、俺が連れて帰る」

ルミニオンがガザロの腕を自分の肩に回し、言った。

「いいのか？ ルミニオン」

オレの言葉に、ルミニオンはニヤリと笑う。

「いいんだ。どちらにしろ、俺は城の中では足手まといになりかねないからな。これくらいの役目は果たすさ」

「いててててっ！！ いてっ！！ コラッ！ もう少し優しく扱え！！ こっちは怪我人なんだぞ！」

ルミニオンに肩を借りたガザロが苦情をもらす。

「これくらい我慢してくれ。帰ったらシエルフィスがどうにかしてくれるさ」

やれやれと呆れ顔のルミニオン。

「すまん。ガンキチ。俺はここでリタイアだ」

腕の力で馬に乗りながら、ガザロは心底すまなそうに呟いた。

「気にすんな。おやつさんの分も天誅を食らわしとく」

「頼む……」

ガザロは、ルミニオンと一緒に馬に乗り、数十人の兵と共に本拠地へと戻っていった。

「さて……。気を取り直して、行くか」

オレは改めて、クリスエルム城を見据えた――。

城下町の民家の扉――。

どの民家も、店も、扉は固く閉ざされていた。人の気配はするが、出てくる様子はない。

まるで、ゴーストタウン。これもユーネスのせいなのか。

外見だけは、でかく、神々しく、幻想的な城。

クリスエルム城。

この中にユーネスが居ると思うと、妙に禍々しく思えてくる。

オレは拳をグッと握る。

ついに、最後だ――。

ラストダンジョンだ――。

オレ達は、門の開いたクリスエルム城に踏み込んでいった――。

大理石の壁、自分の姿が映るほどピカピカの床。
迷路のような廊下。

そして、一步進む度に近くなる恐ろしい気配――。

城の構造をある程度理解しているラムド・ガルが居たおかげで、
道に迷う事もなく、オレ達は順調に、確実にユーネスの元へ近付いている。

約2時間ほど歩いたか、オレ達は大きな扉の前にたどり着いた。
奥から、恐ろしいプレッシャーがビリビリと伝わってくる。

「ここが、謁見の間だ……。多分、ユーネスはこの先に居る」
ラムド・ガルの顔が険しくなっているのがわかる。

この先にユーネスが――。

諸悪の根源が――。

アルステール――オレはやるぜ。

「みんな、準備はいいか？」

オレの確認に、全員が頷いた。

でかい扉を勢い良く蹴り開け、中に躍り込むオレ達。

「ユーネス――！ 覚悟しやがれ――！」

腰の剣を素早く抜き、正眼に構える。

みんな、一斉に戦闘態勢に入った。

廊下より綺麗な大理石の壁、鏡のようにピカピカな床。

左右均等に同じ本数立ち並んでいる荘厳な柱。

その間には赤い豪華な絨毯が敷かれ、それは5段ほど上に位置する玉座へと繋がっている。

玉座に、そいつは座っていた――。

下を向いていた顔を、ゆつくりと上げる。

その顔は、見た目二十代前半くらいか、薄化粧でキリツとした顔立ち、それに釣り合う高い鼻。

王族だけあって、高貴な雰囲気を漂わせる。

しかし、その眼光を見た瞬間、人間を見ている気がしなくなった。恐ろしく禍々しい眼。

プレッシャーが、ビリビリと伝わってくる。

こいつが――ユーネス。

「全く――礼儀がなっていない連中だ」

ゆつくりと、口を開くユーネス。

妙に耳に響く声。

オレには、聞いているだけで耳障りだ。

「圧政を繰り広げ、民を苦しめ、レミユリアちゃんを殺そうとした。王族の風上にも置けない奴！ 悪王ユーネス！！ 成敗してくれる――！！」

オレは大声で叫び、ユーネスを睨み付けた。

しかし、ユーネスはクツクツと笑い飛ばす。

「何だ？ 何がおかしい!?」

「レミユリアちゃん――か。何処の誰か存じぬが、吐き気がするほどお人好しなヤツだな――。それに」

ユーネスは恐ろしい眼でラムド・ガルを睨む。

「久しぶりだな――。ラムド・ガル。予想通り裏切ってくれて、礼を言うよ――」

凄味の効いた声。

縮み上がりそうな声だ。

しかし、ラムド・ガルは動じることなく。

「殿下——。お覚悟を」

と、言い放った。

ユーネスの眼が剥かれる。

「最後まで、腹の立つヤツだよ。お前は——」

額に血管を浮き上がらせ、ユーネスは腰の剣を抜いた。

剣から紫色のオーラが吹き出ている。

呪いの剣か？ それとも——。

「ここに来たことが、貴様らの運のツキだな——ふはははははっ！
！」

ユーネスは背筋が凍るような笑い声を上げながら、指をパチンと鳴らした。

その瞬間、

足元が揺れはじめた。

地震だ！

「な、何だ！？」

その場に居る仲間全員が、バランスを崩しかける。

「後、半時もすれば、この城は炎に包まれる——。貴様らの丸焼きが目に浮かぶ——ふははははははっ——！」

高笑いをして、肩に付けたマントを投げ捨てるユーネス。

炎に包まれる！？

燃えているのか！？

まさか、こいつ、最初からこのつもりで——！

外から、逃げまどう反乱兵の叫び声が聞こえてくる。

「狂ってるわ——」

レザが短剣を抜いて、呟いた。

「これで、貴様らが万が一俺を殺せたとしても、逃げ道は無くなったということだ！——そうだな、もう一つ決定的な絶望を与えてやろうか」

また、ユースは指をパチンと鳴らした。

いくつもの黒い人影がユースの周囲に現れ、全員揃ったところでピタッと制止する。

シャドウキラーとはタイプの違う、ボディースーツのような黒装束。

忘れもしない。こいつらはザキュール暗殺団。

集団の先頭に、リーダーらしき男が立っている。

黒く、長い髪。その髪のおかげで眼が隠れていて見えない。

だが、凄まじいまでの殺気を放出している。

ビリビリと痛いほど伝わってくる。

更に、鼻の十字傷、紫色の唇が、細い身体にも関わらず、恐ろしい雰囲気漂わせる。

こいつは——強い。

「リック・ザキュール——！」

ブレイド・ブラッカーはそいつを見て顔色が変わった。

いつも冷静沈着なブレイド・ブラッカーが取り乱している。

レザ、ラザ、ティカイナも顔色が変わっている。

「久しぶりだな——。ブレイド・ブラッカー。まさか、そんな奴らとつるんでいるとはな」

リック・ザキユールと言われた長い黒髪の男が口を開いた。
その声は、小さいながらも畏怖を感じる。

「人の道に外れたお前に言われたくはない——」

ゆつくりと、両手で短剣ダーツを取り出しながら、ブレイド・ブラッカーは構える。

レザ、ラザ、ティカイナもそれに続く。

「——クックック、貴様とはいつか決着をつけなければならんと思っていた——」

嬉しそうにリック・ザキユールは言う。

背中 of 長い刀を音ひとつ立てずに抜き放つ。

そして、それを逆手持ちにする。

「くたばれッ！！ ブレイド・ブラッカー！！」

一斉にリック・ザキユールを含むザキユール暗殺団が襲いかかってきた。

それと同時に、オレと対峙していたユースも斬りかかってくる。

紫色のオーラが放出される剣を、凄まじいスピードで振り下ろしてくるユース。

オレはブレイド・ブラッカー直伝の合わせをする。
が、しかし。

鼓膜が破れそうな甲高い音が響いた。

それと同時に、剣と剣はピタリと止められる。

！？ そんなバカな！？

これで、普通なら持つている剣は吹き飛ばされるはずだ。

「ほう——。この剣を止めるとは——。しかし！」

オレの足が宙に浮いた。

何てパワーだ。

こんな細い身体の何処にこんな力が——。

背中から地面に落ちるオレ。

ゴホツゴホツと咳き込むオレへ、更に攻撃を仕掛けてくるユーネス。

それを、ラムド・ガルが止める。

剣と剣がカチ当たり、辺りに飛び散った小さな破片のひとつが、オレのほつぺたを切った。

「はっはっは——。ラムド・ガル。強いという噂を聞いていたが、この程度か——！」

鏑迫り合いをしているラムド・ガルの手がブルブルと震えている。それをあざ笑うかのように、力を込めるユーネス。

「ぐ……っ……」

「オレが居る事を忘れちゃ困るぜ」

斬りかかると見せかけて、オレはフェイントをきかせる。

「むっ！？」

鏑迫り合いに夢中になっていたせいか、ユーネスは見事に引っかった。

すかさず、オレは水面蹴りをする。

それは呆気なく命中した。

無様に背中から地面に落下するユーネス。

その間に、サツと間合いを取るラムド・ガル。

オレは倒れたユーネスへ更に攻撃を仕掛ける。

部活では禁止されていた、『突き』をユーネスのどてっ腹目掛けてお見舞いする。

当たる瞬間ユーネスは身体を転がし、切っ先はピカピカの床へ直撃。

まずい——！ 右手が痺れた！

サツとユーネスは飛び起きると、再びオレに斬りかかってくる。とんでもない速さだ。

オレはすかさず防御態勢に入る。

再びユーネスの剣に合わせをしようとした瞬間、ルミニオンの借り物の剣が。

どんな剣、斧を受け止めようと傷ひとつ入らなかったルミニオンの剣が——。

真つ二つに——折れた。

*

*

*

襲い掛かってくるザキユール暗殺団に短剣ダーツを次々と投げ、命中させていくブレイド・ブラッカー！

レザ、ラザ、ティカイナも遅れを取らない。

「この強さ——。前以上だ——。嬉しいぞブレイド・ブラッカー！」

嬉々として刀を振るうリック・ザキユール。

それを、鮮やかに受け流すブレイド・ブラッカー。

一般兵なら、ここでバランスを崩すはずが、リック・ザキユールは、それすら受け流す。 攻撃の受け流し合い。

その間、ラザ、レザ、ティカイナは次々と暗殺兵を倒して行く。残る暗殺兵は僅かだ。

そして、一人の暗殺兵がティカイナの前に出る。

「あら、久しぶりねノイエル」

短剣ダーツを目の前の女暗殺兵に投げつけながら、ティカイナが口を開く。

ノイエルと呼ばれた女暗殺兵はそれを避けると、
「ふん——。ティカイナか。相変わらずブレイド・ブラッカーにくつついているようだな」

そいつは、アルステールの格好をして頑吉を殺そうとしたあの暗殺者だった。

「私の格好をして、ブレイド・ブラッカー様を誘惑して、見破られて、フラれて、アタマにきて、ザキユール暗殺団に入った。相変わらず単細胞みたいね。アンタは」

逆手持ちにした短刀を振るうティカイナ。

それを受け流し、反撃するノイエル。

その額に血管が浮かぶ。

「相変わらず——癪な女だ!!」

感情に任せ、思い切り横に一閃したクナイのような短剣は、ティカイナから見事に受け流された。

バランスを崩すノイエル。

「それが、単細胞だっていうのよ」

ティカイナの短刀がノイエルの身体に命中。

ノイエルは身体を痙攣させると、地面に崩れ落ちた。

横で最後の一人を切り捨てるレザとラザ。

ヒュッと短剣に付いた血を振り落とすと、ブレイド・ブラッカーの援護へまわる。

*

*

*

致命傷の軌道を描くユーネスの剣はラムド・ガルが放った白い盾によって変えられた。

オレは折れた剣から手を離し、必死に転がった。

床にめり込むユーネスの剣。

すかさず、ラムド・ガルが斬りかかる。

床にめり込んだ剣を抜こうと、力を込めるユーネス。

「殿下！！ お覚悟を！！」

ラムド・ガルの剣が、横へ一閃される。

ユーネスは目を剥いた。

血飛沫が上がる。

床にビタビタと鮮血が飛び散る。

ユーネスの表情が苦痛、悔しさ、憎悪に満ちる。

致命傷だ。

もう、こいつは死ぬ――。

しかし。

「カスどもの分際でええええっ！！」

血を床に撒き散らしながらも、ユーネスは剣を引き抜き、更に襲い掛かってくる。

何て執念だ――。

「殺す――殺す殺す殺すコロスううううっ！！」

手負いとは思えないスピードで、ラムド・ガルに斬りかかるユーネス。

ついにラムド・ガルの剣が、真っ二つに折れた。

そして、鎧ごと肩口にめり込む。

「うぐっ！！」

激痛に歪むラムド・ガルの顔。

「おりゃあああああっ！！」

オレはユーネスに向かって突進する。

そして、地面を蹴ってジャンプ。

ブレイド・ブラッカー直伝の飛び蹴りだ。

それはユーネスの側頭部に命中した。

2メートルほど吹っ飛んで、ユーネスは床に転がった。
手応えがあった。

オレは更にユーネスへ殴り掛かろうとする。
しかし。

「うわっ!!」

赤いものが目に飛び込んできた。

ユーネスが、自分の血をオレに浴びせたのだ。
途端に視界がゼロになる。

「ふははははっ!! バカめ!!」

立ち上がったらしい。ユーネスの気配が近付いてくる。

オレはたまらず、後ずさりをする。

しかし、足に何かが当たり、オレは無様に転んだ。
ちくしょう——目が見えねえ——。

「うおおおっ!!」

ラムド・ガルの気合を発する声。

ヒュンと折れた剣を振る音。

「邪魔だあああっ!!」

「ぐあっ!!」

ドスンという音。

弾き飛ばされた。

一体、どうなった!?
くそっ!

オレは無我夢中に地面を探る。
何かが手に当たる。

折れた剣の切っ先だった。
夢中でそれを掴むと手に痛みが走ったが、ユーネスの気配がする
方向に投げつける。

「はははははっ！！ 何処を狙っている！！」

遠くの方で硬いものが壁にぶち当たる音が聞こえた。
更に近付いてくる気配。

オレは必死に地面を転がった。

「ぐうっ！」

右のふとももに激痛が走る。
斬られた。

「ぬおおおっ！！」

ラムド・ガルの気合を発する声。

ユーネスの気配が遠ざかる。

そして、ドスンという音。

ユーネスが吹っ飛んだのか？

オレは必死に地面を探る。

何かが指先に当たった。

オレはそれを拾い上げる。

「当たれ！！ こんちくしょう！！」

そしてユーネスの気配がする方向へ、渾身の力を込めぶん投げた。
風を切る音が瞬時に遠ざかり、何かに当たる音が聞こえた。

「――」

当たったのか！？

くそっ！！

オレは目を袖で擦った。

少しだけ、視界がはつきりしてくる。

やや赤い色が混じった景色が見えはじめる。

床の上で大の字になって、ユースは絶命していた。

その眉間には、ルミノンの剣の切っ先が深々と刺さっていた――。

*

*

*

徐々に、部屋が暑くなってくる。

火が広がってきている。

「――死んだか。契約終了だな」

リック・ザキュールはブレイド・ブラッカー達と間合いを取る。

そして、煙玉を地面に叩きつけた。

あつと言つ間に濃い煙が立ち込めて視界を遮る。

「むっ！？ 逃げるか、リック・ザキュール！！」

後を追おうとするブレイド・ブラッカー。

しかし、既に姿はなかった。

「ふん――。貴様との決着は、また今度だ。会えたらの話だな――」

遠くから声が響いてくる。

それを最後に、殺気は消えた。

「くそっ――逃がしたか――」

＊

＊

＊

オレ達は、真っ赤な炎に包まれ燃えさかる城内を、必死に走った。激しい炎は、大理石の壁にも燃え移り、さらに激しさを増す。進んできた道は火災により崩れ落ちて、回り道を余儀なくされる。そうこうしている間に、火の手は更に広がってくる。

「くそっ！！　ここもダメか！！」

崩れ落ちた元扉だった所は、瓦礫に埋まり行く手を遮っている。

「こつちだ！！　こつちへ回るぞ！！」

ラムド・ガルの誘導に従い、オレ達は必死に逃げる。むせ返るような焦げた匂いが立ち込める廊下。

辛うじて均衡を保っている天井から、焦げた大理石の小さな破片が降ってくる。

「危ない！！　ガンキチ！！」

ドンとブレイド・ブラッカーに突き飛ばされる。

その瞬間。

ズンという音が鳴り響き、ブレイド・ブラッカーの身体は、オレの代わりに巨大な瓦礫の下敷きとなった。

「ブレちゃんッ！！」

「ブレイド・ブラッカー様！！」

オレとラザ、レザ、ティカイナ、ラムド・ガルは渾身の力で、熱を帯びた瓦礫を持ち上げようとする。

しかし、全員が力を合わせても、その瓦礫が動くことは無かった。「バカ者！！　拙者を助けるヒマがあったら逃げろ！！」

苦しげな声で、ブレイド・ブラッカーは叫んだ。

瓦礫の間に微妙な隙間があったのか、ブレイド・ブラッカーは生きていた。

「でも！！」

いつの間にか、オレの目から涙が溢れていた。

「いいか、ガンキチ。拙者の教えた通り修行を繰り返すのだ。そう

すれば貴殿は立派なシャドウキラーになれる。拙者が居なくとも、大丈夫だ」

「嫌だ！ ブレちゃん、絶対助けてやる！！」

オレは再び全力で瓦礫を持ち上げようとする。しかし、やはりビクともしない。

「無駄だ！！ 早く行け！！」

「嫌だ！！ 助けるんだ！！」

再び、瓦礫を持ち上げようとする。

無駄とわかっていても――。

上の階で轟音が鳴り響く。

振動が足に伝わってくる。

「早く行け！！」

ブレイド・ブラッカーの声。

しかし、それでもオレは躊躇った。

レザ、ラザ、ティカイナも思いは同じ。

また、上の階から轟音が鳴り響いてくる。

このままじゃ――危ない。

「行けーッ！！」

ブレイド・ブラッカーの鬼気せまる声から押し出されるように、オレ達は走り出した。

オレの目から、止めどなく涙が流れる。

ちくしょう――。

ブレイド・ブラッカー――。

オレの師匠――。

*

*

*

しばらく走った所で、

「ごめん、みんな。坊や。ここでお別れ」

ティカイナが急に立ち止まり、呟いた。
その目から、涙が流れている。

「ティカイナ！！ 何故だ！！」

驚くオレに答えることなく、ティカイナはオレの頬にキスをする
と、

「ごめん……。坊や……」

踵を返し、燃えさかる廊下へ戻っていった。

「ティカイナ！！」

後を追おうとして、ラザ、レザに止められる。

「ダメ！！ 行きましようガンキチさん——」

ふたりとも泣いていた。

そして、目で訴えている。

止めてはダメ！ って——。

*

*

*

空を焦がすほどの勢いで燃えていくクリスエルム城——。

憎しみも、掛けがえのない物も、全てを燃やし、灰にしていく——。

辛うじて脱出を果たしたオレ達は、呆然として、それを遠くから眺めていた。

陰ながらオレを守ってくれていたシャドウキラーの一人、ティカイナ——。

そしてオレの師匠、ブレイド・ブラッカー——。

様々な思いを、オレはひとつの言葉にして、叫んだ——。

「ちくしょおーッ！！」

エピソード

全てにカタが付いたオレ達は、レミユリアに、アルステールに報告するべく、本拠地へと戻った。

しかし、本拠地へ戻ったオレに、一番聞きたくない言葉が――。

「アルステールが――。アルステールが――」

真先に走ってきたのは、レミユリアだった。
その目は涙に濡れている。

オレは、走った――。

アルステールの寝ている部屋へと――。

「アルステールッ!!」

勢い良くドアを開け、オレは転がるようにアルステールが寝ているベッドへ行く。

周りには本拠地に残っていた仲間全員が、アルステールを見守っていた。

出来る限り手を尽くしただろうシエルフィスはオレを見ると、自分が立っていた場所を譲った。

真っ青な顔のアルステール。

オレが側に来ると、アルステールは微かに目を開けて、かすれかけの声で喋った。

「あ――。ガンキチ――。帰って――きたんだね――良かった――」
「ああ、終わったぜ。全部な」

息も絶え絶えなアルステールの手を、オレはしっかりと握った。

「これで……。やっと……。姫様も……。王国も……。平和に――」

「すっかりしろよ。お前らしくない」

「ゴメン……。デート……。行けない……。かも……。しれない――」

「約束を破るんじゃないやねえよ。オレが帰ってきたらデートするって言うただろ？」

ポタポタと、オレの涙がアルステールの手を濡らす。

「はは……。ガンキチ……。って……。泣き虫……。だったんだ――」

「これは汗だ。オレは目から汗が出る身体だって言っただろ？」

だんだん手を握ってくる力が弱くなってくる。

オレは必死に離すまいと、握る力を強める。

アルステールの命を、離さないように――。

しかし、オレの願いは――。

「ゴメン……。ガンキチ……。そろそろ……。お別れ……。みた
い――」

「――ちくしょう！ 約束を破るのか？ お前はオレとの約束を破るってのか！？」

「ほんとうに……。ごめ――ん――」

「待てよ。お前にはな、オレとのハッピーなエンディングがあるんだよ！ 勝手に死ぬんじゃないやねえよ！」

「ガン――キチ……。ボク――」

「ちくしょう！ ちくしょう！！」

握っていたアルステールの手が、オレの頬に伸びる――。

「――ガン――キチ――あい――し――て――る――」

その手は、オレの頬に触れる事はなかった。

力なくパタッと布団の上に落ちるアルステールの手。

冗談だろ？

冗談だよな？

はは——オレはこういう冗談は嫌いなんだよ。

「アルステール？ アルステール！？」

オレは必死に揺らした。

アルステールの華奢な身体を揺らした。

こうすれば、戻ってくる気がした。

すぐに目を開けて、オレの名を呼んでくれる。そんな気がした。

だけど、アルステールは返事をしてくれなかった。

まだ、こんなに温かい。

こんなに——温かい——。

こんなに——あたたかい——のに。

「アルステール——！！」

*

*

*

オレの旅は終わった——。

シナリオは全て読んだ——。

読みたくない部分まで読んで——。

森の中——。

オレは、物を言わなくなったアルステールと、この森の中で、約束を果たしている。

約束は守らないとな——。

……。

「おい。アルステール。オレとお前はここで初めて会ったんだよな」

アルステールを抱き抱えて、オレは森の中を歩いた。
後ろの方には、レミュリアとラムド・ガルが付いてきている。
しかし、オレ達の近くには来なかった。
気を利かせてくれてるんだろう。

「ここら辺で、お前に胸を斬られて――。レミュリアちゃんが、捕まえてくれて手を差し出したよな」

わつと泣きだすレミュリア。
オレは涙をぐつと堪える。

「オレはな、この辺で寝てたんだぞ。気付いたらここに居たんだ――」

多分、ここら辺だろうと、おぼろげな記憶を頼りに歩く。
そして、全てを思い出すかのように、目を閉じた――。

* * *

ん？

あれ？

ここは何処だ！？

オレはさっきまで――。

そうだ、レミュリアとラムド・ガルは！？
オレの腕に居たはずのアルステールは！？

と、辺りを見回すが、周囲は真っ暗で何も見えない。
足元も、真っ暗。

立っているのか、浮かんでいるのかまるでわからない。

軽い吐き気をもよおす。

『コラコラ。吐くな』

何者かの声が聞こえてきた。

「ん！？ 何だ！？ 誰だ！？」

『お前の目の前に居る』

目の前？

目の前と言われて、その通りに目の前を見た。

黒いローブを着た、いかにも怪しげな奴が、目の前に立っていた。白黒の仮面をつけていて、顔がよくわからない。男か？ 女か？

『私が何者か気になっているようだな』

白黒仮面の怪しい奴が喋った。

ややビビりながらも、オレは言い返す。

「当たり前だ！ オレをいつの間にかこんな所へワープさせて、いきなり出てきたお前を気にならないヤツの方がおかしい！」

『——そうだな。私の名はマスター・Gとでも言っておこうか』

白黒仮面の怪しい奴、マスター・Gは名乗った。

「ますたあじいだと？ ふざけた名前だな」

『それはご挨拶だな。まあ、それはさておき、お前は見事に私の作ったシナリオをクリアしてくれた。最後の方なんか、涙ものだったぞ……グスン』

オレは、その言葉にカツとなった。

「野郎！！ ふざけるな！！」

マスター・Gに殴り掛かる。

しかし、当たる瞬間空を切った。

『直情的な奴だ。まだ話は終わってないぞ』

別の場所に、いつの間にか瞬間移動しているマスター・G。

こいつ、一体何者なんだ？

『私はな、人間が生きていることを実感させるきっかけを与える使者なのだ。そのきっかけを、お前の好きなファンタジー系RPGの世界観で構成してやったのだ』

「やかましい！！ ぶつ殺す！！」

オレは再度パンチを繰り出す。

しかし、またもス力する。

『話にならん奴だ。もういい。真のエンディングはお前自身で作ってくれ』

マスター・Gがそう言った瞬間、オレは目まいのような感覚を覚えた。

「うつ——。ちくしょう——。何をしゃ——がつ——た？」

辺りが瞬時に、目も開けられないほど明るくなった。

そして、ゆっくりとマスター・Gの姿が霞んで消えていく——。

*

*

*

今度はちゃんと地面があるようだ。

背中に布団の感触がある。

「んきち——」

ゆっくりと、視界がはつきりしてくる。

「がんきち——」

それと同時に、声が聞こえてくる。

今度は、誰だよ？

「頑吉！！」

目の前で、オレの身体を揺する奴が居る。

何だ？ 何だ？ 乱暴な揺すり方しやがって——。

「頑吉！！ ちょっといつまで寝てんの！？」

視界が完全に戻った。

目の前でオレを揺すっていたのは——。

「アルステール！？」

オレは思わず叫んでしまった。

髪の色目の色こそ違うものの、髪形、顔、形、全てがピッタリとアルステールに一致する。

しかも、オレが通う高校の制服を着ている。

「えっ？ 誰よ、あるすてーるって」

ハテナ顔をするアルステールに似た女。

「アルステール！ アルステール！！」

オレはガバツと起き上がり、そいつをお構いなしに抱きしめる。

「きゃああああっ！？ ちょ、ちょっと、頑吉、寝ぼけるのもいい加減に——」

ぎゅううううう。

「く、苦しいー！」

「アルステール……。生きてた……」

華奢な身体まで、匂いまで同じ。

こいつは、間違いなくアルステール。

「ちよつと、生きてたってどういう——？　そ、その前に、離してっ！　苦しいから！」

オレの腕の中で喋るアルステール。

何か、違和感を感じた。

女言葉？

あいつは、女言葉で喋ったっけ？

まあ、いいか。

それにしても……。

じたばたと、妙に元気がいいではないか。

オレはアルステールを離すと、真正面からその顔を見つめた。見れば見るほど、色違いのアルステールだ。

「な、なな、何を考えてるのっ！　朝っぱらからまったく！」

顔も真っ赤つかで、何と可愛いことが。

「何をそんなに照れてるんだ。あれほどキスした仲なのに」

「そそそ、そんな子供の頃のことなんて覚えてないわよっ！」

子供？　何を言っとるか、つい最近だったのに。

「忘れてるんなら、思い出させてやろうか？」

もう、正直自分を抑えられなかった。

この可愛い唇を奪いたくて仕方がなかった。

「きゃーっ！！　ちよ、ちよつと、待って！！　こんな、こんなムードのない時になってイヤー……はぶっ！？」

唇に吸い付いた瞬間、アルステールは固まって動かなくなった。

「……っ」

アルステールが愛しくてたまらない。もうバカップルなんて呼ばれようとかまわない。

今はとにかく、アルステールに触れたい——。

唇を離すと、呆然とオレの顔を見つめて、

「うつ……、ひっ……、ひっく……」

泣き出してしまった。オレだって泣きたいんだぞ、お前に逢えたんだから。

「こんな所で、ファーストキスだなんてえ、しかも無理矢理。えっ……えっ……」

「何？ もう何度もしてるじゃないか」

「あんな子供の頃にしてたのなんか、カウントに入らないのお……ぐすっ」

何だか話が噛み合っていないのは気のせいかな？

少し冷静に考えてみよう。

冷静に――。

「――って、ここ、オレの部屋じゃねえか！」

そうなのだ。今気づいた、オレは自分の部屋のベッドで上半身を起こして、目の前の色違いアルステールを抱きしめてはキスしたのだ。

長いことむこうで生活していたからか、ここのことがなかなか思いつけなかった。

「ええと、とりあえず、オレは今から何をするんだっただけ？」

「もう、知らない！ 遅刻しようとして、私は知らないもん！」

ただだっ！ と走り出そうとするアルステールを、オレは慌てて腰に腕を回して引き留めた。

「あっ……」

「ちょ、ちよつと待て、オレの話を聞いてくれ」

後ろから腰に腕を回して、オレはアルステールを抱きしめるような形になっていた。

その甲斐あつてか、アルステールは耳まで顔を赤くしつつ、おとなしくなった。

「えーと、今から、学校に行く、で、いいんだよね？」

「あ、当たり前じゃない……」

「ところで、お前はアルステールでいいんだよね？」

「何、その外人みたいな名前――。私の新しいニックネームでも思

いついたの？」

「どうやら、本当に違うようだ。」

それにしても、本当に色違いのアルステールとしか思えない。

「いや、そういうわけではない」

「――寝ぼけすぎだよ。ずっと私のこと、世羅^{せい}って呼び捨てしてたのに」

――せら！？

急速に、記憶が元に戻ってくる。

まるで超高速でパズルを完成させたかのように、一つ一つのピースは的確に素早く空白に埋まっていく。

――思い出した。

ほとんど顔パスで人の家に入り込んできて、こうしてオレを毎朝起こしに来る幼馴染みがいたことを――。

まるで空気のような、側にいるのが当たり前すぎて、気付かなかった存在が――。

尾崎世羅^{おのざきせい}――。

オレの幼なじみで、物心ついた頃にはもう隣にいて、何をするにも行動は一緒に――。

「世羅――」

「な、なによ」

あの時言えなかった言葉が、次から次へと思い浮かんできた。それを言おうとした時には、あいつはもう――。

だから、今、こうして温かさを感じられる今のうちに、その言葉を伝えておきたい。

あんなイベントが起きて、間に合わなくならないうちに――。

「オレ、お前が好きだ――」

「――えっ！？」

「気まづくなるのが嫌で、ずっと、言えなかった」
世羅の身体がぶるぶると震えだした。

「あ、あ――」

「こつやって、また毎日起こしに来てくれるか？」

「う、うえっ、えっ……」

また泣き出した。泣き虫だな、こっちのアルステールは。

「ダメか？」

「ひっく、ひっく。——ずっと、ずっと待ってた、の、その、言葉——ぐすっ」

「今までずっと、黙っててごめんな」

「ぐすっ、こんなムードのない告白なんて、私たちくらいだよ、絶対」

世羅のほっぺに、自分のそれをこすりつける。今度は嫌がらなかった。

もう愛しくて愛しくて、どうにかなりそうだった。

「それじゃ、私たち、恋人って言っても、いいんだよね？」

「当然だろ。そうじゃなきゃ意味がない」

「う、嬉しい——。嬉しいよお頑吉——」

身体をくるっと回転させて、真正面からオレに抱きついてくる世羅。オレはそれを優しく受け止めた。

「——あ、学校、遅刻しちゃう」

肩越しに映った目覚まし時計を見て、世羅は身体をパツと離れた。「それじゃ。腕組んで行くか」

向こうのアルステールとしたいと思っていた事のひとつを口に出してみた。

「——ねえ」

「何だ？」

「本当に頑吉？」

「当たり前だろ」

「今までにないくらい、すごい積極的」

「好きだからな」

「——なんだか、夢を見てるみたい」

「オレを起こしに来て、いつの間にか眠ったか？」

「起きてるよ。まだ何だか信じられないって言ってるの」

「まあ、すぐに信じられるようにしてやる」

とりあえず、学校に行く準備をしなければならない。

いちやつくのはその後にくらでもできるだろう。

「とりあえず、オレの着替え、見てくか？」

「わっ、みみみ、見ないよっ！」

慌てて部屋を出て、ドアを閉めた世羅。

それを微笑ましく思いつつ、オレは高速で着替えを済ませた。

それから軽く朝食を摂った後、晴れて恋人同士の登校タイムが始まった。

腕を組んで歩く隣の世羅が、愛しくてたまらない。

周りの人間の目なんか気にならない。

むしろもつと見せつけたかった。

「ねえ、頑吉」

「ん？」

「デートとかもしようね。いつくらいがいいかな？」

「今日だ」

「早っ！」

「ダメか？」

「ううん。いい」

「じゃあ約束だ」

「うん、約束——」

今度は、破るんじゃないぞと、オレは頭の中で思った。

どうやら、オレの旅は終わったようだ。

今度こそ、オレはハッピーなエンディングを見てやる。

このアルステール……じゃなくて世羅と一緒に——。

『ゲームクリア、おめでとう——』

誰かが、そうオレに言ったような気がした。

T H E
E N D

エピローグ（後書き）

まずは読んでくれてありがとうございます。

初めて書いた長編小説なので色々とメチャクチャな部分もあります
が、その辺はご容赦を（汗

感想とかいただけると幸いですm（　　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384h/>

仮想現実世界戦記

2010年10月8日13時30分発行